

となりの相模さん

ぶーちゃん☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

3学期を迎えた2年F組は席替えを行うことに。そんな席替えイベントにうんざり気味な八幡だが、予想外の新たな隣人の予想外の行動にさらに戸惑うことに…

目次

| | |
|-------------------|-----|
| 席替えと相模さん | 1 |
| 忘れ物と相模さん | 8 |
| アメと相模さん | 16 |
| 回顧と相模さん | 26 |
| 心配事と相模さん | 36 |
| 道草と相模さん | 45 |
| 憩いの場と相模さん | 53 |
| 招かれざる来客と相模さん | 61 |
| となりの相模さん | 74 |
| 【特別編】 バレンタインと相模さん | 90 |
| 【特別編】 バレンタインと相模さん | 99 |
| 【特別編】 バレンタインと相模さん | 110 |
| 【特別編】 バレンタインと相模さん | 122 |
| 【特別編】 バレンタインと相模さん | 132 |

席替えと相模さん

冬休みが終わると、学校生活の新たな1年の始まりであると同時に、2年生としての最後の学期でもある3学期が始まる。

てかなんで日本で年度の始まり4月なの？ややくしくはない？

そんな、残すところあと僅か3ヶ月弱の高校2年生生活だということにも関わらず、うちのクラスは席替えを行う模様である。

いや本当に意味が分からない。今それを行う意味ってなに？

ご存知の方も多いかもしれないが、この席替えというイベント、我々のようなスクールカーストの日陰者にとっては、クラス替え初日に並ぶほどの残虐イベントである。

もうこれは本当やめた方がいいと八幡思うの。幸せになるのは極々一部のリア充共だけで、ほとんどの人間にとってはロクなイベントじゃないからねコレ。

「うっわー、マジ席替えとかやだわー！マジ勘弁して欲しいっしょー」
「それな」

「ホントそれ」

ああやって嫌だ嫌だと言いながらもどこか楽しげにしてる連中（主に戸部周辺）だけだよ喜んでんの。

あとはああやって口には出さなくても、秘かに思いを寄せてる相手の隣の席になれたら…なんて微かな望みを抱いている青春謳歌な恋愛脳な奴らだけ。

でもそいつらこそが俺らのような日陰者にとっては一番の加害者だったりするから手に負えない。

だってそいつら、いざ隣の席が俺だと分かると露骨に嫌な顔すんだもん。どれくらい露骨かといえば、新しいラジコンを買ってもらったスネ夫が、初めて遊び始めた直後にジャイアンに遭遇しちゃった時くらい露骨さ。

あれって、ある意味ジャイアンの鋼メンタルを尊敬しちゃうよね。

そんな、ジャイアンの大物ぶりに感動しちやつてる俺の思いとは裏

腹に、席替えイベントは着々と遂行されていく。

教卓の上に置かれた担任お手製のボックスから、クジ引き方式で新たな席へと充てがわれていくか弱い俺たちは、さながら出荷を前に仕分けされていくだけの家畜のようだ。

「うわー！俺、お前の隣かよー」

「えー……？あんたが隣なのお？」

などとそこかしこでテンプレのように行われるやりとりをしているお前らは、なんでぶつくさ文句を言いながらもそんなに楽しそうにしてるのん？

そりやそうだ。お前らはまだ知らない。真に嫌がる時ってのは、そんな風にバカみために騒げはしないものなのだ。

真に嫌がる時、それはMU・GO・N。人って、本当に嫌な時って絶句しちゃうのよね。

八幡知ってるよ？だって、数えきれないくらいの経験談だもの。

しかしそんな俺にも唯一の望みがあるのは言うまでもない。

なにつて？そんなの決まっているだろう。この席替えイベント発表と同時に、キラキラした目を俺に真っ直ぐ向けてきた天使のそばに、毎日居られるかもしれないという望みだよ！

そんな天使が今まさに担任お手製ボックスからクジを引く。

天使は引き当てたクジの数字を一瞥すると、クルリと俺が居る方向に身を翻し、両手で持ったクジを胸元にかざして頬を染めて恥ずかしそうにはにかむ。

やだもう可愛すぎじゃないかしら戸塚たんったら！わざわざ俺に数字を見せてくれたんですけど！

「はちまーん！僕は1番だからねっ」

って声が聞こえてくるようだ。

よし、2番、もしくは隣の席を引き当てたら戸塚に結婚を申し込もう。俺、この戦いが終わったらあいつと結婚するんだ！

そして遂に俺にクジ引きの順番が回ってきた。

神よ、俺の残りの寿命を全て捧げてもいいから、どうか戸塚のそばへ！神じゃなくて悪魔に祈っちゃった。

しかし引き当てた数字を目の当たりにした俺は力なく崩れ落ちる。なぜなら、戸塚の引き当てた数字とは真逆。そう、このクラスの総人口の数と同じ数字だったのだから…。

俺は生涯忘れる事はないだろう。遠目から俺の数字を確認した戸塚のシユンとした哀しげな顔を。俺の戸塚にあんな顔させるとは、神も悪魔も絶対に許すまじ。

*

俺は自分が充てがわれた席へと向かいつつ途方にくれていた。

この席は窓側最後列。常であれば誰も喜びずであるろう特別席である。

だがしかしそれはあくまでもリア充限定での話。なぜならこの席は、そのリア充の溜まり場になりやすい席だからである。

つまりは2学期まで、休み時間や昼休みにいつも三浦達が騒いでいた場所なのよね、ここ…。

これでもし隣やその周辺に三浦、もしくは前に葉山でも来ようものなら、この場所は間違いなくトップカーストの社交場と化すであろう。ちなみに由比ヶ浜だと逆に気を使っちゃいそうだからマジ勘弁。

いや、なにも三浦や葉山、由比ヶ浜だけではない。たとえば戸部や大岡たちであろうとも、この(リア充限定で)居心地の良い場所ならば、わざわざ女王ご一行様が遠征してくる可能性さえありうる。

そのさい下民はただ遠くへと追いやられるのみ。

昼休みはどうせベストプレイスだろうって？

馬鹿を言っちゃいけない。さすがの俺も、雨の日は自分の席で食うんですよ。どんなに居心地が悪かろうとも、雨の日ばかりは自分の席しか居場所が無いんですよ。

つまり雨の日はトップカーストに囲まれながらメシを食うしかないという地獄。ていうか、購買から帰ってきた時に俺の席って残ってるんだらうか…？

頼む！戸塚と真逆の席になってしまおうという憂き目にあつたんだから、せめて隣の席に来るのがトップカーストグループではありませんように！

その願いが叶うのであれば、新たな隣人女子からの露骨なガツカリ視線などいくらでも我慢しますから！

そんな願いを、今度こそ神か悪魔が聞き入れてくださったのである。う。

幸いにして俺の隣の席にやってきたのは、トップカースト女子「では」無かった。

隣の席で、俺の存在を確認して愕然と佇むそのトップカースト「では」ない女子。

そこには、トップでは無く序列2番目のカーストグループの中心人物たる相模南が、顔を真っ赤に紅潮させて俺を見下ろしていたのだった。

あかん、これもう終わりのやつや…。

*

相模南。俺とこいつには浅からぬ因縁がある。

因縁もなにも俺が一方的に忌み嫌われてるだけだけど。

ぶっちゃけ俺は相模に対して、特にこれといった感情を持ち合わせてはいない。ただ、役立たずで使えない相模を罵倒して嫌われたっただけの、単なる他人という関係性だ。

ただしそれは俺から見た場合である。相模から見たら、俺は間違はなく忌むべき相手。

自分よりも遥かに下の地位の分際で、クラスで上位の自分を罵倒して人前でみつともなく大泣きさせた憎むべき相手に他ならない。

つまりなにが言いたいのかと言うと、俺の新学期は早くも終了しました。

だってそうだろう。この窓際最後列の席はトップカーストないし高カーストグループの溜まり場であり社交場。

相模がこの席に着くということは、つまり休み時間や昼休みに、こいつの取り巻き共がこの場に集合するという事なのだ。

うっわ…想像しただけでも息が詰まりそうだわ。文化祭直後、俺の悪口を学校中に垂れ流したグループが隣の席に集まるとか、それなんて拷問？これから俺は休み時間の度に、これだけの至近距離からどん

だけの蔑みの視線と嘲笑を受けて過ごさなきやならないの？

ハア：これは昼休みに限らず、休み時間の度にどっか行かなきやならないのかもな…。

俺は未だ隣で真っ赤になって憤怒の表情を浮かべている相模の熱のこもった視線をヒシヒシと感じつつ、頭を抱えて机に突っ伏すのだった。

*

あの悪夢の席替えから数日。結果から言えば、俺はかなりの肩透かしを食らっている。

なぜかといえば、隣の相模さんが休み時間の度に自ら取り巻き共の席へと向かうからだ。それ故にこの席は休み時間になると不可侵の空間となる。つまりは誰も近寄らない俺のボッチプレイス。席替え前と変わらないでやんの。

まあそこは俺が死ぬほど嫌いな相模である。極力俺の近くには居たくないであろう。

授業中とかは隣からちよくちよく視線を感じるものの、基本的に一切関わることなく、予想に反して快適な毎日を送れている毎日に、俺はすっかり油断していた。

その日も授業はつつがなく進んでいき、次は数学の時間。数学ということは、すなわち睡眠時間とイコールで繋がる俺である。

当然ながら俺は授業開始と同時に惰眠の体勢を取ったのだが、そこで事件は起きた。

不意に弱々しくクイクイと引っ張られたブレザーの袖。

はて？授業中だと言うのに、戸塚が愛らしく俺を呼んでいるのだろうか？

なんだよ戸塚く、今はまだ授業中だぞく？仕方ないな、結婚するか…なんて無益な妄想をしながら引っ張られている方に視線を向けると、そこには…。

「……は？」

そこには、林檎のように顔を赤々と染め上げた我が隣人相模南が、

もじもじと俺の袖をクイクイ引つ張っていたのだった。

*

「…なんだよ」

「…あ、や」

まさか相模から話し掛けられる日がこようとは夢にも思わなかった上に、なんだか遠慮がちなこの態度。

なんなの？同じ空気吸うのそろそろ限界だから、ちよつと5時間くらい息止めててくんない？とか言うつもりなのかな？

訝しげな視線で相模を見ると、相模は相変わらずもじもじしたままスカートをギュツと握り、分かりやすいくらいにゴクンと喉を鳴らした。

「あ、あの…ウ、ウチ、その…きよ、教科書忘れちゃって…ちよつと見せて欲しいな、と…」

「は？」

まさかの青春イベント『教科書見せて』である。

嘘だろ？あの相模が、俺に教科書を要求してくる…だと？

「…あ、ご、ごめん…無理なら、いい…です」

えっと…誰？なんか俺の知ってる相模じゃないんだけど。なんでそんなに見るからにシユンとしちゃってんの？

あまりにも予想外な相模の応対に、軽く呆気にとられて固まる俺ではありますが、こういう態度をとられちゃうと、悲しいかな小町に訓練されたお兄ちゃんスキルが自動的に発動してしまうのですよ。

「…チツ、ほらよ」

ポイツと相模の机に数学の教科書を放ってやると、相模は俺の顔をポカンと見つめる。

「…え、い、いいの…？」

「あ？お前が見せろって言ってきたんだろ？」

「そうだけど…ホ、ホントに…？」

「…いらねえんなら返せ」

「いやいやいや、いるいるいる！あ、ありがと」

「おう…」

なんだよこれ、すつげえ調子狂うんだけど…ホントこの子どちらの相模さん？

嬉しそうに照れ臭そうにホツと胸を撫で下ろしてる相模の姿は、あの文化祭での蛇を思わせる狡猾さとか一切感じない。

「あ、でも比企谷は…うい、一緒に見ないの…うい」

「ああ、俺は数学捨ててるから気にすんな。授業が終わったら、適当に机に置いてくれりゃあいい」

「そ、そっか、その…ありがと…」

あまりにも調子の狂う相模の素直さに、俺はそのまま無視して机に突っ伏す。

てか、こいつヒキタニじゃなくて比企谷って言ったか…？

ハア…本当によく分かん。

こういうよく分からん時はとっとと寝るに限るな。

俺はいくら考えても無駄だと悟ると、即座に意識を放棄するのだった。

——目が覚めるとすでに授業は終わっていた。

机には、遠慮がちに置かれた数学の教科書が一冊。どうやら相模は休み時間に入ったと同時に教科書を俺の机に置いて、取り巻きの所に向かったようだ。

あ、これあれかな？もしかして酷い落書きとかされてるやつかな？まあ数学の教科書を使うことがない俺には大した痛手にはならんからいいけども。

何の気なしにペラペラと捲った教科書には、落書きではなく一枚のメモ用紙が挟まれていた。

はて？俺の教科書に見覚えのないメモ用紙？なんだこれ？

そのメモ用紙には、とても女の子らしいカラフルな色で書かれた可愛い文字と顔文字が。その書かれた内容を確認した俺は、さらなる思考の迷宮に足を踏み入れざるを得ないのだった。

「ありがとっ (*、▽、*)」

忘れ物と相模さん

隣人に教科書を貸してやった翌日、俺はさらなる衝撃の光景を、今まさに目の当たりにしている。

「あ、あの…比企谷、きよ、教科書忘れちゃったから、見せて欲しいんだけど…」

え、どゆことなの…？

*

昨日は本当に意味が分からなかった。あの相模が俺に教科書を見せて欲しいと懇願してくるなんて、どう考えても有り得ない。

いや、この世の中には有り得ない事など無いのだと言う人も居るように、たかがあれしきの事を有り得ないなどと言うこと自体がナンセンスなのかも知れない。

だがしかし、普通に考えたらやはりどうしても有り得ない事なのだ。

——相模ってああ見えて実は勉強の虫だったりとか？だから教科書を忘れたくらいで授業が疎かになるのがどうしても許せない、とか…？

——もしくは実は進級がヤバいくらいの成績で、いま授業を疎かにしている場合じゃない、とかか…？

ふむ、まあどちらかと言えば後者の方が実にらしい気がするのだが、それでもあの相模だよ？

たぶんこの学校内で、一番俺を嫌っているであろうあの相模。

無駄にプライドばかり高く、そのくせどうしようもないヘタレ。仕事も責任も他人に押し付けてすぐ調子に乗る、自分を可愛がり過ぎるあの相模が、大嫌いな俺なんか頭に下げてまで教科書を見せてもらおうとするだろうか？

あまつさえ素直にゴメンと謝ったり、ありがとうとお礼を言ったり、トドメは可愛い顔文字メッセージとききたもんだ。

ハア…なんか逆に恐くて教室入りたくないわー。相模の隣に座りたくないわー。

などと登校中ずっと不毛な思考にとらわれながらも、気付けば俺はしつかりと自分の席に着席していたのだった。

ここまでどうやって辿り着いたか記憶が全く無いんですけど。いやー、習慣って怖いよね。

「お、おはよ…」

なん…だと？なんか隣から挨拶が聞こえてきたんですが。戸塚か？戸塚なのか？

だがしかし、この声は悲しいかな戸塚の声とは違うんだよね…。

そう、きのう不覚にも俺にお兄ちゃんスキルを発動させやがったあの人物の声である。

恐る恐るではあるものの、そちらの方向へとチラリ一瞥してみると、相模はすでにこっちは向いていない。

が、俯き気味のその顔から覗く頬と、ショートカットから覗くその耳は、昨日と同じように朱色に染まっているのだった。

「…うす」

——は？なに俺挨拶とか返しちやつてんの？バカなの？バーカバーカ!!くそ、朝から顔も体も超熱いわ。

なんかもう相模の方を向くのが照れ臭くなってしまった俺は、極力そちらを見ずに鞆から教科書やらノートやらを机に移す。

でもちよつとだけ気になってしまい、ついチラリと横目で見てしまった相模の俯きつぱなしの横顔が、なんか嬉しそうにニヤニヤしてたんだけど。「なにこいつマジで挨拶返してきてやんの。笑えるんだけどー、キモッ」とか嘲笑ってたのかね〜（白目）

それから授業を1つ2つこなし、次は3時間目の現国か。平塚先生だから絶対に寝れないやつね。

目を完全に覚ます為にトイレに顔を洗いにいき、予鈴と共に席へと戻ってきた俺に、あの衝撃の光景が待ち受けていたのだ。

「あ、あの…比企谷、きよ、教科書忘れちゃったから、見せて欲しいんだけど…」

——だからどゆこと…？

*

「…は？なんでだよ…今日も忘れたのか…？」

「…うん。昨日家で予習してたら、また忘れちゃったみたいでさ」
「ほーん…」

「なんなの？相模っていつからドジッ娘属性とか身に付けたの？」

「こいつはドジッ娘じゃなくてダメツ娘だろ？ダメダメツ娘まである。」

他人（俺）を見下す事しか脳がないような、あの高慢ちきな相模が実はドジッ娘だったとか、なんだよ少しだけ萌えちゃうじゃんかよ、などと頭の片隅で思いつつも、それとはまた別の思考も頭を過らざるを得ない。

なぜなら次の授業はしつこいようだが現国なのだ。

昨日であれば捨ててる数学の教科書だったから貸してやれたけど、今日はそれは無理。絶対無理。

だって貸しちゃったら俺が教科書忘れたって見られちゃうんでしょ？あの独身に。

寝たらファーストブリット。起きててもセカンドブリット。なにこの積みゲー。

ちよつとゲームバランスが悪いんじゃないですかね。

「あ、ごめん…やっぱいいや。迷惑掛けちゃうの悪いし…あ、あはは」
あまりにも理不尽なクソゲーレベルのゲームバランスに悩んでいると、相模が申し訳なきように自身の願いを取り下げた。

…だからそのシユンとした苦笑いは俺を容易に殺すんですよホント。

小町ちゃん？君の日頃のスパルタ訓練のおかげで、今日はお兄ちゃん、無事にお家に帰れそうもないよ…。

「…ほれ」

仕方がない。今日は平塚先生と生徒指導室でとことん語り合うか（拳で一方的に語りかけられるだけだけど）…と半ば人生を諦めた俺は、昨日同様に相模の机に教科書を放ってやるのだった。

「え、マジで…？いいの…？」

「いやだから見たくないんならいいから」

「いやいやいや、いるいるいる！」

なにこれデジヤヴ？こんな光景昨日も見たよ？

「で、でも今日は現国だよ…？比企谷だつて教科書ないとマズくない？ウチに貸しちやつたら、平塚先生に怒られちゃうって！」

——こいつ…それ分かつてんなら教科書見せてとか言ってくんじやねーよ…。

「あ？仕方ねーだろ。教科書は1冊しかない。使用者は2人いる。だつたら解は1つしかないだろが」

…だよね？それで間違つてないよね？こういう経験に乏しいもんで、これ以外に答えが分からないんだよ八幡は。

そんな俺の台詞を聞いた相模は、スツと俯くとポツリとなにかを呟いた。

「…そっか、やっぱアンタって、こういうやり方で人を助けちゃうんだ…」

生憎俺は難聴系主人公ではない。ちなみに難聴でもなければ主人公でもないという意味である。

耳聡いモブキャラなども俺です。

そんな耳聡い俺でさえも聞き取れないくらい小さな小さな囁きを放つた相模は、次の瞬間ガバツと顔を上げる。

その表情はどこか悲しげでもあり悔やんでいるようでもあり、また、恥ずかしいながらも決意を固めたような、そんな表情だった。

「…アレだよね、比企谷っていつもボツチだからこういう発想ってないよね。よいしょ！」

そう言った相模は、自身の机と俺の机をピタリと合わせる。

え、なにしていますのん？近い近い近い。なんかいい匂いがしちゃうから！

「…ま、まあアンタと肩寄せあつて授業受けるとか超嫌だけど、ウチが見せて貰う立場なんだからしょうがないよね」

そう憎まれ口を叩きつつ、相模は教科書を並んだ机の真ん中に広げる。

「ホ、ホラ、こうやって一緒に見ればいいじゃん。平塚先生に聞かれたら、ウチが忘れたから見せて貰ってるってちゃんと言うし」

「お、おう」

いや、「おう」じゃねーから。こんなの恥ずかしすぎんだけど。

「比企谷が忘れたなんてなると平塚先生にキツイお仕置きされるだろうけど、ウチなら大丈夫だしさ。ね？」

…チツ、なんだよその笑顔。相模がそんな笑顔を俺に向けてくるとか、すげー気持ち悪いんだが。

どんくらい気持ち悪いかというと、真っ赤な顔した俺が、頭をガシガシ掻きながらこんな台詞を吐いちやうくらいに気持ち悪い。

「……………好きにしてくれ」

——あ、気持ち悪いのは俺でした。てへ！

その後、平塚先生がF組にご到着と同時に窓際最後列を驚愕の眼差しで凝視した挙げ句、ページを捲ろうとする度に手やら肘やらが当たつちやつて、授業中も気持ち悪く照れ続けている俺に向かって呪詛の念を送り続けてきたことは言うまでもない。

お願いだから誰か幸せにしてあげてください。

*

現国を終えたあとは、昨日の数学を終えた時と同様、特に相模と関わることなく1日が過ぎていった。

その間チョコチョコと隣の席の方向から視線を感じたのは気のせいのはず。

てかなにちよつと意識しちゃってんの？俺って結構キモくない？

あ、それはいつものことでした。

帰りのホームルームまで無事に終わらせると、クラスメイト達は各々が思い思いの青春という名の放課後を過ごす為のゴールデンタムがやってくる。

教室に残って騒ぐ者や部活動へと向かう者。

そんな中で俺はその中間をゆく者なのである。騒がず教室に残つ

て部活動に勤しむのだ。

要は部活までのボツちな時間潰し。だってあんま早く行っちゃうと、ホームルーム後しばらくのあいだ三浦達とお喋りする事が定例化してる由比ヶ浜に怒られちゃうんだもん。

なんで先行っちゃやし！って怒るくらいなら、その偏差値低そうな身の無いガールズトーク(笑)を早めに切り上げてもらえませんかね。そんなわけで、俺はある程度の時間が過ぎるまで、いつものようにポーつと教室内を見渡していたのだが、不意に隣人と目が合ってしまった。

「……あ」

「……あ」

突然俺と目が合ってしまった相模は、フイツと前を向くと所在なさに教科書やノートを鞆に仕舞い出した。

なんていうのか、あたふた？って言葉が良く似合うくらいの慌てっぷり。

てか、俺は適当に教室内を見渡してる内にたまたま目が合っただけだが、それってつまり相模はその前から俺を見てたってことだよな？

なんだ？俺、またなんか相模に恨まれるようなことしたっけ？

わちやわちやと荷物を仕舞い終えた相模は、もう一度改めて俺の方へと視線を寄越すと、ちよつと不満げな表情？…いや、違うな。なんか照れくさそうな表情を浮かべ、なんと手を胸の高さで小さく振ってこう言ってきたのだ。

「…じゃ、じゃあね」

「え…あ、ああ、おう」

まさかの別れの挨拶である。急な挨拶とかに対応できないエリートボツちな俺は、もちろんキモくどもりまくったけれども。

しかしこれで今日は朝の挨拶と別れの挨拶を相模と交わしてしまった事になる。

なんだよこのまさかの隣人付き合い。俺史でも稀に見る光景なんだけど。

すみません嘔吐しました。ちよつと見栄張っちゃったんですけど、実はこんなの初めて！

その初めての隣人付き合いを、まさかあの相模とする事になるだなんてな。人生って分かんないもんだぜ。

俺からの挨拶の返事を受け取った相模は、またフイツと顔を逸らすとギクシヤクとした謎の動きで教室をあとにしようと動き出す。

が、しかし今日のイベントはこれでは終わらなかつた。ふええ、もうお腹いっぱいだよ…。

「きやつ」

ガチャンという音と共に相模の小さな悲鳴。あまりにも慌ただしく動いた為に、どうやら自身の椅子に足をぶつけてつまずいたらしい。

そしてその勢いのまま相模は鞆を落としてしまい、中の教科書等を床にぶちまけてしまったのだ。

なんだよマジでドジツ娘萌えとか狙ってんの？

しかしここで助けになど入れるわけもないコミュ障な俺は、隣で恥ずかしそうに鞆の中身を拾う相模をただ眺めるのみ。

下手に拾うの手伝ったら「ちよつと！勝手にさわらないでよキモい！もう最悪…あんたなんかに触られたらキモくてもう使えないじゃん…！」なんて、通報の危機も待ち構えてるしね！

「…ん？…あれ？…お、おい、それって…」

そんな自身の悲しすぎる想像に密かに涙していると、拾っては鞆へ、また拾ってはまた鞆へ…と片付けられていく内に次第に減ってきた散乱物の中に妙な物を発見してしまい、俺はつい声を上げてしまった。

「あ」

相模が素の声を出して光の早さで拾ったソレは…：…そう。なぜか忘れたとか言ってたはずの現国の教科書だったのだ。

焦って鞆へとソレを詰め込んだ相模は、なんともバツの悪そうな苦笑を浮かべて一言。

「ア、アレ…？おつかしいなく…。な、なんかウチ、忘れちゃったと

勘違いしてたみたい……。も、もしかしたら鞆の奥に入ってたのかも、ア、アハ……」

などと宣うと、逃げ帰るようにピユっつと走って行ってしまった。

——なんだこれ？……どんだけドジッ娘さんなんだよ相模さん……。

アメと相模さん

新たな年、新たな学期が幕を開けてから早3週間ほど。俺のポツチライフは通常営業で平和である。

ほんの僅か変わった所と言えば、ここ2週間ほどで6日くらいは隣人に教科書を見せたというくらいか。

いやいや全然通常営業じゃねえよ、大変革だよ。

てかこれちよつとおかしくないですかね。2週間と言ってみても、週末を除いてしまうと登校日は10日なわけだ。

そのたった10日中の6日教科書忘れるとか、ちよつと異常じゃね？この隣人。

もうドジツ娘じゃなくてアホの子のレベルだよ。

いや、由比ヶ浜だつてこんなな教科書を忘れる事なんてない。だってあいつが教科書持って帰ってんの見たことないもん。それももう本末転倒だよ！少しは勉強して！

しかし教科書を見せる意外は特に交流は無い。多少あると言えば、あの日からは毎日朝と夕の挨拶を欠かさずに交わすようになったつてことくらいだな。

あ、あともう1つあったわ。それは今まさに、この授業の終わりと共に交わされるであろうやりとりだ。

授業終了のチャイムと共に、相模は満足そうなホクホク顔でガタガタと机を元の位置に戻す。これはもう見慣れた光景のひとつなのだが、そのあとに続くこのやりとりこそが、俺と隣人の挨拶以外のもう1つ交流と言えるだろう。

「…比企谷、その…今日もありがと。はい」

こいつはここ最近、そう言つて胸ポケットからガサゴソと小さな包みを俺に手渡してくるのだ。

それは、どうやら教科書を見せることに対しての対価らしい1個の飴玉の包み。

教科書を見せるようになってからどれくらい経った頃だろうか。こいつはその授業が終わると、こうやって飴玉をくれるようになって

た。

「…だから別に要らんっつーに…。てか飴玉忘れずに持つてくんなら教科書忘れずに持つてこいよ…」

そう言いながらも右手を差し出すまでがここ最近のデフォである。だつてこいつ、最初のころ拒否したら、またあのシユンとした顔したんだもん。

あれ反則だろ…。

「バ、バカじゃないの…？ 飴はウチの重要なエネルギー源なんだから、忘れる忘れない以前に自然と持つてきちゃうに決まってるじゃん」

と、相変わらず意味の分からない理論を振りかざして悪態を吐きながら、俺の手に触れないよう少し高い場所からポトンと落とされた飴玉は、今日もいつもと同じようにほんのり温かい。

…ぐ、だからこれホントやめて欲しいんだよね。なんで飴玉が胸ポケットから出てくんだよ…普通そこに入れてくない…？

胸ポケットから出されたほんのり温かい飴玉とか、なんかちよつとドキドキしちゃうじゃん。

こいつ、この思春期の男心とか分かってんのかねえ。

「…まあ、明日は忘れないようにするから。……でも、もし忘れちゃつたらまた見せてよね」

俺に飴玉を渡し終えた相模は、プイツとそっぽを向くとテテツと取り巻き達の席へと走っていく。

そんな相模の背中を見つつ、今日も俺は飴玉の包みを解いて、まだほんのりと温かさの残る飴玉を口に放り込んでこうひとりごちるのだった。

「アホか…忘れる気まんまんじゃねーかよ」

あれかな？もしかして通学中の鞆を少しでも軽くしたくてわざと置いてきてんのかな？

ま、相模の体温で少し温かいこの飴玉が結構美味いから、そんなに悪い気はしないけれど。

——しっかし、なんか俺と相模つて、こうして考えると意外と交流

持ってんじゃん。

*

「ついにこの日が来てしまったか……」

4時間目の途中だというのに、ボーッと窓の外の寒々しい景色を眺める俺は、常であれば頭の中だけで考える思いを、つい口に出して呟いてしまうほど憂鬱な気分支配されていた。

なぜなら新学期が始まりこの席替えが行われてから、幾度となく悪夢として思い描いていたこの日が、ついに今日来てしまったのだから。

今日は朝から……いや、厳密に言えば昨夜からずっと冷たい雨が降り注いでいる。

これは数日前から予報されていた事である為ある程度は覚悟していたのだが、いざこうして現実にこの日が来てしまうと、やはり目の前が真っ暗になってしまうというものだ。

つまり何が言いたいのかと言うと、今日はこの席になって初めての教室でのランチタイムなのである。

これはかなりキツイ。なにせ俺は未だにマイスペースの昼事情を一切知らないのだから。

以前の俺の席は昼休みに入ると、序列何番目か知らん女子グループの荷物置き場という大役を果たしていた。

雨の日に購買から戻ってくる度に「え……？ 今日教室で食べるの……？」と語る目に晒されて、自分の席だというのに申し訳ない気持ちで一杯なまま、黙々とパンを咀嚼したものだ。なんだよ涙、まだお前の出番は早えーよ。

だが果たして今はどう使われているのだろうか？

普通に考えたらグループリーダーである相模がここの地主な以上、昼休みはやはりここが相模グループの溜まり場なのであろう。

その場合、俺の席はやはり荷物置き場として使われているのか？ それともバイ菌の如く触れないように扱われているのか？

やだ！ どちらにせよ俺に居場所無いよ！

だがしかし！俺には若き日から培ってきた苦い体験での経験値があるのだ。そんな嬉し恥ずかし体験での経験値を多く積むと、ある程度の自衛策は身に付くというもの。

そんな幾度の経験で今やかなりのレベルアップを果たした俺は、すでに自衛の為の策は打つてある。

なんと！俺は今日！すでに朝からコンビニでパンを購入済みなのだ！

フハハハハ！雨など恐るるに足りぬ！これならもう購買から戻つて来た時の、あの気まずい空気に晒されずに済むぜ！

まあ唯一弱点があるとすれば、昼休みスタート直後から「早くどっか行けよ」という視線に晒されてからの、「…は？…今日教室で食うのかよ：居なくなればいいのに」までのコンボが待ち構えているという点だろう。

あれ？むしろ状況が悪化してない？

だが仕方ない。今は以前のどこぞのグループとは違い、序列2番目、相模グループの溜まり場となっているであろう以上、こちらから先に動かねば俺の生きる道は無いのだ。

最近なぜか相模とはあまり悪い関係では無いものの（俺の一方的でお花畑な思い込みじゃなければね）、それはあくまでも相模個人の問題であつて、グループ内には適用されないのだ。

普段は挨拶しちやったり、肩寄せあつて教科書見ちやったり、おっぱい温度の飴もらちやったりはしていても、ひとたびグループが集まりグループ内で俺の悪口が始まつてしまえば、そんな相模も一瞬で敵に回るであろう。まあもともと敵視しかされてないのだから当然なのだが。

だが幸いな事に、俺の近くに居る事をなによりも嫌う相模は、休み時間の度に自ら取り巻きのもとへと赴くという行動原理を基本としている。

であるならば、昼休みに入つても一向に動き出さず、あまつさえ一方的に食事を始める俺を見れば、休み時間と同様相模も諦めて取り巻きのもとへと向かうに違いない。

それにより例え遠くの席から「今日あの人どつか行かないんだけどー：ウツザ」「えー：」「南ちゃん可哀想く」なんて会話が聞こえて来たのだとしても、そんなのは俺に言わせりゃ負け犬の遠吠えと一緒なんですよ！

どうよこのパーフェクトプラン。敗北を知りたい。

4時間目の授業も残すところあと僅か。

そんな完璧な作戦に酔い痴れている俺なのだが、先ほどから多少気になってる事が1つあるんですよね。

それは：隣人の様子がおかしい。

いや、ここ最近相模の様子がおかしくない事なんて無いのだが、今日の相模は今までに無いおかしな空気を放っているのだ。

なんか昼休みが近づくとつれて、妙に落ち着きが無いんだよね、この子。

ちなみに今日の相模はまだ忘れ物の申告はしてきていない。つまりお互いの机は本来あるべき姿の距離感ではあるのだが、それでも視界の端にチラつくんだよ。

ちよくちよく感じる視線はいつものことなのだが（いつものことなのかよ）、なんかモジモジソワソワしてんのが丸分かりなんだよね、こいつ。

どうしちゃったのかな？トイレ我慢出来なくなっちゃったのかな？これって今の時代セクハラ発言になっちゃうみたいだから気を付けて！

が、いまさら相模の乱心を気にしても仕方ないって事くらいは理解している。

なので俺は、相模からの視線も相模から発せられるモジソワ空気も意識の外に弾き出して、また窓の外の景色を眺めながら深く溜息を吐くのだった。

*

日本全土でお馴染みのチャイム音が校内に鳴り響き、ついに食事の時間が幕を開ける。

やっべー…なんで俺、自分の席で昼飯食うだけでこんなに緊張してんの？俺にだって安らぎの時間くらいあったってバチは当たらないと思うんだけどなあ…。

まあここまで来たら気にしていてもしよーがない。

先手必勝、俺は周りを気にする素振りなど一切見せずに、黙々と鞆からコンビニパンとマツ缶を取り出して机に並べる。

さあ相模よ、俺はここで食事をとるぞ！早くここから立ち去れい！さあ相模の取り巻き達よ、俺の捨て身の姿を確認したのであれば、今日は大人しく己の席にとどまるがよいわ！

そんな俺の願い通り、しばらく待っていても相模の取り巻き達はこの不可侵の領域へと赴いて来る事は無かった。

しかしここで想定外の事態が起きる。取り巻きは来ないのにメイが動かない。なぜか相模はずつとモジモジソワソワしたまま自席にとどまったままなのだ。

まあ気にしてもしょうがない。とりあえずここが溜まり場になる危機は回避出来たっぽいし、とつと次の行動に移ってこの態勢を磐石のものとしようではないか。

俺は相模を無視してパンの包装紙を破ろうと手をかけ…

「ひ、比企谷…！」

「ひゃいひゃい…！」

あまりにも突然声を掛けられたものだから、とんでもなく気持ち悪い声を出してしまった。

「あの、さ…こ、これっ」

気持ち悪すぎる声を発ってしまった自責の念に悶えている俺は一切目もくれず、相模はおどおどと立ち上がると、俺の机の上に少し乱暴気味になにかを置いた。

「…は…なにこれ」

それは、とても可愛らしい布に包まれた、1つの箱らしき物だった。

「…そ、その…ホラ、最近たまに教科書とか見せて貰っちゃってるからっ…お礼…？ってゆーか…？まあ……そ、そんな感じ…」

たまに…だと？

いや、今突っ込むべきはそこではない。尋常じゃないくらい真つ赤な顔してそう言い切った相模は、すごい勢いでピイツとそつぽを向くとそのまま着席して、なんとそのまま弁当箱を広げだしたのだ。

その相模の弁当箱は、俺の目の前に置かれた謎の箱と同じ布で包まれている。

——謎の箱…いや、これは間違いなくアレなのだろう。ここで無駄に自分を誤魔化そうとしたって、そんなのただの茶番だろ…。

相模は一切こちらを向かずに弁当を食べ始めると、まるで何かの言い訳でもするかのようにぼしよぼしよと呟き始める。

「きよ、今日さあ…ウチの友達、なんか他のクラスの子と約束あるらしくてさ…し、仕方ないから今日は1人で食べてる、みたいなの…？」
隣人に気が行ってしまっていて気が付かなかったが、そういう確かにいつも相模と一緒に居る連中が教室に居ない。

「あと、なんかお礼とか言ってもいつも飽ぼつかじや、ウチのプライドが許さないし…？あ、あとホラ、…あんたいつつもパンじゃん…？だからまあ、たまには米くらい食べたら…？って…か、感じ…？」
なんか全て疑問形で慌ただしく捲くし立ててくんなこいつ…。

「い、いやしかしだな…お前にこんなもの恵んでもらう謂われがだな…」
「……」

あ、これまたあかんやつや…。こいつずりーよ…。

「…じゃあ、いいや。…食べないんなら、そのまま返してくればいいから…ウチの夜食にでも、する…から」

なんなんだよもう…これで俺が折れちゃうまでがワンセットなの？

やれやれ…と頭をがしがし搔きつつも、こうなってしまうては俺の負けですはいはい認めますよ。

「あつ…」

いつものごとくシユンとしちやった面倒くさい相模だが、黙ってお

弁当包みを解きだした俺を見て嬉しそうに声を漏らす。

そんな相模からの緊張の視線をガンガンに受けつつ、お弁当包みの中からひよっこり顔を出したこれまた可愛らしい弁当箱の蓋を、少しだけ震える手でそっと開けてみた。

「おお…」

「……っ!!」

なんだかちよつと恥ずかしそうな相模からの熱い視線の中、ついに封印から解き放たれた箱の中から出てきたのは、……うん。正直に言ってしまうと、多少不恰好なおかずが所狭しと並ぶ弁当だった。

多少焼き過ぎだったりいびつな形だったりする卵焼きやハンバーグ等々。

一目見て「スゲー美味そう」とはお世辞にも思えない弁当ではあるのだが、逆にこの慣れて無い感がなんとも味わいがあり、なんつーか…一生懸命さがヒシヒシと伝わってくるというか、冷めきった弁当のはずなのに、なんだか温かい。

「け、結局食べんなら、始めつから有難くいただけっつーの…! バーカ…」

弁当の蓋を開けるまで、とんでもない不安感と緊張感を漂わせていた相模なのだが、俺が食べるのだという事を確認出来た途端に、得意の悪態を吐いて視線を正面に戻す。

正面を向いたあととも相変わらず小声で「ったく…」「マジムカつく…」とかボソボソ文句言いながら自分の弁当を食べ始めたお隣さん。

でもね、「もうそつちなんて全然気になりませーん」みたいな態度でおかずを口に運んでるみたいに装ってるけどさ、言つとくけど全然バレバレだからね?俺が一口目を食べ始めんのをソワソワと気にしてるの。

「…じゃあ、その……頂きます」

「うん…」

そして俺はいびつなハンバーグを口へと運ぶ。

やめて! 気にしてないフリしてるくせに、そんなにガン見しないで! こんなに緊張感のある食事初めてえ!

ついには口に放り込まれたハンバーグをむぐむぐと咀嚼してみる。多少焦げちやつて舌触りはよろしくないのだが…。

「あ、普通に美味しい」

見た目や舌触りはよろしくなくても、味に関して言えば十分及第点である。なんで俺こんな偉そうな上から目線なのん？

俺の口から出た褒め言葉なんだかんだか良く分からないそんな一言に、お隣さんが不満そうに噛み付いてきた。

「…は、はあ？普通にとか酷くない？マジ有り得ないんですけど。てかうちが作ったんだから、美味しいのなんて当たり前だっつーの。バ、バカじゃないの…？」

そうぶつくさ文句を言いつつ、こちらを一切見ないで自分の弁当を食べ進める相模の横顔は、そんな悪態を吐いているとは到底思えないようなニヤケ面だったのは、武士の情けで見なかつた事にしてやろう。

その後も2人して黙々と食事を続ける俺と相模。

会話するわけでもない。机がくつついているわけでもない。

一緒に昼飯を食べているというよりは、個別にボツチ飯をしているという風情の2人。

隣同士で個別にボツチ飯をしているというのに、食べている弁当は一緒という奇妙な絵面ではあるのだが、意外と悪くないかもな。

「…あ、比企谷」

そのとき不意に相模が語りかけてきた。

「あん？」

チラと横目で一瞥すると、相模はなんとも気まずそうにぼしよりとこぼす。

「…う、5限の歴史なんだけどさ、教科書忘れちゃったからまた見せてね。…それ、今日の分のお礼って事で…」

「は？」

いやもう開いた口が塞がりませんよ。なんで教科書忘れんのに他人の弁当作ってくんだよ。

それもう忘れるの前提で、先にお礼という名の賄賂を準備しといったって事じゃねーかよ…。

唾然としている俺に、相模はさらにこんな謎の契約を勝手に押しつけて、あとは知らん顔で弁当をむぐむぐと食べ進めるのだった。

「あー、あとさ…：どうせ比企谷って、雨の日の昼休みは肩身の狭い思いして教室で食べるじゃん？…だからま…：隣人のよしみで、しよーがないから雨の日はこうやって隣で食べてあげてもいいけど？…あと、どうせ自分の作るついでだし、あんたのも作ってきてあげる。教科書のお礼って事で」

…ったく、知らん顔してるくせに、その耳の色はマズいんじゃないの？

——俺と隣人の不思議な交流。

朝夕の挨拶、教科書の閲覧許可、あとはお礼の飴玉。

そしてこうして、今日からさらに不思議でさらに謎の交流が追加されたのだった。

それは、お礼の飴じゃなくて、お礼の雨の日のお弁当。

回顧と相模さん

一口、また一口と、むぐむぐおかずを咀嚼する隣人。

ハンバーグに卵焼き、唐揚げ、タコさんウインナーと、何かしら口に放り込む度にウンウン頷くその姿に、ひとつひとつをちやんと味わってくれているのであろう事が窺えて、ついつい口元が緩んでしまう。

大丈夫だよな？こんなみつともないニヤケ面、こいつに見られてないよね？

今まで料理なんかした事が無かったウチだけど、この日の為に何度も何度も練習を重ねて、いくぶん不恰好とはいえ遂にこうして形になったお弁当を、心から食べてもらいたかった男の子にこうやって味わってもらえて、さらに美味しいと言ってもらえたって事は、本当に天にも昇ってしまうくらいの喜びなのだ。

まあ『普通に』が余計すぎてやっぱムカつくけどね。ムカつきすぎて、また顔がニヤケちゃうつうの。

本当にこいつはどこまでも素直じゃない。こういうヤツだからこそ、ああいう形で他人に手を差し伸べてしまうのだろう。その為に自分が痛い思いをしてしまう事など厭わずに。

——あれはそう。2学期の終わり。

2年生になって2度目の終業式を迎えたあの日、ウチは比企谷に恋に落ちたのだ。決して実るはずのない悲恋に落ちてしまったのだ。

*

2学期の終業式。体育館で校長のつまらない長話に耳を傾けながら、ウチは今日もチラチラとある人物に視線を向けていた。

ウチには今、とても気になる男子が居る。気になるとはいつても、それは嫌悪の対象であり憎むべき相手。ウチの華やかだったはずの高校生活を台無しにくれた最低の男。

あいつのせいで全校生徒の前で大失態をやらかしてしまった。大恥をかかされてしまった。

本当に大嫌いで本当に憎い相手のはずなのに、ウチは体育祭の後くらいから、気が付くとあいつを目で追っていた。

——ウチは体育祭で犠牲になった。ウチが運営委員会で泣き叫んで恥を晒す事によって、崩壊寸前だった委員会がギリギリのラインでまとまる事が出来た。

あはは：犠牲だなんておこがまし過ぎるっての。あれはウチが色々とやらかしてしまったが為に起きた自業自得、因果応報。

それでも敢えて犠牲などと言って見たのは、自分がその立場に立ってみて初めて気が付けたからだ。文化祭でのあいつの行動の意味を。いや、あの時点ではまだきちんと気付けてた訳じゃない。なんなら今だってちゃんと理解なんて出来てない。

ただ、何となく頭の片隅でモヤモヤしてる思考の中で唯一理解出来る事は、あの文化祭で比企谷が犠牲にならなかったら、たぶんあの文化祭はとんでもない事になってたんだろうな…っていう漠然とした思いだけ。

でもそれは単なる偶然のはずなのだ。比企谷が最低の事をして、自業自得で犠牲になって、それがたまたま文化祭にとつての良い方向に進んだだけのはずなんだ。

だからウチが比企谷を嫌いな事には何一つ問題がない。

ウチは自分にそう言い聞かせながら、今日も体育祭以来なんとなく日課となってしまうていた比企谷ウォッチングに勤しむのだった。

——そんな終業式も終わり、学校をあとにしようと校門をくぐった時だった。

「さーがみさんっ！お疲れさまー」

「…えっ？」

不意に背中から掛けられたふんわりとした声。

その柔らかな声、優しい雰囲気は、わざわざ振り向かなくてもその声が誰の物なのか、ウチに如実に教えてくれていた。

「い、こんにちは。…お疲れさまです、城廻先輩…」

城廻めぐり元生徒会長。

苦いあの思い出。比企谷と奉仕部、あの人達と共に常に中心に居た、ウチにとつては容赦なく深く傷を抉ってくる、とても優しい先輩。

*

——明日から冬休みだし、私たち3年生は3学期に入ったら殆んど学校に来なくなっちゃうんだ。だから帰り道でせつかくこうしてご一緒出来たんだし、どこかでお茶でもしていこうよ——

そんな誘い文句で、ウチはあえなく捕まってしまった。

こんなに物腰の柔らかな優しい女性なのに、こういう時は有無を言わせぬ何かを持ち合わせている。

さすが元生徒会長。やっぱウチみたいな一般人とはどこかが違うんだろうな…。

学校からの最寄り駅、適当なカフェでお茶をするウチと城廻先輩。ウチは先輩と何を話せばいいんだろう。てかなんでウチを誘ったの？

城廻先輩がウチをあまり良く思っていないことくらいは理解している。

そりゃそうだ。生徒会活動をととても大切にしていたこの元生徒会長からしたら、文化祭と体育祭を滅茶苦茶にしかけたウチは、無能で無力で無責任のどうしようもない後輩のはずだよな。

こうしてニコニコとウチに話し掛けてきてくれること自体が不思議なくらいなだから。

だからこそ分らない。元来の優しさで、こんなウチにも分け隔てなく接してくれる素敵な人だっことは分かるけど、でも…それでもわざわざウチをお茶に誘うだなんて、とてもじゃないけど考えられない。

…唯一、もし唯一考えられる理由があるとしたら、それはたぶんウチにとつてあまり好ましくない会話をしたいから。

あの文化祭や体育祭をウチに振り返えらせて、反省を促す為。たぶんそれこそがこの先輩の優しさ。

席に着いてからずっとニコニコと世間話をしているものの、未だ核

心に触れてこない城廻先輩に内心緊張しつつ、そんなどうでもいい世間話に相槌を打ち続けている時間がただただ過ぎていく。

ウチの考えすぎなのかな？このまま世間話だけで終わるのかな？なんて、気持ちが弛緩しかけていた時だった。

ホットココアを一口飲んでふうと深く息を吐いた先輩が、不意に真剣で哀しげな表情を向けてきたかと思うと、ガラリと雰囲気を変えて核心を突く。

「あの、ね…？相模さん。いきなりこんなこと言っちゃってゴメンね。…たぶん私がこれから話すお話は、相模さんにとって、とっても辛いお話だと思うの。…でも、私は先輩として、元責任者として、そして…相模さんと同じ1人の加害者として、ちゃんと話しとかなきゃいけないって思うんだ…」

「……………え」

やっぱりそうか。城廻先輩がウチにとって辛いお話と言う以上は、それは間違いない文化祭と体育祭でのウチの失態の話なんだろう。うん、それは予想通り。

…でもなんで？ウチと同じ加害者って、どういうこと…？

緊張で強張るウチの顔を見ながら、城廻先輩は哀しそうな笑顔を浮かべる。

その弱々しい顔は、自分への失望、怒り、悲しみ、後悔、そんな負の感情がありありと窺えるものだった。

「…比企谷くん」

先輩がぼしよりと呟いたその名前に、ウチの心臓はドクンと飛び跳ねる。口から飛び出ちゃったんじゃないかと思ったほどに。

「…比企谷くんのお話なんだ。もしかしたら…もしかしたらなんだけど…、私から比企谷くんのお話をする事に、相模さんも心当たりがあるんじゃないのかな…」

「……………は、い」

ゴクリと喉を鳴らして力なく首肯するウチを見て、「そっか」と頷く先輩。

そして城廻先輩は語り始める。自身の後悔の念を。

「…私ねー、あの文実の時、比企谷くんにすっごい期待してたんだ。日に日にバラバラになってく文実で、いつつも面倒臭そうにしながらも、なんだかんだいって一番一生懸命お仕事をしてくれてた比企谷くんの事、すっごく頼もしく思ってたし、こんな後輩が居てくれるんだなあって、すっごく嬉しかった」

あの会議室での毎日を思い出してるみたいに、城廻先輩は遠くを見ながら言葉を続ける。

「それなのにあのスローガン決めの時の比企谷くんの発言で、私：ガツカリしちゃったの…もつと真面目な子だと思ってたのにな、つて、比企谷くんに言っちゃった」

辛そうに顔を歪める城廻先輩の目尻には、うつすらと光る物が溜まっている。

「…でね？…あのエンディングセレモニーの後にね、私はもつと酷い事を言っちゃったの。君は最低だねって」

エンディングセレモニー。ウチの最低最悪な思い出。

そしてその裏で城廻先輩は、比企谷にそんな事を言ってたんだ。

「…ホント駄目駄目な先輩だよ、私。何にも知らなかった癖に表面だけしか見ないで、あんなに真面目な子にあんな心ない事を言っちゃうなんて…：ホントは私をもつとしっかりして、私が比企谷くんがしたみたいにあの場をまとめなきゃいけない立場だった癖に、何にも知らずに彼一人を犠牲にして…：！」

——もうここまで聞けば嫌でも分かっちゃおう。城廻先輩がウチに何を言おうとしているのか。

あの体育祭以来、ウチが密かに考え続けていた事だから。

そして城廻先輩は言う。苦しく潤んだ瞳で、苦しい胸の内を。

「…相模さん。私達はさ、比企谷くんに助けられてたんだよ」

*

ああ、やっぱそうだよ。そうだろうなって思ってた。

でも認めたくないから、認めちゃったらウチのチンケなプライドが

傷ついちやうから、だから気が付かないように自分を誤魔化してただけなんだろう。

もしかしたら、誰かにこうやって指摘されるのを、心のどこかで待ってたのかもね。

なんにも言わずにただ俯くウチを見て、城廻先輩はキョトンと首をかしげる。

「もしかして…相模さんは、気が付いてた？」

「…あ、いえ。気が付いてたというよりは、城廻先輩のお話を聞いて、今ようやく…理解出来たって、感じですよ…」

すると城廻先輩は両手をポンツと合わせ、優しそうな笑顔で感嘆の声を上げる。

「そつか。相模さんは凄いね！ちゃんと自分で気付けてたんだね…。私なんて、文化祭のあとに1人でガツカリしてたらはるさんに怒られちゃったんだから。「あの程度の事も分からないなんてめぐりもまだまだだね」。ま、お姉さんに言っただけられるのはここまで。あとは自分の目で見て自分で考えてみな？」って。だから私はまた奉仕部に依頼を持ち掛けたの。もう一度比企谷くんを近くで見たかったから。そして体育祭運営と一緒にやって、ようやく気付く事が出来たんだ。……たぶん私じゃ、はるさんが言ってくれなかつたら分からず仕舞いだつたんじゃないかな…」

そう言う城廻先輩は、本当に心から自分に失望してるって感じた。でもそんなこと無いです。城廻先輩は自分の事をウチと同じ加害者って言うけど、あの件での加害者はウチ1人。先輩はウチの被害者ではないです。

比企谷に対して罪悪感を抱いてそんなにも胸を傷めているのも、それはウチからの被害ですよ…。

「…だからね、私は比企谷くんにちゃんと謝ろうって思ってるんだ。卒業式のあと比企谷くんの所に行つて、そしてお話するの。…あの時は本当にダメな先輩でごめんなさいって。そしてあの時は本当にありがどうねって。…でもね、もっと自分を大切にしなきゃダメだよ!?って、ちよつとだけ怒っちゃおうの」

そう言つて城廻先輩はようやくこの人らしい笑顔を見せてくれた。心の底から謝罪するのに、心の底からお礼を言うのに、それでも自分を大切にしない比企谷を叱るつてのが、なんとも城廻先輩らしい優しさだよね。

「だからね、いつか相模さんが気が付いた時に後悔しちゃうわなように、ちゃんとお話しておきたかったの。比企谷くんの不器用な真面目さと優しさを。…ふふっ、でも余計な心配だったね。私なんか言わなくたって、相模さんは自分でちゃんと分かってたんだもんねっ」

そんな嬉しそうな城廻先輩の微笑みを向けられて、ウチは胸が痛くて堪らない。

——そんなこと無いです、城廻先輩。

ウチはなんとなく気付いていながらも、自分のチンケなプライドを守る為に見てみぬフリをしてた卑怯者なんですから。

そんなに優しい微笑みを向けてもらえるような資格は、ウチには無い…。

そして胸が痛くて堪らない理由がもうひとつだけ。

自分のチンケなプライドを守る為に誤魔化してた気持ちを自覚してしまつたから。

たとえば比企谷がどんな気持ちでウチを救ってくれたのだとしても、いや…別にウチの為なんかじゃなくて、ただ文化祭を、雪ノ下さんを助けたいつて思つてただけなのかも知ないけど、それでもやっぱりウチからしてみれば、あいつは間違いなく捨て身でウチを救ってくれた、腐り目だけど素敵な白馬の王子様なのだ。

——そう。城廻先輩に自覚させられてしまったこの瞬間から、ウチは恋に落ちたのだ。決して実るはずのない悲恋に落ちてしまったのだ。

…本当は、もつとずっと前から恋してた癖にね…。

*

あの終業式から2週間。ウチは冬休みのあいだ中、ずっと比企谷の事ばかり考えていた。

クリスマスも大晦日も、年明けもお正月も、ウチの頭ん中はずっとあいつの事ばかり。

ウチは……一番恋なんかしちやいけない相手に恋をしてしまった。恋なんてする資格のない相手に恋してしまった。

出来ることなら謝りたい。全部謝って全部吐き出して、そして……ありがたいって言いたい。

でも……ウチにそんな度胸なんてあるわけ無いよね。

謝る？ありがたい？……バツカじゃないの？そもそも話し掛けられるワケないっての……。

ウチが話し掛けたら、比企谷はどんな嫌な顔するだろう。どんな嫌な態度を取られるだろう。

それを想像しちやったら、ヘタレのウチには声なんて掛けられるはずがない。

文化祭の時とおんなじ、体育祭の時とおんなじ。どうせウチはまた逃げ出すだけに決まってる。

そんな不毛な思考に囚われていたウチの冬休みはあつという間に過ぎ去り、気が付けば今日からもう新学期。

好きだって、恋しちやってるって自覚出来てから、初めて比企谷に会えるんだ！

そしてそんな比企谷に話し掛ける事も出来ずに、また一人バカみたいにこっそり眺め続ける日々が始まるんだ……。

なんだよ、この落差、なんだよ、この酷すぎる悲恋、あんまりだよ……。

……でもま、ウチにはこんな惨めな末路が相応しいんだろうね……。自業自得、因果応報。

自嘲気味で卑屈な笑みを浮かべながら、ついに3学期を迎えたウチを待ち構えていたのは、どうやら想像してたよりもずっと好きらしい、久しぶりに見た比企谷の横顔と、そしてまさかまさかの席替え。

本当にまさか過ぎる。まさか今さら席替えを行うなんて。でも席替えを言い渡されてから、ウチの思考はさらに比企谷で一杯になる。

——もし比企谷の近くになれたら、もし比企谷の隣の席になれたら、どれだけ嬉しくて…そしてどれだけ切ないだろう。

いや、いつまでいじけてんのよ相模南！

もし！もしも奇跡が起きて比企谷の隣になれたとしたら、その時は頑張ろう。比企谷に話し掛けてみよう。

いつかあの時の謝罪が心から出来るように、あの時のお礼を心から言えるように…！

別にこの切ない恋を実らせて下さいなんて言わないから、だから神様、お願いします！

そんな『もし当たったらなに買おう！』なんていう想像してる時が一番楽しい、当たりもしない宝くじに夢見てる人のように、ウチは担任お手製のボックスをジィっと見つめる。

——あつ…比企谷の順番だ。…なんでだろ？2学期に毎日目で追ってた時よりもずっと格好良く見えてやんの、ウチ。…ああ、やっぱり、こいつ好きかも。…あれ？くじを見た瞬間に目がどんよりと濁っていたぞ？そんなに嫌な席だったのかな。あ、戸塚さんと離れちゃったからか。ホントこいつ戸塚くん大好きだよ。そこは流石に引くかも。まあでもやっぱり好きだけど。

——ヤツバい、ついにウチの順番だ。どうせ近くになんて…ましてや隣になんてなれるはずもないのに、なにこんなに馬鹿みたいに緊張してんの？ダサすぎだったの。…ア、アレ？この数字って窓側後列の方だよ、ね…？さつき比企谷の奴、死にそうな顔して窓側後列の方向に向かってっただよに見えたけど、も、もしかして意外と近くだったりして…!?

——この新たな学期、新たな新年を共に過ごす事になった、ウチの新たな居場所。

その席へと辿り着いたウチの心臓がヤバい事になっている。どうしよう、バクバクと騒がし過ぎて周りの音が何にも聞こえてこない。

顔が：身体が燃え上がりそうなほどの熱を帯びて全く動かない。

情けない事に、身体が全く動かなくなってしまった。ヘタレなウチでは、残りの3ヶ月弱を共に過ごす事になる。新たな隣人の愕然とした視線から、しばらくのあいだ目を逸らす事が出来ずにいたのだった。

……神様、お願いしといてなんだけど、ウチ、こんなんじやちよつと頑張れないかしんないです…。

心配事と相模さん

「あー…身体痛てえ」

ホームルームも終わり、部活へと向かうために立ち上がった俺がボソリと呟く。

昨日のマラソン大会はマジでキツかった。葉山の野郎速すぎだったの。

あのあとにあれ以上のペースで全員ごぼう抜きとか、どんだけ化け物なんだよ。

まあなんとか依頼はこなしたものの、元々だらだら走るつもりだったマラソン大会を120%の力で走る羽目になった為、身体中が軋むように痛くてたまらん。

120%つつつても半分までだけどね。

「あ…」

すると重々しく立ち上がった俺を見て、お隣さんが何かを言いたそうに小さく声を漏らした。

普段とはちよつと違う弱々しいその声に訝しげな視線を向けてみると、なんだか物凄い遠慮がちな相模が俺を見上げていた。

「…あ、や…」

どうしたんだ？コイツ。てかこんな感じちよつと久しぶりだな。コイツがこんなに遠慮がちな態度してるのなんて、隣人になった当初以来な気がする。

「…どうかしたか」

「あ、んと…」

まごまごと慌てる相模は、目を泳がせまくってあはは…と卑屈に笑う。

マジでどうしたコイツ。

「バ、バイバイ…」

「へ？」

蓄めに蓄めた末にそれ？

いやだって、一昔前なら有り得なかった相模からの別れの挨拶も、

今や毎日行われるやりとりだろ。

なにをそんなに言い淀む必要があつたんだよ。

——とはいえ、たぶんコイツは他に何か言いたい事でもあるのだろう。ひと月の付き合い（隣人付き合い）の経験は伊達じゃない！

だから俺は相模にこう言つてやるのだった。

「お、おう……また明日な」

挨拶返すだけかよ。

*

まあ相模が何かを言いたそうにしていたのは良く分かる。

だってあいつ、俺が教室出るとき頭抱えてたし。

だが所詮は俺と相模の謎関係。どんなに毎日のように教科書見せようとも、何度か弁当貰つて一緒にランチタイムを過ごそうとも、それでも未だに俺達の間には会話らしい会話は殆ど無い不思議な関係なのだ。

どんなにあいつがおかしな態度だろうとも、あいつ自身が言つてきてくれなけりや、俺から詮索なんて出来るわけないじゃない。

いやホントすげー気になってますよ？でもやっぱり恥ずかしいんで無理ですごめんなさい。

と、我が校の小悪魔生徒会長が脳内に降臨しながらも、俺が向かうのは昇降口。

部活じゃないのかよつて？

いやだって部室行ったら雪ノ下が「昨日の疲れも残っている事だし、今日はお休みにしましょうか」って顔面蒼白で言ってきたんだよ。

君どんだけスタミナ値低いんだよ。昨日最後まで走つてないよね？

まあ正直な話、俺としても願つたり叶つたりな展開ではある。なんか由比ヶ浜も三浦達と用事があるみたいだしね。

ま、なんにせよ突然休暇になってラッキーって感じだな。身体痛いし、今日は早く帰つてソファーでのんびんだらりと過ごそうぜ！

そう意気揚々と昇降口に到着した時だった。

「あつ」

そこで掛けられた驚きと喜びを孕んだ声。

見ると、ちょうど帰宅するところだったのだろう件の相模が、下駄箱から靴を取り出ししている所だった。

*

「…おす」

モジモジして「おす」とか言う女の子って可愛いよね。オラわくわくすつぞ！

「…お、おう。いま帰りか」

「うん…えと、比企谷、は？…部活行ったのかと思ってたんだけど…」

「ああ、部室行ったら今日は休みなんだと」

「そうなんだ」

そこで打ち切られる会話。

ここ最近はずっとたまに話すようになったものの、やはりこうした不意の邂逅は苦手なんだよなあ…。

身構えておけるか否かっつてのは、コミュニケーションが苦手な人間にはかなりでかい要素らしい。

と思ったらそんなこと無かった。ソースはコミュニケーションが豊富そうな目の前の相模。

こいつもどうやらそういうのが俺並みに苦手みたいで、髪を弄ったりモジモジしたりと、この不意の邂逅に結構テンパっているらしい。

なんだよ、コミュニケーション豊富なヤツも俺と大して変わらんないんだね。八幡安心！

…ふむ、このままでいたらどちらも幸せにはなるまい。

そう考えた俺は、とつとつこの場から離脱する事にした。

「…んじゃ帰るわ」

靴を履き替えて相模に帰宅を伝える。

俺が空気を読める男で良かったね。感謝しろよ、相模。

「そだね」

そのまま振り向きもせず昇降口を出て駐輪場へと向かう俺なのだが、あれ？なにかがおかしいよ？

なにがおかしいって、背後に気配を感じる辺りがとてもおかしい。立ち止まったりせずに恐る恐るチラと振り向いてみると、なんか相模さんがとてとてと付いてきてますね。なんでー？

ああ、コイツがどこら辺に住んでるとかこれっぽっちも興味が無かったから知らなかったが、もしかしたら相模も自転車通学なのかな？ だったらしようがないよね。

なのでとてとてとくつついてくる相模など気にせず、俺は一路愛車を停めているポイントへと向かうのだった。

*

「……いやなんでだよ」

「なにが？」

きよとんと首かしげて「なにが？」じゃねーよ。なんでお前、俺がチャリの鍵を開けてんのをピッタリと後ろで待ってんだよ。

「…何してんの？お前」

「は？何もなにも、あんたが鍵開けてるから待ってんじゃん」

そりやそうだよね！ごめんごめん！

いやいや違うから。

なんで待ってんだよって話でしょ？

「そうじゃなくてな……お前も自分のチャリんところ行けよ」

「は？」

え？なんかおかしなこと言ったかな、俺。なんでそんなバカを見るような目で見られてるのん？

「ウチ別に自転車通学じゃないんだけど」

…ああ、そりやバカを見るような目で見ますよね。だって、存在しない物の所に行けてって指示されるんだもの。

「いやいや違いーから。じゃあなんでお前駐輪場に来てんだよ」

「…っ？」

すると相模はビクツとして、所在なさげに髪を撫で始める。

俯いた顔を真っ赤に染め上げたコイツは、唇をとんがらせて不満げに小さく呟く。

「だって…たまたま昇降口で顔合わせたんだから、一緒に帰るでしょ

…普通」

そうなの？リア充の間ではそういう習わしがあるものなの？そういう経験が無いから知らないんだけど、それが普通なのか。

もちろん断つてすぐさま帰りたい所ではあるが、俺のような世間のつま弾き者がリア充様の習わしに逆らえるはずなどないのだ。

「……さいですか」

そう答える事しか出来ない俺に、相模はなんだか恥ずかしげに髪を撫でながらも、「ん」と嬉しそうに返してきた。てかなんでさつきからずっと唇とんがりっぱなしなんだよ。

…あーもう、コイツが相模じゃなかったら、確実に勘違いして告白して翌日クラスで晒し者になってるところだったわ。晒されちゃうのかよ。

そんなちよつとだけ可愛……いくもなくもなくもない相模と、並んで校門まで歩き始める。

ん？歩くの？なんで俺チャリ通なのに歩いてんの？

「……てか一緒に帰るつつつても、チャリも無いのにどうやって一緒に帰んだよ」

なんなの？二人乗りとかいくらなんでも恥ずかしすぎて無理だからね？

そもそも俺の後ろは小町の指定席だし。

「そ、そんなの駅まで一緒に歩けばいいだけじゃん。いちいち当たり前のこと聞かないでくんない？バ、バカじゃないの……？」

「ああ、そう……」

…リア充つてのは面倒くさい人生送ってんのね。

チャリで来たのにわざわざ歩かなきゃなんないとか、どんだけ時間を無駄に使わなきゃなんないんだよ。タイムイズマネーって名言知らないの？

やはりボツチは常人よりも効率的に進化した優れた生命なのか。

つーか前々から気になってたんだけど、なんでコイツって俺を罵倒したあとに頭を抱えるのん？たまにほしよりと「またやつちやつた……！」とか聞こえてくるし。

しつこいようだけど俺は難聴系じゃないから、ボソボソ呟いたって結構聞こえちゃってんだかんね？

*

そんなこんなで、駅までの短い距離とはいえ、なぜか相模と一緒に帰る事になってしまった帰り道なのだが………えっと、なんなんすかね…。

一緒に帰る事を強制してきた相模が、校門を出てからもひとつことも喋らないで俯いたままなんですよね。

これって一緒に帰る必要くない？

いやまあガンガン話し掛けてこられても対応できなくて困るから結果オーライっちゃ結果オーライなんだけどね。

だがそれだけならまだいいのだ。コイツとはいつも一緒に居ても（語弊がありますね。あくまでも教室内で隣同士って話ですよ？）こうして一切会話のない事なんて良くあることだし、最近ではそれは不思議と気まずいものでは無くなって来ている。

認めたくはないが、コイツと無言で教科書を見てる時とか無言で弁当食ってる時とかは、まるで部室で文庫本読みながら美味しい紅茶すすってる時のような、暖かく安らいだ空気を感ずる時さえある。なんでは知らんけど。

だが今はまったく安らがない。超気まずいまである。だってさあ……さつきから相模が尋常じゃなく落ち着かないんだもの。

何か話し掛けてこようかとモジモジしては、あうあう言っただけ。さつきからそのループがずっと視界の端に入ってくるこの状況で、心が安らぐはずがないのである。

——ああ、面倒くせえ……何か話したい事があんならとつとつと話してこいよ…。

と、そこでふと先程の教室での光景が頭をよぎった。

そーいやコイツ、俺が部活行こうと立ち上がった時も、こんな風になにか言いたげにモジモジしてたっけか。

あの時は恥ずかしいからこつちからは何も聞かなかったが、これはこつちから聞いてやった方がいいのかしらん？

くっそ…心の底から聞きたくないんだけど、正直このまま駅まで歩くのはかなりキツイ。…はあ、仕方ねえなあ…。

「…なあ」

「…っへ!？」

いや、いくらなんでも驚き過ぎだろ…。そりゃ俺の方から話し掛ける事なんてかなりレアだけでも。

ドギマギと目を白黒させてる相模を無視して、俺は質問を続ける。

「…あー、なんだ…、なんか、言いたい事とかあんのか？」

「っー!」

ベベべ別に言いたい事なんてっー!…:…とかなんとかボソボソ言いつつ、相模は足を止めて固まつてしまう。

どんだけ嘘が下手なんだよ。

このままフリーズしちゃって、さらに貴重な時間を潰してしまうのか…と嘆いていると、俯いたままではあるが、意外にも相模は早々に口を開いた。

「…べ、別に大して聞きたくもないし、気になつてもいないんだけど…」

おん？結局話すのかよ。だったら最初っから話せよウゼエな。

「ま、まあせっつかくだし、聞いといてあげる…」

「あ、ありがとうございます…?」

なにこれ?なんで俺お礼言つてんの?

「あんだ、さ…、そのお…:…:…け…」

毛?…ここでまさかのムダ毛処理事情トーク?

俺男の子だからそういつたアドバイスとか出来ないよ?てか男の子だから、あんま女子のムダ毛処理事情とか聞きたくないんだけど。つてそんなこたあ無い。

そのあと相模が紡いだ言葉は、俺の予想とは180度ほど違っていたのだった。

「けっ…ケガとか、大丈夫なの……？」

「は？」

*

ケガ？なんだケガって。

コイツなんの話してんだ？

「…えと、なんの話？」

あまりにも斜め過ぎた相模からの質問に間の抜けた質問返しをしてしまった。

そんなポケッとした間抜け面を晒す俺に、相模はなんとも気まずそうに目を泳がせて弱々しく呟く。

「だ、だからさあ…き、昨日のマラソン大会でのケガよ…。だって比企谷、かなり最後の方によくやくとぼとぼゴールしたかと思ったら、足引きずって保健室に歩いてったじゃん…？だ、だから…：平気、なのかな…って…」

え、なにコイツ。あれだけずっと何か言いたそうにモジモジしてたかと思ったら、言いたい事ってソレなの？

てかそんなとこ見られてたのかよ…。

——アホか。…まさかあの程度の事を気にしてくれてたのかよ。てかケガ気にしてんなら駅まで歩かせんなよ…バカだなコイツ。

それにしてもたかが隣人というだけの間柄なのに、どんだけ心配性なんだ？コイツ。

こんなに良い奴だったっけ。バカだけど。

だから俺は、上目遣いで不安そうに見つめてくるバカで心配性なこの隣人に、満面の笑顔でこう言ってるのだ。心配すんなって、大したことないぞって。

「…おう、大丈夫だ。別にケガ自体はなんてことない。ま、身体中筋肉痛でバツキバキだけだな」

そんな俺の優しく素晴らしい神対応に相模は…。

「ふっ！あはは！」

笑った。もう超爆笑。

…あつれえ？そこは「良かったあ！」って笑顔返してきてくれるトコじゃないのん？

「なにそれオヤジ臭っ！つうかなんでそんなキモイドヤ顔!?ホント比企谷って笑えるよねー!」

そうでしょうそうでしょう。どうですかこの八幡の見事な道化っぷりは。

ふはははは！不安そうな女子に笑顔を取り戻させる為に、あえてピエロを演じてやったんですよ（白目）

…ちくしよう、俺の満面の笑顔ってキモイドヤ顔なのね…。

「大体さあ、なに比企谷のクセに葉山くんには張り合っちゃってんの？比企谷なんか敵うはずないじゃくん。身の程知らず過ぎー!」

引きつった半目になって睨む俺を横に、相模は未だに腹を抱えて笑い続ける。楽しそうでなによりです。

…つたくよ。心配してくれてたんじゃねーのかよ。

あまりにも不安そうに心配してくれてっからって、無駄に気を使っちゃって損したわ…。

しかし、はあく…と深い深い溜め息を吐いてガシガシと頭を搔いていたのだが、しこたま笑ってようやく落ち着いたらしき相模が、目元を拭いっつぽしよつと漏らした言葉が俺の鼓膜を揺らし、なんとも居心地悪く、なんともむず痒くなるのだった。

「…………良かったあ…………」

…バツカ、だから俺は難聴系じゃねえって言ってんだろが…。

道草と相模さん

人生初、異性との二人きりの下校。

……すいません見栄張りしました。異性どころか同性とも二人で帰ったことなんて無かったです。

え？戸塚？そりゃ戸塚とは一度学校帰りにムー大寄ったことあるけど、戸塚の場合は性別を語ること自体がナンセンスだし恐れ多いんで、ノーカンでことでオナシヤス。あれは一緒に下校したんじやなくて、天使にパラダイスへと導かれたと言った方が正しいのである。

とまあそれはさておき、そんな異性との初めての下校、その相手がまさか相模になるだなんて、一体だれが予想出来ただろうか？

……と、チラと隣を盗み見ると、未だ楽しそうにニコニコしている相模の横顔を見た俺がそんなことを思うのだった。

*

そんな帰り道もようやく終わる。もう駅は目と鼻の先。

駅で相模と別れてしまえば、そこからは通常通り、愛するマイホームへと自転車を走らせればいいだけの話だ。

ようやく……か。ぶつちやけた話、ようやくだなんてこれっぽっちも思っていないんだよなあ。なんていうか、意外と悪くなかった。

結構いいもんなんだな。俺と話して笑ってるヤツが隣に居る帰り道ってのは。

ま、こんなのは今日限りの特別だ。こんなイレギュラー極まりない下校がもう終わるからといって、別段どうということもない。

べ、別に終わっちゃう事が残念だなんてこれっぽっちも思っていないんだからね！

などと一人ツンデレ劇場を開演している内に、気付けば駅前に到着していた。

朝から雨でチャリで登校できなかった、という日でもなければ、こんな時間に近寄る事などない学校からの最寄り駅。

さすが最寄り駅だけあって、駅前結構な量の総武生で溢れている。

る。時間的に帰宅部組なのだろう。

そこで俺はふと気付く。そういや、この状況って…ヤバくない？

どうしよう、もしも今の状況を友達に見られたら、誤解されてからかわれちゃって恥ずかしいよう…！

あ、からかつてくる友達なんて居なかった。エリートボッチの僕には余計な心配でしたね！

——違うのだ。そんなお決まりの自虐ネタで笑いを取っている場合ではないのだ。

これは俺だけの問題ではない。というよりは、むしろ俺などどうでもいい。

問題なのは相模だ。こいつ、俺と一緒に帰ってる所なんて誰かに見られても大丈夫なのか？

最近が悪くない間柄ではあるものの、周りから見たらやはり俺と相模というコンビはどう考えても異常だ。

なにせ絶対的な加害者と絶対的被害者の俺とこいつ。席替えしてからこいつがあまりにも自然に隣に居過ぎて忘れそうになっていたが、俺は相模に心ない罵倒を吐いて泣かせた加害者なのだ。

そんな二人が一緒に帰ってる所など見られたら、どんな下らない噂を立てられるか分かったものではない。一時期の雪ノ下と葉山の低俗な噂などはまた違う、下手をしたら相模に災いが及ぶ可能性のある下卑た噂になりかねない。

まあ教室であれだけ教科書一緒に見たり、たまに隣同士で弁当食ったりしてりや、そんなの今更だろ…と思わなくもないが、あれはあくまでも教室内で一番目立たない、一番後ろで一番隅の席だからこそ出来る事。

伊達に高度な一人遊び大会を毎日催すヤツが現われたりなどしない、スペシナルな特等席なのだ。

ちなみに俺のとなりの相模さんは、そんな高尚な趣味は持ち合わせてないからね？

あそこで馴れ合っているだけならば（馴れ合つてるとは言っていない）誰も見ていないはずだ。うん。見てない見てない。見ていないはずだと思いたい。

しかしこの有象無象の目がある駅前という空間ではそういうわけにはいかない。

文化祭から続く俺たちの暗い関係を知っている人間は言うに及ばず、仮に俺たちの関係を知らない人間だったとしても、腐ってもカースト上位を誇るルックスの女子が、腐るまでもなく腐った目のキモい男子と一緒に帰ってる所を見られるのは、こいつにとってかなりのマインナス評価に繋がる事は間違いない。

半年ほど前、由比ヶ浜と行くことになった花火大会。あの花火大会で会った相模は、俺ごとときと一緒に居た由比ヶ浜を見て優越感を抱いていた。

たかだか俺と一緒に居たってだけで由比ヶ浜にあんな蔑んだ笑みを浮かべられるような相模なんだから、そんな俺ごとときと一緒に帰ったらこういう事態になることくらい、きっちり計算しとけよ…。

隣の相模を見ると、やはり先ほどまでの楽しそうな笑顔はすっかりと消え失せ、緊張と不安で表情を強ばらせ俯いていた。

こんな人目のつく所で俺と二人で歩いているというリスクに気付きはしたものの、自分から一緒に帰ると言い出した手前、それを言い出しづらいのだろう。

これは早く退散するべきだな。別に相模がどうなろうと知ったこつちやないが、知ったこつちやないはずなのだが、でも…：：：周りから蔑みの視線を浴びて嘲笑われるこいつの姿を想像すると、正直あまり面白くない。

だからこれは相模の為ではない。俺が気分が悪くならない為の、つまりは俺の為の行動なのだ。

「…じゃあな、俺帰っから」

そうと決めたら即断即決行動あるのみ。

俺はなるべく相模とは無関係な空気を装い、周りの連中から相模の連れと見られないよう気配を消してその場を去

「…ね、ねえ比企谷」
「れませんでした。」

え？なんでこいつ話し掛けてくるのん？

アホだろこいつ。いま話し掛けて来ちやったら、俺とお前が連れだと思われちゃうよ？

そんな心配を余所に、相模は耳まで赤くなった顔を俯かせたまま、俺のブレザーの袖をちよこんと摘んでクイクイと引っ張ってくる。

なにそれ可愛…いやいやそんな場合じゃないから。え、ちよつと意味分かんないんですけど。俺と一緒に居る所を周りに見られたく無かったんじゃないの…？

「あの…き」

ゴクリ…と相模の咽喉が鳴る。

「お、おう」

次になにが起こるのか一切想像出来ない恐ろしさに、俺の咽喉もゴクリと鳴る。なにこのすげえ緊張感。

しばらく固まる二人。マジヤバいって。注目集めちやってね？これ。

すると相模ははああ…と深く息を吐きし、ようやく意を決したのか、真っ赤な顔を俺に向け、ついに口を開いたのだった。

「…あの…その…ウ、ウチちよつとお腹空いちやっただけどき、その…ど…どつか寄ってかない…？」

「……は？」

*

えーと…今こいつなんつった？

いや、本当にしつこいようだが俺は耳聡い。だからなんて言ったのかなんて余裕綽々で聞き取れています。

じゃあなぜ『こいつなんつった？』などと不毛な思考に陥ったのかと言えば、それはもちろん理解が出来ないからに他ならない。

お腹空いた↓分かる

どっか寄って行きたい↓分かる

なんでそれを俺に訊ねたのか↓理解不能

「言いたい事は理解した。…で、なんでそれを俺に言うの？」

「全然理解してないじゃん!？」

思いのほか激しいツツコミが返ってきました。

だから目立っちゃうってば。

「…:な、なんで聞くもなにも…:あんたに合意を得なきゃ行けない…:じゃん」

そう言ってまたモジモジし始める相模さん。

あ、もしかしてトイレに行きたいのかな? だからセクハラでお縄になっちゃうってば。

「だって、お前が腹減ったからどっか寄りたいつつーなら、好きにどっか寄ってればいいだけの話だろ。なんで俺の合意を得る必要あんの?」

「あんたも行くかどうか聞かなきゃ寄るに寄れないでしょうが!」

「…:…:へ?」

さらに激しいツツコミに一瞬たじろいだのだが、あまりにも理解不能な相模の台詞に脳がクリアになっていく。

ん?俺も行くの?

「えっと、俺も一緒に行くのか?」

「だからそう言っただけじゃん! てか、一緒に行く気ないんならわざわざお腹空いたなんて報告しないから!」

ああ…:な、なるほどそういう事か。

そういう展開なら、そりゃ俺に聞くよね。

「すまん。その発想は無かった」

「その発想以外なくない!？」

——この幾度のやりとりでいくつかが分かった事がある。

どうやら相模は俺を放課後デー…:げふんげふん。放課後の道草に

誘っているらしい。

俺が放課後の道草に誘われる……だと？しかも相模に……？
だってそれってあの噂の青春(笑)イベントでしょ？そんな日陰者
とは無縁のイベントに、まさかこの俺が誘われる日がこようとは
……………しかも相模って。

そしてもうひとつ分かった事。

どうやら相模はなかなかのツッコミタイプらしい。

あつぶね！もしこれ教室でやられてたら、クラスの連中に仲良しな
のかと思われちゃうとこだったわ。

教室ではツッコまれないように発言に気を付けないとね！

…しかしまさか俺が相模に誘われるとは…これ、どうしたらいいん
だろう…。

「あー…つと…いい、行かなきゃダメなのか？」

そこはもちろん俺である。

気を使って誘ってくれたら、迷惑かけないように体よく断るのが礼
儀だよな。

だがしかし、なのだ…こいつの場合は…。

「…っ！」

やはり来たか…。そう訊ねた俺にビクツとした相模は、なんとも哀
しそうに目を潤ませる。

やめて！その顔だよその顔！

そんな捨てられた子猫みたいな弱々しい眼差し向けてこないで
よう…！

「…あ、や…べ、別にもし良かったら、ってだけの話であって…む、
無理に誘ってるってワケじゃ…ない…から」

シユンと目を伏せてしまった相模。

もうそれ反則でしょ相模さん…。

「あはは…ぐ、ぐめん、なんでもないから…っ」

「や、やっぱり行くのかな…？っ、っ、っか超行きたいまであるっ！」

くっそ…やっぱ無理だろコレ。

小町に鍛え上げられたこのオートスキル。とはいえ本当に嫌なら俺は余裕で断るだろう。

だが、シユンとしたあとのこいつの卑屈な笑顔だけは、どうしても堪えらんないだよなあ。

多分だけど、それはちよつと昔の俺に被るからだと思う。まだ色々諦めてなかった中学時代。そんな時にクラスメイトの前で無理して笑ってた、あの気色の悪い愛想笑いに。

「…え、マジで…!？」

そしてそのあとのこのパアツと花が咲いたような笑顔を見せられちまったら、そんなの即落ち安定ですわ。

「お、おう…別に腹なんか減ってねえかと思ってたんだが、なんかそう言われたら小腹空いてきちまったわ」

「だ、だったら最初っからそう言えばいいじゃん…：…ばーか…」

なんだよ、結局罵倒されちやうのかよ。

ちよつとだけ膨れっ面の相模だけど、その類は今にもニヤニヤと緩んでしまいそうなほどにヒクついている。

そしてそれを誤魔化すように手でぐにぐにとマツサージ。なにそれ可愛い。

——はあく、たくしゃーねえなあ…：面倒くさいけど、ここは付き合うとしましょうかねえ。

「あ」

そこで思い出す。

そういやこいつ、こんなやりとりを周りから見られちゃってもいいのかよ？

駅前に到着した時、顔すげー強ばってたじゃねーか。

「ど、どうかした？」

「な、なあ」

「え、な、なに…?？」

「あー、なんだ…：…その、いいのか…?？周りに総武の生徒たくさん居ん

「だけど…」

たぶん腹減りすぎてすっかりその事を失念していたのだろう相模は、その言葉に辺りをキョロキョロと見渡す。

果たして、ようやくマズい事態であると再確認したであろう相模の言葉とは？

「は？なに言ってるの？学校からの最寄り駅なんだから、総武生がたくさん居るのなんて当たり前じゃん。あー、ビックリしたあ。ウチてつきり、用事あったからやっぱり帰るとか言いだすのかと思っちゃったじゃん……！ホントムカつくー。……ていうか、そんな意味分かんないこと言ってるんで早く行こつ」

あ、あれ？ちよつと予想してた反応と違うんですが……。

これ、あとちよつとでスキップしちゃうんじゃないの？と思えるくらいに軽い足取りで勝手に歩みだす相模の背中を眺め、俺は頭をガシガシと掻きながら思うのだ。

——先ほどの緊張で強ばった顔は、俺と一緒に居る所を見られるのが嫌だから強ばってたんじゃないやなくて、どうやら俺を道草に誘うのに緊張してたから強ばってたっぽいな。

まったく……たかだか俺ごときを道草に誘うだけで、お前みたいなりア充がなにをそんなに緊張してんだか。

そんなことを考えながら、さっきの相模を真似るように左手で頬の筋肉をぐにぐにとほぐしつつ、あの軽やかな背中をゆつくりと追うのだった。

憩いの場と相模さん

駅前の喧騒を抜け、未だなんとも嬉しそうに先に行く相模のあとを追うように自転車を押していると、不意に相模がくるりと振り返る。

「ねえ比企谷」

「…おう」

「…どこか行きたいところ…ある？」

「どっか行きたいところ…？」

ふむ。それはこれからどの店に入りたいのかを問い掛けてきているのだろう。

こういう経験があまりにも少なすぎて、最初意味が分からずにポカンとしてしまった。

ちなみに「少なすぎて」でさえも盛りすぎなのは重々承知しているが反省はしていない。

「…相模はどこがいいんだ？」

質問を質問で返すという愚行を犯してしまうのも無理はない。なぜならこの質問は非常に危険だからに他ならない。思い出すのはいつかのダブルデート（笑）

まあ、いま考えればあの時の折本には悪気など一切なく、生来のからかい気質からくる、ほんの茶目っ気だったのだという事は良く分かっているのだが、少なくともあの時の俺には悪魔の質問であった。

相模は折本と違ってからかいかい気質では無いだろう。どちらかと言うといじめっ子気質？より一層酷くなっちゃった。

だからこそ、この質問には出来る限り答えたくない。答えたが最後、瞬時に顔を歪められて嘲笑されるであろう事は目に見えているのだ。

それ故の掟やぶりの質問返しなのである。まあどうせアレを言われてしまうのだろうけども。

「…比企谷が居るなら、ウチはどこでもいいけど…」

はいコレ来ましたよ、必殺どこでもいいよ。

世の中には『どこでもいい』なんて都合のいい事柄などどこにも存在しない。

どこでもいいよイコール私の行きたい所を言い当ててみてよゲームなのである。その答え如何によって男のレベルを測るというゲームなのである。

なんていうクソゲー。ゲームをスタートした時点ですでに詰んでいるというね。

ただ相模の答え方が、俺の想像していた答え方とは若干ニュアンスが違ったように聞こえたのは気のせいのはず。

そしてそのニュアンス違いの答えを発した相模が、ハツとして両手で口を押さええて真っ赤になったのも、また気のせいのはず。

しかしどこでもいいよと聞かれたら、答えてやるのが世の情け。どうせ嘲られると分かっているながらも、そんな自然の摂理に逆らう事などできようか？

であるのなら仕方がない。俺が答えられる最上級の答えを持ってして、お前の嘲りを真っ向から受けてやろうではないか。さあ、笑えよベジ―…相模！

「サイゼとか…？」

「ぷつ、あはは！ サイゼね。ま、そこら辺の方が比企谷らしくていいんじゃない？」

…あれ？確かに軽く笑われたけど、別にどうという事もない程度の笑いだったぞ？

おいおいマジかよ、折本なら呼吸不全になっちゃうくらいに爆笑が取れるとこだぞ？

いや、決して笑いを取りに行ったわけじゃないんだよ？アイラブサイゼ。

「どうかした？早く行く」

言うが早いか相模はとつとサイゼへと歩きだす。軽くスキップ気味で。

なんだ、お前もサイゼ大好きなんだな。ちょっと好感度がつちや

うよ？

「おう…」

そして俺もそんなサイズ好きな隣人の千葉愛に負けるまいと、千葉県民の憩いの場へと足を向けるのだった。

*

「な、なに…？ウチ見てた…？」

「いや、別に見てねーし…」

綺麗な顔を紅潮させて、モジモジと上目遣いでそう訊ねてきた隣人…いやお向かいさんに必死で弁明を試みる。

「…そ」

「…おう」

…あれだな。普段は常に隣にいるから、チラツと盗み見てもあんま目が合う事は無いが、やっぱ向かいに座つてると見てる事がバレバレになつちやうな。見てたんじゃん。

まあそりやついつい見ちやうよね。だって異常事態なんだもん。

なんで俺、相模と二人でメシ食つてんの？意味分からん。

そう思いつつ目の前に置かれたミラノ風ドリアをひと掬い。うむ。やはりうまい。

熱々トロトロのドリアをはふはふと咀嚼し、俺はフォークにクルクルと巻き付けたカルボナーラを口へと運ぶ相模に、またもや自然と目を向けてしまう。

やっぱこいつって、なんだかんだ言つて綺麗だよな。

ほんの僅かの差で三浦に選ばれなかったとは言え、一年の時は由比ヶ浜と一緒にトップカーストグループを形成していただけの事はある。まあ間違いなく美少女の部類と言つてしまつても差し支えない容姿なのだ。

勝ち気で強気そうな切れ長の目と形の整った鼻。そして今まさにカルボナーラを放り込もうとしている艶やかな唇。

出会いの印象が酷すぎた為に——一学期を同じ教室で過ごしておきながら八月に出会いというのもアレな話だが——きちんと見もしようとしなかった相模の顔。

加えて隣人となつてからも常に隣であつた為に、ほとんど正面から見る機会は無かつた。

こうして改めて正面から見る相模についつい目が行つてしまつても、それは仕方の無い事だろう。

「…ねえ、だから絶対ウチ見てるでしょ、キモいんだけど」

「だから見てねーつつつてんだろが」

「…絶対見てるし」

そうほしよりと呟いて、恥ずかしそうな顔をぷいっと横に向けると、なんかにまにましながら相模はまたもカルボナーラをフォークに巻き付けだした。

てかさ？目が合う時点でお前だつて俺をチラチラ見てるつて事だろうよ。

にしてもだ。サイゼに入店してから料理を注文して、料理が届いてこうして食い始めるまでの間での会話がこれだけつておかしくない？これじゃさつきまでの帰り道と一緒にじゃねーか。

隣合わせで教科書見せてる時や弁当食つてる時は相模とのこういう沈黙も悪くないのだが、緊張感もあるのかもしれないが、この初めての向かい合わせという状況だとなかなかに気まずい。

一緒に道草食うつてこういうもんなの？教えて偉い人！

まあベラベラ話し掛けてこられても、やはりぼっちには対処出来ないけども。

「あの、さき……比企谷」

そんな思いが通じたのか、ようやく話し掛けてきた相模。

いや、実際は話し掛けてこられても困るんだけどな。あまのじゃく乙。

「…どうした」

「比企谷ってさき……ドリア、好きなの……？」

ほう……会話に困つた時としてはいい質問だ。

現状俺達の間で会話のネタがあるとしたら、今まさに繰り広げられている食事の話くらいのものだ。

この当たり障りの無い質問が、今後の新たなるネタに繋がるかもしれない。

そうと決まれば話は早い。このビッグウェーブに乗せてもらおう。

「…おう、美味しいからな」

「…そ」

会話終わっちゃったよ。どんだけ小波にして返しちやっただよ俺。

くっそ…またもや沈黙の食事のスタートか…と半ば諦めかけていると、意外にも相模はそれだけで終わらせなかった。

「…じゃ、じゃあ今度雨降ったら…作ってみようか…な」

まさかの弁当の話題へのシフトチェンジである。

そんな弁当の話題が出た途端、俺の心臓はドキリと跳ね上がり、顔が熱くなつていくのが分かる。

まあぶっちゃけて言うと、未だに相模からの弁当の差し入れは照れ臭くてむず痒いのだ。

テレビから「明日は雨模様の一日となるでしょう」なんて女子アナの声が聞こえて来た瞬間から、包まる布団を求めてベッドに直行してゐるまでである。

…だつてさ？雨の日はコイツ、一日中こつちをチラチラ見てくんだもん。すげーモジモジして。気恥ずかしいと思ったらありやしない。

だからちよつと弁当の話題に弱いんですよ。

マジで勘弁してくれ…照れ臭さを押さえて相模を盗み見ると、これもまた恥ずかしそうにチラチラと上目遣いで俺の様子を窺ってますよこの子。

そんなに恥ずかしくなるんなら言わないで！

「…あのな、ドリアは熱々トロトロだから美味しいんであって、冷めきつた弁当で食つたつて美味しいわけねえだろ…」

…確かに相模の厚意は有難いのだが、冷めきつたドリアを食いたいかどうかはまた別問題なのである。

苦手な弁当の話題が出てしまった事によるむず痒さも手伝って、至って真面目な返答を返してしまった。

「ぶつ、バツカじゃないの？冗談に決まってるじゃん。レンジでもあったら話は別だけど、さすがに学校にそんなの作って来るわけないじゃん」

あ、冗談だったんですね。そりゃそーじゃ。

「…で、でもさ、その言い方だと、熱々でトロトロなドリアなら食べたって事…だよ、ね…?」

「あん？そりゃまあ美味けりやな」

「…じゃ、じゃあ………さ」

なんだか今までに無いくらいの蚊の鳴くような小さな声で会話を続けてくる相模さん。

どしたのん？と視線を向けると、相模は耳まで真っ赤になっていた。

「……そ、それじゃ…さ。…比企谷がどうしても食べたいのなら…今度ウチの家に、食べに来ればいいじゃん…?」

…は？なに言ってるのこイツ？

おいおい、冗談にしては悪質すぎんだろ。冗談じゃ無かったらさらに悪質だけでも。なんなの？隣人を殺す気なの？

すでに恥ずか死寸前ですがなにか？

しかしそこはさすが俺。パニックになり掛けながらも、勘違いしないうの訓練はバツチリなんですよ。

よし俺、とりあえず一旦落ち着いて、つい今しがたの相模のセリフの裏を読み！

『今度ウチの家に食べに来ればいいじゃん…?』

…ハッ!?そうか、こイツは今度と言ったのだ、今度…と。

今度…それは約束の言葉でありながら非約束の言葉でもある。ある意味なによりも固い約束の言葉と言えるかも知れない。

『今度遊ぼうぜー!』『今度飲みにも行きますか!』『今度お食事でもどうですか?』

これらのセリフに次への再会に希望を抱く者よ、今すぐその希望を捨てよ。

なぜならこれらのセリフが叶う事などほぼほ無いのだから。

社会生活に置いて、今度という言葉はなんら意味を成さない。むしろ体のいいお断わり用語なのだ。

つまり先ほどの相模のセリフは来ることのない未来の約束……つまりは「ウチの家にお前が来ることなんてあるわけねーだろプゲラw」と訳されるわけだ。

……ふう、あつぶね、危うく騙される所だったぜ。

危うく来もしない未来にドキワクになってしまう所だった。許すまじ相模。

俺クラスの鍛えぬかれたボツチじゃなかったら数ヶ月後に絶望してるとこだったわ。

罨を未然に防げた昂揚感とほんのちよっぴりの寂しさを胸いっぱいを感じながら、こちらも体よく返そうではないか。それが大人の嗜みつてもんだらう。

「…おう、ま、今度な」

まさに完璧なる返しである。なぜか相模は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているが。

どうしたのだろうか。比企谷ごときがこんなに完璧な大人の対応をしてくるとは！とかつてちよつとビックリしたのかな？

しかししばらくのあいだ間抜け面を晒していた相模ではあるが、ようやく事態を飲み込めたようでハツとする。

そして次の瞬間、コイツはリンゴのように紅潮した顔をこれでもかと破顔させて、元気に頷くのだった。

「…う、うん…今度、ねっ…！」

ぽしよりと小声で……しかしとても力強く「…やったあ…！」と見えないように（丸見え）小さくガッツポーズしている相模を眺めながら俺は思うのだ。

——これ、正解だったのん？

*

そこからはまた無言ではあるものの、相模が謎の上機嫌であった為に、むず痒く照れ臭くも、なんとも和やかな食事が続いていた。

「〜♪」

鼻歌混じりにサラダをいじる相模と、そんな相模を見ながら、マツクスコーピー擬きの茶色い液体の入ったカップを口に付けて、口角が上がってしまった口元を誤魔化そうと必死な俺という不思議で穏やかな時間。

認めたくはないが、至福…に近いような時間を完膚なく打ち砕く事件が起きたのはそんな時だった。

「…うっわ、さがみんだ…」

「…うわあ…やっぱこういう事だったんだあ、南ちゃんつて…」

不意に頭上から降り注いで来た蔑みを多量に含んだそんな二つの声。

マズい…やってしまった…また油断していた…。

思い起こされるのはいつかの花火大会。

あの時と違うのは、あの時は蔑む側だった相模が、俺の向かいに座っているという事。

恐る恐るそちらを見やると、どこか見覚えのある二人組が、まるで俺と相模を見下すように立っていた。

そしてそんな見覚えのある二人組の不快でいやらしい声が出た方向へと顔を向けた相模の顔は、見るからに青ざめていったのだった。

「は、遥…ゆっ…」

招かれざる来客と相模さん

予期せぬ、そして招かれざる来客の登場により、相模は焦りを隠せない。

：それはそうだろう。だってコイツ等は文化祭での俺の悪評を相模と共に学校中にバラ撒いた張本人なのだ。

そんな張本人の内の一人在当事者と二人で仲良く飯を食ってる所なんて見られたら、これからどんな悪質で下世話な噂が広まる事か。それを思えば相模も顔面蒼白にもなるだろう。

なにせコイツは周りからの目を人一倍気にする、どうしようもないヘタレなのだから。

——遙とゆっこ。この二人はかつて相模と薄氷のように薄っぺらい友人関係を持っていた。

文実でたまたま知り合いが居たから。その知り合いの仲良しも居たから。だから仲良くした。仲が良いように振る舞った。つまりは利害が一致したのだ。

そうした方が周りから充実した青春を謳歌しているように見えるから。

しかしその実この三人の関係は所謂よっ友であった。

それゆえ一度利害が分かれれば、関係が砂の楼閣の如く一瞬で瓦解する事など目に見えていた。否、瓦解では無く崩壊と言った方がしくりくるか。

なにせ瓦解する程の関係性さえ築けていなかったのだから。

だから相模とこの二人は一瞬で敵対した。正確にはこの二人が一方的に相模を見放しただけの話ではあるが。

もちろん見放された原因は調子に乗った相模の浅慮によるものであるし、それに関しては一切の同情の余地は無い。

唯一同情するに足りうる点があるとすれば、そんな薄っぺらな人間関係を真に受けてしまった相模の浅はかさという点くらいだろう。

つまり当時の相模は本当にしょーもない奴だった。その一言に尽きる。

ただしそれはあくまでも「当時」は、だ。

少なくとも今の相模はあそこまで酷くはない。酷くないどころか随分と良くなったと思う。アホだけど。

毎日のように教科書忘れるくせに、毎日飴を持つてくるのは忘れな
いわ雨の日は忘れず他人の弁当は作つてくるわの大アホだ。

でも悪い奴では無い。嫌な奴では無い。

教科書見させられるわ隣で一緒に弁当食うわお兄ちゃんスキルを
くすぐるような逆らい難い目で見つめてくるわ、ぶっちゃけ以前より
もかなり面倒くさい奴になつちやつた気がしないでも無いけれど、で
も……俺はそんな相模を嫌いではない……。

だったら、そんなアホで面倒くさくて嫌いじゃない奴が、見てるだ
けでも胃がムカムカするような、こんな焦燥感溢れる顔をしないで済
むようにするには、やはりこんな手段しか無いではないか。

これは俺の責任でもある。自分の立ち位置も相模の立場も理解し
ていながら……先ほどの駅前でこういう事態を招いてしまうかもし
れないという危険性を理解していながら、俺はそういった危惧への警
戒よりも、相模とのなかなか悪くない道草を選んできましたのだけか
ら。

……こんなやり方したら、またあいつらに怒られちまうかな。あと、
もう相模に教科書見せる事も隣で弁当食う事も無くなるだろうな。

でもまあ仕方ない。今この場を切り抜けるには、これしか方法は無
いのだ。

いや、俺にはこんな方法しか思い浮かばないだけだな。

そして俺は自分の出番が来る隙をじっくりと観察して待とう。

さあ、とくと御覧じろ、俺の生きざまを。

この生きざままで、この状況を打破してみせようではないか、出来る
限りの矮小さで、出来る限りの卑屈さで。

「やっぱ体育祭んトキから怪しいーって思ってたんだよねー」

「ねっ、この人と南ちゃん、ちよつと怪しかったよねー」

「…え、なに？…べ、別に怪しい事なんて…」

「だってさー、さがみん文化祭んトキはあんだけどこの人の事めちやくちや言つてたのに、体育祭になったら見るからに超頼っちゃってんだもん」

「ねー、この人…ヒキタニとか言つたっけ？この人もあれだけ南ちゃんに暴言吐いて嫌われ者になった癖に、体育祭では妙に南ちゃん庇つてたしさー」

「…そんな事」

まるで相模を責めるような言い回しの言葉が続き、そしてどつちが遥なんだかゆっこなんだか分からない片方のモブが、決定的なセリフを吐く。

「…この人ときがみんって、やつぱ付き合ってたんだねー」

言いやがったな、そのセリフを。

一緒に飯食ってるだけで付き合ってるとか、発想が小学生かよ。そりや雪ノ下と葉山も、千葉で二人で歩いてただけで恋人認定されちゃうわ。

「べっ、別にウチと比企谷はまだ付き合ったりとかは……！」

真っ赤になって必死で否定を始める相模。

おい、いくら慌てるからって『まだ』とか付けんなよ。変な勘違いされちゃうだろうが。

まあいい。今の俺に必要なネタは揃った。『付き合ってるだろ』って低レベルなセリフと、必死で否定する相模というネタが。

だったらこここそが俺の出番。俺だけの出番だ。

俺は普段よりも目を腐らせ、普段よりも嫌らしい笑顔を顔に張りつけ、矮小に卑屈にこう言つてやるのだ。

「…そ、そうなんだよ、俺と南、実は付き合ってたんだよ…！」

その瞬間、この場は凍り付いた。

*

俺と相模が付き合っているだなんて、遥とゆっこからしても単なる弄りだったのだろう。『悪意の籠もった』という注射付きだが。

単にあまり良くない関係の同性を馬鹿にしたいだけ。本気で付き合ってるなんて思っていないが、せっかく目の前に弄れるネタがご丁寧に転がっているのだ。それを使わない手など無い。

だからコイツ等はただ相模を馬鹿にする為だけにわざと言ったのだ。付き合ってるんじゃないの？と。

だからこそその衝撃。まさかこう返ってくるとは全く想像していなかったのだろう。

俺からの予想外の返しに、これでもかってほど慌てふためく。相模が。

お前がかよ。

「なっ…なななな…:…:…」

本日最大級の赤面を見せる相模。あまりにも動揺しすぎて「な」しか言えないでいる。

いやホントごめんね？でもまだ終わりじゃないから、そんなに涙目になってまで嫌悪しないで！

ただちよつと欲しかった反応と違うんだよなあ。ホントは「はあ？あんたなに言ってるんの？マジキモいつの！」とかって相模らしい罵倒が欲しかったのだが、まあ致し方ない。このまま進めさせて貰おうか。

「もうずっと前から付き合ってるのに、南の奴が「あんたなんかと付き合ってるじゃない」ってしつこいんだよ。まあちよつと拗ねちゃってるだけだとは思っただけだよさあ」

まるで夢物語でも語っているかのような虚ろな表情を作って、そんな危ないセリフを吐く俺に怪訝な表情をあらわにする遥とゆっこを見やり、内心ほくそ笑む。絶対には出さなければいいけれど。

「だから今日はきつちりと話を付けようって呼び出されちゃって、ちよつと困ってたんだ。拗ねてっからってここまできると結構大変だろ？あんたらからも南に言っただけでやってくれよ」

……まったく。

普段無関係の他人と話す時は緊張して噛んだりもったりしちゃう癖に、こういう時だけはペラペラと回る自分の口に呆れてしまう。

これだけ滑らかに喋られるポテンシャル持つてるなら、普段からその能力を遺憾なく発揮しろよ。

そんな自分に対して思わず苦笑を浮かべてしまったのだが、その笑い顔でさえもこの場においては効果的だったらしい。

遙とゆっことは俺の歪んだ笑顔を心から気持ち悪そうに一瞥すると、不快感をあらわにボソボソと会話を始めた。

「…え、キモ…：…な、なにこの人…：…ヤバくない…？」

「…なに…：…？もしかして南ちゃんのストーリー…：…？」

——おお、モブの割には状況把握が早くて正確じゃねーか。

…正解だ。俺は相模のストーリー。

一方的に想いを寄せ、自分と付き合っているものだと錯覚しているヤバい奴だ。

重度のストーリーカー心理ってのは確かこういうものなんだろう？

これならばここで二人で食事をしていた事にもそれなりの信憑性が生まれる。

相模とヒキタニは仲良しとかではなく、話し合いの場として食事の席を設けていただけだ。

あくまでも相模は被害者でしかなく、今後下世話な噂を流される事もない。

まあ下手したら俺の名声（ストーリーカー）は広がってしまうかもしれないが、文化祭であれだけの噂が流れて一躍時の人となったにも関わらず、75日を待たずして飽きられ、以前と変わらず存在を認識されなくなった程の逸材である俺からしたら、その程度の事はどうということもない。

「なあ、なにボソボソ言ってるんだよあんたら。早く俺と一緒に南を説得してくれよー」

「…うっわ、さすがにコレはヤバいって…」

「ゆっこ、もう行く…？？み、南ちゃんも早く帰った方がいいって…」

「ねーうちらと一緒に帰ろ…？」

…よし、この二人、予想以上に上手く釣れた。

ただ恐がって帰るだけでは無く、被害者である相模に対しての同情心まで芽生えたようだ。

動揺からか俯いたままの相模と、そんな相模に同情して手を差し伸べようとしている遙とゆっこ。

心配ではなくあくまでも同情。

同性としてこの境遇を「憐れ」と、この瞬間だけ感じた程度の一過性の感情では、この三人のわだかまりが解けるような事は無いだろう。

他者を想う尊い感情ではなく、あくまでもキモい男に付き纏われて可哀相という憐れむ感情なのだから。

だがこれならば、少なくとも相模が不利益になるような噂をコイツ等によって流される心配は無いだろう。

あとはコイツ等に手を引かれて一緒に帰る相模が、後で上手く話を合わせてさえくれれば万事解決だ。

今は多少混乱しているかも知れないが、人の目を人一倍気にする相模なら、この事態を把握して上手く話を合わせる事くらい出来んדר。

そう。俺のこの計画は完璧だった。完璧なはずだった。

この茶番劇の主役の、この苦しげな言葉さえ無ければ…。

「…やめてよ、もういいよ比企谷……………。もうそういうの…………ウチ、やだ…」

そう弱々しく呟いた相模へと視線を向けると、その頬には一筋の雫が流れていた。

*

——もうウチそういうのやだ——

遙とゆっここの手を払った相模はそう言った。

そんな相模の台詞と一筋の雫を目の当たりにした遙とゆっこは、怪訝な表情を相模にぶつけた。

前々からほんの少しだけ考えていた。なぜ相模は俺に対して突然

軟化したのかを。

始めは単に教科書の貸し借り——一方的に貸してるだけだが——から始まった俺達の不思議な関係性ではあるが、そもそもそのスタートからしておかしいのだ。

例えどんな理由があろうとも、“あの”相模が俺に助けを乞うはずなどないのだ。

それからはなし崩し的に少しずつ距離が縮まっていったが、それもまたおかしい話なのだ。

なにせ“あの”相模が“この”俺との距離を縮めようとするわけが無いのだから。

そこで出る結論はたったひとつだけ。

『相模はいつの間にか“あの”相模では無くなっていた。つまり相模はあの文化祭での真実に気がついていて』

…いや、正確には気がついていてい無く、勘違いしていると言った方が正しいのかも知れないが。

だからこそ相模は俺なんかに優しくなったのだ。勘違いしているから。

だが今はとりあえずそれはいい。そんな勘違いはあとからゆっくり解けばいいのだから。

いま考えなくてはいけない事は、今から相模がやろうとしている事は、この場において悪手でしかないという事。

せつかく遥とゆつこの誤解を解く為の下地を準備したのに、相模がその行動を起こせば全てが台無しになってしまう。下手したらあの時の…文化祭後の俺以上の悪意に相模が晒されてしまいかねない。

「お、おい、なに言ってるんだ相模…」

「…比企谷は黙ってて。…大体さつきまでキモく勝手に南とか言つた癖に相模に戻っちゃってるし。バカじゃん…？」

「…」

語るに落ちるとはこの事か。

あれだけペラペラ回ってた口と頭も、不測の事態であつさりと元通

りじゃねーか。

そして相模は遙とゆっこに向き直り語り始める。カタカタと肩を震わせながら。

「…遙、ゆっこ。今のはコイツの下らない冗談だから忘れて…?」

「え?」

「なに言ってるの? さがみん…」

俺の迫真の演技(ストーカー)を真に受けて相模を憐れんだ二人は、予期せぬ展開に理解が追いつかない。

相模はそんな二人の様子など気にも止めずに話し続ける。震える掌を落ち着かせるように、ギョツとスカートを握り締めながら。

「…ホラ、もしウチと比企谷が一緒にごはん食べてる上手い言い訳が出来なかつたら、遙とゆっこはウチ達の関係を面白可笑しく噂話として流しちゃうかも shouldn't じゃん? だから比企谷はそうならないように、自分をストーカー扱いさせようとしただけ。…そうすればウチは被害者になるから、遙たちに変な噂を流されなくて済むって思ってたんだと思う」

始めは呆然と聞いていた二人も、相模の台詞を頭の中で噛み砕いていく内に徐々に理解出来てきたらしい。

つまり今の俺のストーカー的発言は、本気ではなく相模の為に泥を被ろうとしたのだと。

しかし噛み砕けたのはそれだけでは無い。むしろ今の相模の台詞は、この二人にはどうしても看過できない内容が含まれていたのだ。

「は? なにそれ!? その言い方じゃ、まるであたし達が悪口言い触らすみみたいじゃん」

「だよねー! なんかやなカンジなんですけどー」

顔を真っ赤にして激昂する遙たち。

そう。今の相模の台詞は、「あんた達は噂を広めて相手を貶めるでしょ?」と言外で言っているようなものだったのだ。

これは相模の失言だろう。確かにそれは本音なのだろうが、人間関係では決して表には出さない本音。

だから俺はてつきり相模は「そういう意味じゃないけど…」等と

言い訳するものとはばかり思っていた。

だが現実はず違った。

「…だって、それは事実でしょ…？文化祭での比企谷の悪口を学校中に広めたんだもん」

コイツなに言ってるんだ…失言ではなく確信犯だったのかよ…。

これには遥とゆっこも黙っていない。まあもともと一切黙っちゃいけないけれども。

「…はあ？なにそれムカつく！なに他人事みたいに言ってるの!?それはあんたもじゃん！」

「そうだよ！なんか知らないけど、仲良くなったら自分は棚に上げちやうの!?!超サイアクー」

——遥達の肩を持つわけでは無いが、コイツ等の言っている事はもつともだ。

別にあの文化祭で俺の悪評が校内に広められたのは、あくまでも俺の自己責任だと理解している。だから俺自身はこの三人にはその件に関しての悪感情は一切無い。

だが今の相模の台詞だけはそうはいかない。なぜなら今の相模の台詞はブーメランなのだ。相模の意見は相模自身にも適用されるのだから。

だから今の台詞で遥とゆっこだけを責めるのは、自身を棚に上げた筋違いな意見でしかない。

…しかし、そんな事は他の誰でもない、相模自身が一番理解していた。

「…そう。ウチはサイアクなの。…なんにも知らない癖に、自分の為に比企谷の悪口を広めたのはウチだから。確かに遥とゆっこもウチの為に悪口を広めてくれたけど…でもその原因を作ったのはウチ自身。…一番悪いのは、ウチ…」

俯いて弱々しく語る相模に、遥達は黙り込んでしまう。

「…でも、今の比企谷のやりかた見て遥とゆっこも解ったでしょ…？コイツがどういうヤツかって。文化祭の時に悪かったのは比企谷

じやなくってウチだって。…あのとき比企谷がああしてくれなかったら、ウチがみんなにメチャメチャ責められてたって…

ホントは遥達だって分かってたんでしょ…？だって、体育祭の時ウチに言ったじゃん、『文化祭の時あんなに適当にやってた癖に』って…」

そう言われてしまった遥とゆっこは絶句する。

…そうか、あの時は特になんとも思わずに聞き流したが、あの時コイツ等が相模を責める為に吐いたあの台詞は、実は自分たちの非を認めてたって事になるのか。

「だから…ごめん、遥、ゆっこ。結局一番悪いのはウチだから、ウチを責めるのはいい。ウチの悪い噂話を広めたって構わない。それはウチの自業自得だから…。でも、比企谷の悪口は言い触らさないで欲しい。比企谷は…ホントはウチに暴言を吐いた最低の嫌われ者でも、キモいストーカーでも無いの。捻くれてるけど、ホントは結構良い奴。」

…だからウチはもう比企谷の悪い噂とかやなの…比企谷は、ウチの…ウチの大切な…」

相模は相変わらずカタカタと震えたままだ。

弱々しく震え、弱々しい涙目でスカートをギユツと握ったまま。

それでもコイツは僅かに残った勇気と根性で、真っ赤な顔で遥とゆっこをしつかりと見据えてこう言うのだ。

「ウチの大切な…お、おとなりさんだから…っ」

…大切なおとなりさんってなんだよ。教科書？教科書見せても
らえる的な？

危うく勘違いしちゃうとこだったわ、あつぶね！

「な、なにそれバツカじゃないの…？」

「なんか、超つままない…。い、行く行く…？」

そうして招かれざる来客は舞台袖へと捌けて行く。なんとも言えない気まずさを残して…。

気まずさだけを残してくとか、役者としては三流の大根役者だな。

しばしの沈黙。

そりやそうだ。相模は俯いたままぶるぶるしてるし、俺は俺でどうしていいのか分からない。

この状態どうしてくれんの？

———という理由でかは知らないが、相模は文化祭での自身の過ちをきちんと見つめている。

そしてそれによつて、俺のあのやり方に対して大変な勘違いを起こしている。

その勘違いは相模の為にもすぐにでも解かなくてはならない。その勘違いは相模にいつまでもまとわりついてしまうからだ。後ろめたさとして。

…が、それはそれこれはこれ。それはこのあと解けばいい。

だからそれよりもまずはこの新たなる問題へと発展しかねないこの問題を取り上げるべきだろう。

「…な、なあ相模」

遠慮がちに訊ねた俺に、相模は口では無く、ビクツとした肩を持つて応える。

「…今のでマジで良かったのか…？お前、マジで学校中に悪口言い触らされっかもしんねーぞ…？」

なるべく刺激しないよう柔らかい口調で言ってみたものの、やはり内容は一切柔らかくなかった。

もう直球。超ドストレート。

すると相模はぶるぶる震えながら涙目な顔をゆっくりと上げた。

「…ひ、比企谷く…！ど、どうしよう…？ウ、ウチやつちやつたかなあ…!?今更ながらめつちや恐くなってきちゃったよお…！」

「……」

やっぱアホだろコイツ。

ヘタレの癖に、悪口を言い触らすような連中に啖呵切るんじゃねえよ……。

「…やっぱいい…マジで学校中に変な噂流されたらどうしよう…どこ歩いてても笑いやかになっちゃったらどうしよう…ヘタレなウチにはマジ無理だつて…」

青ざめた顔してブツブツと独り言を呟くコイツには、さっきまでの堂々としていた男前な姿は一切見られない。

さつき、ちよつと格好良いなコイツ…とか思っちゃった気持ちを返してください。

「…で、でも…っ」

しこたま呟きしこたま後悔して満足したのか、相模はガバツと顔を上げた。

相変わらずヘタレ感丸出しの情けない涙目ではあるものの、ほんの少しだけ…本当にほんの少しだけ満足げに口元を緩ませた。

「…でも、比企谷がキモいストーリーとかって変な噂立てられるよりは…ずっとずっと、はるかに、マシ…?」

…なんで疑問系だよ。

お前いまちよつと自分と俺を天秤にかけたろ。

まあそこら辺が卑屈で正直で、実に相模らしくてなによりです。

するとすつかりぬるくなってしまったであろう紅茶をごくごくと飲み干して気持ちを整えた相模は、一転真剣な眼差しを真っ直ぐに向けてきた。

「…ねえ、比企谷」

「…おう」

「このあと、サイゼ出てから、あとちよつとだけ時間いい…? あんたに、話したい事あんの…」

ちよつとだけ時間いい?なんて言うわりには、俺には有無を言わせぬ瞳。

その目にはお兄ちゃんスキルをオートで発動させるようないつもの弱々しさは見られない。

さっきの今だ。コイツの言いたい事はもちろんあの話だろう。

そして俺にもコイツに用がある。相模の勘違いを解くという大事な用事が。

「…いいぞ」

そして俺達はサイズをあとにして、隣の駅までゆつくりと歩き始めた。

これからの隣人付き合いを円滑に進める話し合いの為の、一駅分の長くて短い時間が始まる。

となりの相模さん

相模と並んで歩く帰り道。

先ほどまでの向かい合つての時間も悪く無かったが、やはり相模とはこうして隣り合っている方がしっくりくる気がする。

なにせこのひと月弱、毎日のように隣に居たんだもんな。

「…うー、さつむ。あはは、こんな真冬にわざわざひと駅分歩くとかウチらどうかしてるよね。比企谷なんて自転車あんのに」

「…誰のせいでわざわざ歩いてると思ってるんだ」

そんな軽口を叩きつつ、お互いに本題へと入る為のタイミングを窺う。

一度その話題に触れてしまったら、もうあとには引けないのだから。

下手したらこのままアレに触れないまま駅に着いちやうんじゃね？なんて思い始めはしたものの、やはりそういうワケにはいかないよ。うだ。

あと僅かで駅前かという所で相模の喉がこくりと鳴ると、なんとも言えない緊張感が二人の間を支配した。

「…あの、さ、比企谷」

「…おう」

ピタリと立ち止まる相模。

どうやら相模は、この話を歩きながらする事は容認出来ないらしい。

であるならば、俺も立ち止まらないわけにはいかない。押していたチャリを止めて相模へと振り返る。

「ごめんなさい……」

振り返った俺を確認した相模はそう一言だけ告げると深々と頭を下げた。

他には何も言わない。カタカタと震える細い体を折り曲げてのごめんなさいの一言に、相模の色々が詰まっているのを感じた。

「…別に、お前に謝られる覚えはない」

——覚えならある。ありすぎるくらいにある。

だがそれはもう済んだ話だし、そもそも謝られる覚えはあっても謝られる筋合いはないのだ。

なぜならあの事態を引き起こしたのは俺の意思なのだから。俺が勝手にやって、当然のようにそれに見合う結果が俺に降り掛かったというだけの単純なお話なのだ。

そこに相模の意思は存在しない。存在するのはあくまでも俺の意思のみ。

「お前がなにを言わんとしているのかはなんとなく分かる。だがな、アレは俺が勝手にやった事だ。そして文化祭後に起きた事はその結果だ」

そう言う俺に相模は哀しげな瞳を向けてくる。

せっかく気持ちを伝える決心をしてせっかく頭を下げたのに、ようやくごめんなさいを言えた途端にそんな返しをされてしまえば哀しくもなるだろう。

ここひと月弱の相模の行動や表情。そして、先ほどの自分の悪い噂を流されるかも知れないという危険を犯してまでも俺を守ろうとした相模の覚悟を見たら、コイツの謝罪の気持ちが入ったモノではない、本物の気持ちだというのは痛いほど伝わってくる。

だがそれでは駄目なのだ。

確かに相模の心からの謝罪の気持ちは嬉しくない事はない。でもそれでは駄目なのだ。

コイツの勝手な勘違いで、いつまでもコイツの心に後ろめたさを残したくはない。

だから俺は相模の勘違いを解かなきゃならない。例えそれでもう相模と関わる事が…：相模が俺に関わろうとしてくる事が無くなるうとも。

「…お前はどうか考えてどう勘違いしているのかは知らないが、言っておくがアレは別にお前の為にやった事じゃない。…奉仕部として依頼を受けて、倒れるまで頑張つてやり遂げようとした雪ノ下の努力を

無駄にしたくなかっただけだ」

：確かにあの時の雪ノ下は間違っていたかもしれない。

奉仕部の理念に反するあんな依頼を受けたこと自体も、依頼の遂行の仕方、そしてあの意地の張り方も、おおよそ雪ノ下雪乃という人間らしくない間違ったやり方だったと思う。

でも……いや、だからこそ無駄にしたくなかったのかもしれない。

密かに憧れていた雪ノ下雪乃の失敗を認めなくなかったから。あまですべて解決しようとした依頼を、相模なんかには台無しにされたくないから。

だから俺も、柄にも無く意地を張ってしまったのだろう。あんなしょーもない手段を講じたのだろうか。

「…時間に余裕があれば、あのとき相模が一番欲しかった言葉を選ぶ事も出来た。まあ俺が言った所でお前は聞きはしなかったかもしれないがな。…だが俺はお前をなじる事を選んだ。それはただ時間が無かったから。そうしなければ依頼が失敗していたからだ。つまりお前が泣こうが傷付こうが知ったこっちゃなかった。そんなものの優先順位は二の次以下にした」

：俺は誰も傷付かない世界の完成などどうそぶいて、真実から目を逸らした。しっかりと傷付いた、傷付けた人間が居たという事実から。

たぶん真相心理の中では『相模だからいいか。相模が悪いんだから俺が気にする事じゃない』なんて、自分に都合のいい言い訳を自分分を誤魔化していたんじゃないだろうか。

「結果的に俺が責められてお前が助かったのは単なる副産物でしかない。お前の為にやったわけじゃないんだから。…その後お前らが俺の悪口を広めたのだから、お前を泣かせて傷付けてまで依頼達成を選んだ俺の自業自得でしかない。…そりゃ噂くらい広めんだろ、俺なんかにあればボロクソ言われりゃ。お前の立場だったら俺だってそうしただろう。なんてことはない、普通の行為だ」

：そう。別に相模が助かったのは単なる偶然。

俺はそこまで……相模の今後の立場まで考えて行動したわけじゃ

ない。

そしてあんな風に罵倒されて泣かされたら、そいつの悪口を言い触らすなんて当たり前前の行為だろ。その件に関しては、コイツ等に非はない。

「だからアレはお前に謝られる筋合いもなければ、お前がいつまでも気にするような事でもない」

つまりはそういう事だ。

たぶん相模は自分の為に俺が泥を被ったと勘違いしているのだろう。

だからその勘違いは正さなきや駄目だ。そんな勘違いを持ったままじゃ、相模はいつまで経っても俺に対して必要の無い後ろめたさを持ったままになってしまうのだから。

謝罪するべきなのは俺に対してではなく、自分自身に対してだと俺は思う。

全てをいい加減に、無責任にしてしまった自分に謝罪するべきだ。だがコイツはもうその事実と向き合っている。きちんと自分の罪と向き合った上で反省している。

そもそも相模が仕事を放棄したのは、雪ノ下が副委員長をやったからだろうし。

優秀すぎる雪ノ下が無茶して全てをこなしてしまったからだろう。

もしも副委員長が雪ノ下でなければ、盛り上がりには欠けはするものの、皆で協力（笑）して、当たり前障りの無いつまらない文化祭として着々と進行していき、決して失敗にはならなかったと思う。それが成功と言うのかどうかは知らんけど。

そもそも文実がバラバラになった原因でもある、クラスを優先しよう”という発言も、雪ノ下を弄りたい陽乃さんに誘導されただけのものだし。

だからもうアレは終わった事なのだ。いつまでも相模が気にするような事ではないのだ。

…その事に後ろめたさを感じて、俺に優しくする必要など…同情する必要などないのだ。

コイツがいつから勘違いをしていたのかは分からないが、たぶん体
育祭後くらいからだな。

あれから約三ヶ月。三ヶ月もの間、コイツは俺に対して無用の感謝
と反省をしていたのだろう。

でも今その感謝と反省は勘違いだと、意味の無かったものと突き
付けられたわけだ。

今の相模の心境はいかほどのものだろうか？

俺に対して落胆しただろうか？嫌悪しただろうか？…それとも、も
う罪悪感を持たなくて済む事に安心しただろうか？

——しかし次に相模の口が開かれた瞬間、それらは全て違っていた
のだと知った。

ちよつと俺の想像の範疇の言葉とは違っていたから。

「…ぶつ、謝ってる立場でこんな風に言うのもなんだけど…：ホント
比企谷ってバカで捻くれてて、それで…：優しいよね」

…：は？

*

コイツは一体なにを言っているのだろうか。

バカなのは分かる。捻くれてるのも…：まあ許容範囲だ。

だがなぜそこで優しいという単語が出てくると言うのだろうか…
？

「…：比企谷はさ、そういうこと難しく考え過ぎなんだよ。…：勘違い
とか誰の為とか、そんなのどうだっていいじゃん。例えば比企谷にどん
な都合があつてウチを助けることになったからってさ…：結局はウ
チが一番悪くて、それを比企谷が正してくれたって事に、何一つ間違
いはないわけじゃん…？」

「……」

「たぶん比企谷は、その勘違いだったので、いつまでもウチが後ろめたい
気持ちを持ったままになっちゃうのを気にしてくれてるんでしょ？

…だからウチにそれは勘違いだから気にするな、なんて言うんでしょ？」

…なんだろうか、無性にムカつく。相模ごときに俺の浅い考えを全て見透かされてしまっているようで。

「…でも、そんなのズルい…。謝るのなんてウチの単なる自己満かも知れないけど…。でもやっぱズルいよ。…気にするなんて嫌、これで終わりなんて嫌だ…。比企谷ばかり気にしないでよ…。ウチにだって…。…気にさせてよ…」

——ああ、俺はまた間違えてしまう所だったのか。

今のコイツの顔は、いつかの由比ヶ浜の顔だ。

『…なんでそんな風に思うの？同情とか気を遣うとか、…そんな風に思ったこと、一度もないよ』

『もつと簡単なことだと思っただけだな…』

『でも、これで終わりだなんて…なんか、やだよ』

あの時は雪ノ下の言葉に…一度終わらせて、また始めればいい…なんて屁理屈めいた台詞に助けられたっけな。

「それに、ウチだって分かっているっての。比企谷がウチの為に泥を被ってくれたんじゃないって事くらい。だって、あの時のあんたには、あんななんてまでウチを助けてくれるメリット無いじゃん。…だからなんとなく分かってたよ、依頼の為…雪ノ下さんの為にはああするのが一番効率が良かったからだろうなって」

相模は苦笑混じりにそう言った。

ま、それでもさつき比企谷はウチを助ける為に泥被ろうとしてくれたけどね、なんて、照れ臭そうに頬を掻きながら。

ちよ、不意打ちで恥ずかしいこと言うのやめてもらえませんかね…：…バツカ違いーから！別に相模の為にあんな事したんじゃないんだからね！

「確かに比企谷に謝りたかったのはその理由もあるよ？…ウチのせいなのに、悪口言い触らしたり学校中の嫌われ者に仕立てたり…：…ホン

ト最低だよ、ウチ。

…でも、それだけじゃない。ウチが比企谷に一番謝りたかったのは、「それ」に気付いたのは随分前なのに、ずっと言いだせなかつたって事…っ」

「……」

「……ずっと言いだかつた。言わなきゃいけないって思ってた。…でも言いだせなかつた…。言っちゃったら色々認めなくちゃならぬ事が恐かつたから…比企谷なんか助けられたって認めるのが悔しかつたから……」

でも一番恐かつたのは、一番嫌だったのは……比企谷に拒否られる事」

…俺に拒否られるのが恐かつた…？

なんだそりゃ、どういう意味だよ。

「…ウチから普通に話し掛けたら、たぶん比企谷は超嫌な顔したと思う。…そりゃそうだよ、だってマジで嫌だろうし……でもホラ、ウチつてちよつとヘタレなトコあるじゃん…？」

……え、ちよつと？

「…だから、恐かつたの……恩人の比企谷にあからさまに拒否られたらつて…ウチの存在を否定されたらツライなって…」

だから恩人なんかじゃねーって言ってるんだろ…。

「…だからね？席替えで隣になった時、なんとか話したいなって……せめて謝る時に拒否られたり存在を否定されなくらいの関係になれたらなって……そう思つて、わざと教科書忘れた事にして話し掛けてみた……」

……んだよ、やっぱわざと忘れてたのかよ……まあ気付かないフリしてただけで、さすがになんとなく気付いてたけれども。

「…でね？…それが上手く行ったら、今度はもつと話してみたくなくなっちゃつて…飴あげたり…雨の日は友達に協力してもらつて昼休みに違うクラスに行つてもらつたりして、比企谷とお弁当食べた」

…そうか、友達に協力してもらつてたのか……つて、え？

「いやちよつと待て。なんだその友達に協力してもらってたとかなんとかって」

「いや、だから……ウチさ、比企谷と話せるようになってから、ハブラレんの覚悟でクラスの仲のいい子達に全部話したんだよね。文化祭の時の事も……そ、その……ウ、ウチの気持ちも……ぜ、全部」

は？マジで？

てかなんでそんなに真っ赤になってんだよ。別にお前の気持ちを友達に伝えたってところは、そんなに照れる要素無くない？

「そしたら、ね……予想外にみんなすっごい協力的になってくれて……じゃあ雨の日は私達どっか行ってっからー、って……」

マジかよ……いや、そりやおかしいなー、とは思ってたんだよね。

なんで相模の取り巻き共って、雨降る度に昼休み居なくなっちゃうのん？って。

「……いやいやいや、それじゃ俺と相模が仲良いか思われちゃうじゃん」

「今さら!?……あんだだけ教科書一緒に見たり隣り合ってお昼一緒に食べてればそう思うに決まってるじゃん……!?!」

……言っとくけどウチの友達だけじゃなくて、一応クラスではそこそこ話題になってるらしいからね……?最近ヒキタニと相模って仲良くない?って」

やだなにそれ恥ずかしい!

てつきり窓際最後列の恩恵受けられてると思ってたわ。クラスの皆さんから丸見えじゃないですかやだー。

……あ、あれ?それって最近部活行くと由比ヶ浜の機嫌がすこぶる悪いのと雪ノ下の視線が氷点下なのと一色がバイオレンス気味なのと関係があったりしますかね?

あ、雪ノ下の視線が氷点下なのはいつも通りでした。

あと俺は後輩に暴力でも振るわれてんのかよ。

そんな色んな感情が交ざり合い、俺はどよんと目の腐らす。

そしてそれを黙って見過ごすようなお隣さんではありませんでした。

「…ごめん、やっぱウチと仲良しに見られちゃうなんて…嫌、だよね…?」

出ました!最近の相模さんお得意の悲しげな笑顔からの潤々お目々。だからきたねえよそれ…。

「べ、別に嫌じゃねえけど…」

嫌なんじゃなくて恥ずかしいんです。

あと、「そっか…!」とぼしよりと呟いて、パアツと顔を綻ばせるのはやめなさい。悶えちゃうでしょうが。

「…ん!んん!と、とにかく…!そうやってちよつとずつ比企谷と仲良くなってきたら…!今度は逆に文化祭の話に触れづらくなっちゃって…。せっかく仲良くなれたから、あの話になるのが恐くなっちゃった…ウチ、ホント身勝手だよね…」

——ああ、そういう事か。

俺としては決して仲良くなつたつもりは無いが、仲良くなつた相手とは触れたくない話であるよね。

俺としては仲良くなつたつもりは無いが。大事な事なので略。

「だからね、ウチが一番謝りたかったのはそれなんだ…!ずっと謝んなきゃって思ってたのに、ビビってこんなに先延ばしにしちゃった事。…こんなに卑怯でへタレな事しちゃってた自分を謝りたかったの。だから…!ごめんなさい」

だから謝る必要自体無かつたって言ってんだろ…!なんて、さっきの台詞を聞いてしまったら…!そしてこの顔を見たらもう言えなかつた。

悩んで悔やんで苦しんで…!そしてようやく打ち明けられたという解放感を孕んだこの顔を見てしまったら。

「…そうか。ま、その…なんだ…!了解した」

だから俺はコイツからの謝罪を素直に受け取る事にした。全然素直じゃなかつたですぬすいません。

「あと…」

謝罪を受け取ってしまい、なんだか照れ臭くて横を向いていたのだが、どうやら相模の話はまだ終わってなかつたらしい。

「おう…」

「その……あ……ありがとう」

「……は？」

ようやく恥ずかしくて気まずい謝罪が終わったと思っただけなら突然の謝意である。

なんで？

「……ホントはね？……ごめんなさいよりも、ずっとこっちの方が言いたかったんだよね、ウチ。……その、あの時ウチを捜しに来てくれて……ありがとう」

「……は？だから捜したのは依頼の為だと……」

「分かってるってば。でもやっぱりお礼言わなきゃ気が済まなかったのよ……！」

なんでキレ気味なんだよ。

「……そりゃさ？あの時はマジで超ガツカリしたよ。なんでよりによってコイツが来んのよ……って」

おい、それわざわざ本人に言わなくてもよくない？

そりゃ王子様が俺じゃガツカリもするだろうけど。

「……でもね、それでもホントは安心したんだ。誰も捜してくれて無いんじゃないかって不安だったから。だから屋上のドアが開いた時は、ホント嬉しかった。……顔見てガツカリしたけど」

だから言わなくていいから！二回言うほど大事な事なのん？

「お前な……お礼言うんだかデイスんだかどっちかにしろよ」

「あはは」

あははじゃねーよ。飴と鞭がどっちも強力過ぎて、俺のライフはゼ口間際だよ。

「だからもっかい言うね……その、ありがとう」

「……………おう」

なんだこれ恥ずかし過ぎんだろ。こんなの八幡らしく無いよ！

「で、なんだけども……」

……え、まだ終わらないの？この時間。もうお腹いっぱいですよ……。うんざり気味で嫌そうな顔して次の言葉を待っていると、相模は耳

まで真っ赤になった顔を俯かせ、若干震える右手をわきわきとグーパーすると、スカートでゴシゴシと掌を拭いて俺の前に差し出してきた。

「……なので、もし良かったら……これからも……今までと変わらずに良き隣人付き合いをしてもらえない、かな……？あ、……も、もらえませんか……？」

まさかの握手である。

しかも友達とか恋人とかを申請する握手ではなく隣人付き合いの。こんな初めて聞きましたよ。まあ友達も恋人も居た事ないから知らんけど。

「……えー」

握手とか超恥ずかしいから思わずそんな声が漏れてしまったのだが、そこはやはり相模さんですよ。

緊張で赤く染まっていた表情を一気に強張らせて、泣きそうな瞳で

「……ま、まあ……り、隣人付き合いくらいなら……」

見つめられちゃう前にすぐさま僕と握手！

もうやだよコイツ……確信犯なんじゃないの？

……ああ、相模の手がスベスベで柔らかくてあつたけーよチクシヨウ……。

なんでコイツこんなに指とか細せーんだよ。握手じゃなくて繋ぎたい（錯乱）

そして相模のこの嬉しそうな恥ずかしそうな破顔っぷりである。

俺の方が八万倍恥ずかしいですから！

「と、とりあえず今はって事で……っ」

嫌がる俺に気を遣ってくれたのか、相模はなんだか名残惜しそうに手を離すと、左手で右手を大事そうに包みながら、そうぽしよつと呟いた。

「あん？とりあえず今はってどういう事だ？」

「な、なんでもない……こ、こっちの話……」

「？」

ホントどこまでも良く分からんヤツだな。顔も赤すぎるし高熱を

疑っちやうレベル。

まあこれでようやくこの羞恥プレイから解放されるのだと思えばどうだっというか。

「…えと、それじゃウチそろそろ帰るね、駅もすぐそこっぽいし…」
「おう」

「…その…今日は道草に付き合ってくれてありがとね。…ちよつと色々あったけど…比企谷と一緒に帰れて…そのつ…ホント良かった」

「…お、おおおう」

そう言っつて相模は小さく手を振り、とてとてと駅へと歩いていく。八幡爆発寸前です。なにこれ青春謳歌しちゃってんの？

いやいや勘違いするな、単なる隣人付き合いだから。相模もそう言っつてたし。

「…じゃ、また明日！」

小さくからブンブンに変わっていく手の振りを遠くに眺めながら俺は思う。

…ふええ、恥ずかしくて明日から学校行きたくないよう…

*

しかし世の中はそんなに甘く無い。

帰り道も夕飯時も入浴中も就寝中も、なんか知らんがひたすら悶えていたら気が付いたら教室の前に立っていた。ザ・ワールドが目醒めた瞬間である。

…入りたくねー。だっつてクラス内では普通に仲良しとか思われちゃっつてんでしょ？

てかクラスの連中も俺と相模が仲良くしてる事に疑問を持てよ。

だが今から帰るわけにも行かず仕方なく教室の扉を開けると、隣の席にはすでにお隣さんが待機していた。

やべえ…なんか超ソワソワしてんですけどあの子…

ステルス全開で極力気付かれないように席へと向かうのだが、なんだかいつもより周りの視線を感じてしまう気がする。なんっつーの？

ニヤニヤしてるっていの？

今まで気付かなかったってだけで、本当は毎日こんな視線を向けられていたのかと思うと余裕で死ぬるよね。うん、気のせいのはず。

それでも俺はなんとか席へと辿り着く。ちなみに俺の気配を感じ取った相模の肩がビクツとしたのは内緒な。

「…お、おす」

席に着いて鞆から教科書を取り出していると、相模がモジモジと挨拶してきた。

最近は慣れたもんな朝の挨拶のはずなのだが、今朝はなんとも恥ずかしい。

「…おう」

チラリと目線だけを向けて挨拶とも言えない挨拶を返すと、相模はすぐさまプイツと顔を逸らした。そんなに恥ずかしいのなら、無理に挨拶してこないでもいいのよ？

しかしここにきてふと思う。

———そういや、良い隣人付き合いつて……なに？

そう。これからどうすればいいのか分からないのだ。

相模はこれからも今までと変わらない良い隣人付き合いをお願いしますって言ってきたけど、じゃあ良い隣人付き合いつてなんぞや……？

今までは相模が教科書を忘れてそれを俺が見せる。

その対価として飴やら雨の日の弁当やらを貰っていたのだが、もうそれは無くなるのだ。

だって教科書を見せる必要はもう無いわけだから、対価の飴も弁当も無いわけだ。

それならば、これからはどうやって隣人付き合いをしていけばいいのだろうか。相模とこういう関係になるまで、隣の席の女子と関わった経験が無いからまったく分からない。

てか、〃今までと変わらず〃なんて土台無理な話なのではないか？

だって俺と相模の関係なんて「挨拶・教科書・飴・弁当」の四つ程度の関係なのだ。そのうち三つは昨日で終了したんだし、あと残された関係は挨拶くらいなもの。

…ああそうか、つまり相模の言う「今までと変わらない良い隣人付き合い」とは、もうお互いに過去の件は忘れて、朝と別れの挨拶くらいはする、当たり障りの無い関係になりましたよ…と言うことなのか。

なるほど、そういう事か。

そりやそうだ。相模がずっと俺に伝えたかった事は昨日で済んだのだ。もうこれ以上相模が俺に関わる必要性なんて無いもんな。

…ふむ、緊張しちやって損したぜ。要はほとんど関わりを無くせばいいってだけの簡単なお仕事なわけね。

「…」

肩の荷が降りた。三学期が始まってひと月ちよつと。フハハハ、ようやく至高のボツチ生活が再開されるのか！

………肩の荷が降りたはずなのに、降りた肩は次第に落ちていく。

んだよ…肩の荷が降りたんじゃなくて、肩を落とすしちやってるだけじゃねえかよ俺。

俺は、いつの間にか相模との隣人生活を結構楽しんでしまっていたのか。プロボツチ失格だろ。

……まあいい。また元に戻るだけだ。今はちよつと寂しいとか感じちやっても、その内すぐに慣れんだろ。

「…あの、ひ、比企谷…?」

「ひゃ〜?」

ちよつと? 急な声掛けはやめていただけじゃないですかね…。不意打ち過ぎて気持ち悪い声が出ちゃったじゃん。

もう朝の挨拶は済ませたし、あとは別れの挨拶まで用事は無いんじゃないかね…?

しかしそんな俺のどんよりとしたしよーもない思考は、次の相模の

台詞によつて、どこか遠くに吹き飛ばされたのだった。

「あつ……と……今日、さ……二限の歴史と五限の現国の教科書忘れちゃつたから……見せてもらえない……？」

「……は？」

——開いた口が塞がらないとはこの事である。

どうやらこの隣人付き合いはこれからも通常営業で行われていくらしい。

てか二科目に増えてるし。

「お前やっぱアホだろ……」

俺はそっぽを向いて、若干口角が上がつて塞がらなくなつてしまつた口元をぐにぐにとマツサーズしつっそう眩くのだった。

「……あ、あと、その……きよ、今日は雨降つてないけど……なんとなくそういう気分だったから……えと……お弁当作ってきたから……。だから、購買とか行つちやわないでよね……！」

……どうやら相模さんは、今後の隣人付き合いに関して、今までと同じ通常営業どころか、さらに一步先へと進む事をこそ望まなご様子です。

はあ……こりや残り二ヶ月弱のおとなりさんとの隣人生活、なかなか忙しい事になりそうだな……。

——そんな事を考えつつも、俺は早くも本日のさがみん弁当に思いを馳せるのだった。

了

【特別編】 バレンタインと相模さん 上

二月半ば。世間ではなぜかキリスト教の聖人ヴァレンティヌス（英語読みバレンタイン）が時のローマ皇帝に処刑された日を、天にチョコレート掲げキヤツキヤウフフと祝っているという、そんなカオス溢れる季節。

とまあ、大抵そういう捻くれたこと言うヤツつて、ただ羨まけしからんつてだけの負け組なんだよね。

『クリスマス？ ハッ、俺んち仏教だし！（涙目）』的なやつとほぼほぼ同義。

そこへ行くと俺なんかは圧倒的な勝ち組といえる。だって小町にチョコ貰えるから大好きな日だし。

フハハハハ！ 圧倒的じゃないか、我が妹は！

だがつい先日生徒会主導バレンタインイベント、あれはいかん。なんで三浦が葉山にチョコ渡したいつてだけで、あそこまで大々的なイベントを催さねばならんのか……

まあ俺の何気ない提案から発展しちゃったんだけどね、てへ！

おかげである日は偉い目にあってしまった。なんで最近奉仕部周りはあんなに殺伐としてんですかね。

なにが殺伐としてるつて、なんか雪ノ下と由比ヶ浜と一色がギリギリしてるんだよね。最近つてか、三学期が始まってちよつとしてからくらい。

三浦が葉山にチョコ渡す為に開かれたイベントだったのに、なぜ俺がああ三人から執拗にチョコの味見をさせられなければならんのか……。あ、三人にプラスして川……川……川サキサキも交ぎつてきてたわ。

あいつら俺が涙目になってんのにお互い張り合うように牽制するように、次から次へとチョコを口の中に押し込んできやがんの。

てかその押し込んでくるチョコの中に、たまにチョコに似せて錬成

されたダークマターが混じってくるから夕チが悪い……

あれで、元々誰も呼んでないのに勝手に来ちやう予定だったらしい陽乃さんが病欠してなかったら、たぶん俺今ごろICUで、川の対岸の爺ちやんに手を振ってることだったわ。あ、爺ちやん父方も母方も健在だった。じゃあここはひとまず戸部で。

「……うふっ……ああ、思い出しただけでも気持ちわりいわ……」

これは暫らくチョコとかダークマターとか食えねえな。ダークマターは元々食い物じゃなかった。

と、そんな事を思っとうなだれていると……

「ねえ、どうかした……？ 体調とか、悪いの……？」

今日も今日とて絶賛教科書貸し出し中のお隣さんから心配のお声が掛かりました。

「……いや、ただの思い出し吐き気だから気にすんな」

「ふっ、なによ思い出し吐き気って。思い出し笑いならともかくさ。まっ、あんたが授業中に思い出し笑いとかしてニヤついてたら、それはそれでヤバいけどー」

授業中ゆえに小声でそう言って、口元を押さえてクスクスと笑うお隣さん。

相模南は今日も元気です。

*

あの千葉県民憩いの場での一件から二週間弱。幸いな事に俺の悪い噂はおろか、相模の悪い噂も広まらずにいてくれている。

なにせ相模があつての遙とゆつこに啖呵を切ったのだ。だから俺はてつきり、その翌日くらいからは嫌々な噂……それこそ文化祭の真実やら体育祭の相模の泣き喚き騒動の顛末。最悪「相模さんってあのヒキタニと付き合ってるらしいよ！ プークスクス」なんて、有ること無いことエトセトラの下賤な噂が流れてしまうのかもしれないと、ある種の覚悟をしていた。それはもちろん相模も同様だろう。

だが蓋を開けてみれば、相模や俺の噂などは一切流れてはいない。

これには些か肩透かし状態ではあるが嬉しい誤算だ。

これはあくまでも単なる想像にしか過ぎないのだが、あの遙とゆつこにも、なにかしら思うところがあつたのではないだろうか。

確かにあの場では相模に対する不満を口にしてはいたが、ヘタレで狡猾で薄っぺらくてどうしようも無かつたはずのあの相模の涙まじりの真っ直ぐな訴えに、あの二人もなにか感じるところがあつたのだろう。

相模がこうして善くも悪くも変わったように、あの二人だって善くも悪くも変わっていく。

別にあいつらだって根っからの悪人なんかではないのだ。相模にしてもあいつらにしても、たまたま意見が食い違つたっただけの、どこにでもいる普通の女子高生なのだから。

と、ここまでで話が終われば単なるイイハナシダナーで済むのだが、別に遙とゆつこの件は、あの日から約二週間の間に起こつた事例のほんの一例に過ぎず、むしろ一番の問題はここからなんだよなあ……

一番の問題。それは、こうして今日も今日とて机を寄せ合つて、一冊の教科書を二人で見ているというこの状況。

こないだなんてあれだからね。相模が「忘れたから見せてくんない？」つて言つてきた教科書を、たまたま俺も忘れちゃつた日があつてね。そしたらこいつ……

『……あ、ごめん比企谷。忘れたつて勘違いしてたみたい。持つてきてたから、今日はウチが見せたげる』

などと言つて、結局机を寄せ合つて一冊の教科書を二人で見た日があつたからね。

なんなの？ 俺のこと好きなの？ 教科書なんてただの口実で、実はただ俺と机を寄せ合つて一緒に授業受けただけなのん？ なんて、危うく勘違いして告白してHRで発表されちゃうところだったわ。発表されちゃうのかよ。

さらにはあの雨の日限定の弁当。

憩いの場の翌日、雨でもないのに弁当を作ってきてくれたと思ったら、なんかそれから毎日弁当持つてくる気だったからね、この子。

3日目で気付いて流石にそれは勘弁してくれって止めたら、

『……だ、だよね。……ウチのお弁当、あんま美味しくない……もんね』

と、弱々しい笑顔でこう来ましたよ（白目）

ええ、もちろん言ってやりましたよ。美味いから。美味いに決まっ
てんだろ、と。

俺を自殺に追い込む事が目的なのかな？

でもこの弁当はあくまでも教科書を見せる代わりの対価。そういう
う約束のはず。

なのにたかだか教科書見せるだけで毎日弁当貰うのは割りに合
わない。等価交換にならないただの施しだ。それでも作っ
てきてくれるというのであれば、あまりにも申し訳ないから、お前が
なんとやろうと金払うからな、って言ったら、ようやく……よ、う、や、く
渋々折れて、毎日ではなく週一プラス雨の日で、との約束を取り付け
られました。

やったね八幡！ ……やったのか……？

……そりやね。いくら俺が相模の卑怯なウルウル涙目攻撃に弱
いとはいえ、こつちだつて必死にもなりますよ。

教科書にしても弁当にしても、まだ以前は良かった。

クラスメイトの連中には大して気にもされていないはずだと、無理
やり自分に言い聞かせていたから。言い聞かせていられたから。

しかし今では他でもない当の本人、相模の口から聞いてしまったの
だ。

『相模と比企谷が最近仲が良いらしいと噂になっている』
と。

………そんな無理に決まっただろうが！

アホか！ そんなん聞いちやつた後に、毎日毎日何時間も一緒に教科書見るとか一緒に弁当食うとか、一体どんな拷問だよ！

ねえ、俺を辱めたいの？ 恥ずか死めたいの？

そんなこんなで、今日もとなりの相模さんと生暖かい視線を送ってくれるクラスメイト達に精神をぎりぎり削られながらも、俺 比企谷八幡もなんとか元気です。

*

しかしそんなお隣さんだが、今日は朝から様子がおかしい。……またかよ。

ここ最近の相模は、なんだかんだで俺との隣人関係にも慣れてきていたようで、たまにもじもじはするものの、基本的には結構普通に接いられていると思う。

まあ今まで他人と接した事がほとんど無い人生を送ってきたから、なになが普通かなんて知りませんがね！

なのだけれども……今日の相模は朝から久しぶりにおかしいのだ。なんていうか、すつごく落ち着かない。

チラチラそわそわチラチラそわそわ俺を見てくるこの様子は、まるで初めて教科書閲覧を要求してきた日や初めて弁当を作ってきた日、そして初めて一緒に帰って一緒に道草食った日を思い起こしちゃうかのようなチラそわっぷり。

——あ、これめんどくさいやつだ。それもかなりの高レベルで。

それに気付いた時、途端に俺は早く帰りたくなった。どれくらい早く帰りたいかというと、金曜の夜に残業させられているサラリーマンくらい早く帰りたい。

最近はただでさえクラスメイト達からの生暖かい視線が痛くて堪らないというのに、ここへ来てのこの面倒臭そうっぷりは明らかに死

活問題だ。よせ、その術は俺に効く。

そしてこの日1日、俺は相模からのチラそわ攻撃をなんとか耐え切り、帰りのHR終了と共に部室に逃げ込もうと即座に立ち上が……ろうとしたら、なんかブレザーの袖を掴まれててちよいちよ引つ張られてたんで立ち上がれませんでした。

なん……だと？ 俺の動きを予想して先回りしていただと……う……くつそ、こうも簡単に捕まってしまうとは。仕方ないな、これは八幡検定3級を贈呈せねばなるまい。

「なんだよ……」

「あ、あの……さ」

おいやめろ。俺の袖を可愛く掴んだままもじもじすんな。

目があ！ 周りの目があ！ ……あ、ガハマさん、教室でその顔はマズイですって……

「お、おう」

「きよ、今日……部活終わったら……ウ、ウチんち来ない……？」
「」

*

ウチんちってなんだろう？ 初めて聞く単語ですね。ウチ十んち。んち？ なにそれ下ネタ？ アラレちゃんが好きなのアレかな？

「ちよ、ねえ……ひ、比企谷……？」

ウチんちについて深く深く思考を沈めてしたら、そんな不安そうな声と袖をちよいちよ引つ張られる感覚に、現実へと引き戻されました。

ウチんち……凄まじい破壊力だ……俺は一体どれだけの時間、この謎めいた単語に時を止められていたんだ。

「お、おうスマン。なんでもない……で、なんでいきなりお前んちに行かなきゃならんの……？」

やだ！ 俺ってばウチんち超理解してるじゃない！

なんかアレだよ。ウチ呼び女子って、自分の家に人を誘うの難儀だよ。ウチのウチ来ない？ とか言われても「え、なに言ってるの？」ってなっちゃう。特に字面にしちゃうと、もうなんだかよく分かん。

「あ、いや……だ、だって」

俺の質問に、相模はびくんと肩を震わせた。だからその弱々しい表情はやめて！

「ほ、ほら……明日って学校休みじゃん……？」

「まあ、……だな」

そう。明日2月14日は我が愛妹の入試がある為、平日にもかかわらず学校が休みなのである。まるで小町の為に休校になるみたいと言いつ方をしてしまったが、あながち間違いではないのでオッケーだろう。

「だ、だから、ほら。……前に約束した、熱々トロトロの手作りドリアとか……食べにくらいいいじゃん……？ とか……？」

「……は？ いや、だってアレはまた今度って」

「？ ……だから今日がその今度んだけど」

「？」

「？」

……あつれー？ なんか認識に隔たりがあるようだよ？

「今度」って、決して訪れる事のない幻の未来の約束の言葉なんじゃないのん？

「……ウチ、今日の為に何度か練習してみて、ようやく結構美味しく作れるようになったんだよ」

そう言つて、チラチラと横目で窺うように覗きこんでくるお隣さんではあるが、俺としては「はいそうですか」と安請け合い出来るような簡単な案件では無いのである。

いやいや普通に無理でしょ……女子の家に手料理食いに行くとか、それどこのリア充なんですかね。

だから俺は、引きつってしまった顔でその申し出を……

「……………そ、そか、やっぱり無理……だよ」

「やべ……！　なんか俺超ドリア食いたいわ。なんなら今日はドリア以外ノドを通らないまである」

即座の降伏宣言。もう無理ゲー。バンゲリングベイくらいクリア不可だよこれ。

「っ……!!　……ホ、ホント比企谷ってムカつくー……食べたいんなら、最初っからそう言えっての……っ」

——ほんの一、二カ月前までならば、相模南という人物とこういうシチュエーションが重なった場合、まず確実に疑ってかかっていただろう。

あの悲しげな笑顔も弱々しく遠慮する姿も全て計算づく。狡猾に回りでどく相手を陥れる為の、嘘まみれの狡賢い三文芝居に過ぎない、と。

でも今はこれが本気なのか芝居なのかもう分からん。完全なお手上げだ。

……だって、ムカつくだのなんだのと悪態を吐きながらも、俺の隣でパアツと花が咲いたような笑顔を浮かべつつ、心底ホツとしたように胸を撫で下ろしているこいつの姿を見てしまったら、これが嘘だの芝居だのなんて、軽々しく言えなくなってしまうから。

「じゃ、じゃあさ、比企谷が部活終わるまで教室で待ってっから、ウチんちまで一緒に行かない……？」

「……まあ、お前んち知んねーし、しゃあねーな……」

「でしよー！　てか……ぷっ、あはは、これで家知ってるとか言われたらめっちゃキモいけどー。さ、ウチそれまで友達と話してよーっ」と。

「……ん、んじゃ、さ」

すると相模は頬を染めてニカツとはにかむと、胸の高さくらいで小さく手を振り、

「……ま、またあとでね、比企谷……っ」

一言そう口にするるとニヤニヤしている取り巻き達の下へとタタッと走っていつてしまった。

「……お、おおう」

果して相模の耳に、このどうしようもないくらいキモい返事が届いただろうか？

だってさ、またあとでね、って、なんかすげえ照れくさくない？

——比企谷八幡。 齡17歳にして、初めて女子の家に手料理を食べに行く事が決定しました。

続く

【特別編】 バレンタインと相模さん 中

「えと……家（うち）……ここだから……」

「お、おう、そうか」

なにこの新婚初夜みたいな探り探りの照れ臭いやりとり。

——学校の最寄り駅から一旦千葉まで出て、そこから線を乗り換え電車に運ばれること数駅。

さらに到着した駅から市営バスに揺られることしばし。そこに相模宅はあった。

ここに辿り着くまでの道中もそこそこイベントまみれだったので割愛しておこう。まあ強いて言うなら、基本相模がモジモジして、それを見て俺が悶えてたくらいか。……割愛じゃなくて説明するのも恥ずかしかっただけの話ですね。

にしてもこいつってなかなか遠いところから通ってんのな。こりや毎朝弁当作ってくるとか大変だわ。やっぱ断つといて正解だったな、などと思いつつ、ぼーつと様子を見てみると、相模はおもむろに鞆から鍵を取り出して玄関に差しこむ。

ん？ 相模って鍵っ子なのか？

「あ、家って共働きでさ、ウチが帰って来た時は基本誰も居ないんだよね」

そんな俺の視線を感じ取ったのか、相模は自身の鍵っ子な生い立ちを説明しながらカチャリと鍵を回す。

「ぼーん」

なんてことない空気を醸し出して適当な返事を返した俺ではあるが、実のところ内心超安心！

いやあ、実は超緊張してたんですね。促されるまま無抵抗でここまで来ちゃったけど、これ親御さんになんて言ってお邪魔すればいい

のん？ て。

だって可愛い娘がある日突然目の腐った異性なんて連れてきたら、俺なら即始末する自信まである。

まあ平日の夕方なら父親は居ない可能性が高いから、問答無用に始末されちゃう心配はないかもではあるが、母親は母親で通報の危険性もあるからね。

なのでとりあえず第一関門は突破だが……ん？

いや待て、じゃあこれから俺は知らない天井の下で、相模と二人きりで過ごさなきゃならないの？

「……んで今日は両親とも残業らしくって、どっちも結構遅いみたいだから、あんま気にしないで遠慮しないで上がって」

マジかよ……ただ二人きりで過ごすだけじゃなくて、遅くまで誰も帰ってこないという新たな情報が追加されました。遠慮しないでころか相模宅にお邪魔するのをご遠慮させていただきたい気分です。

てかなんでわざわざそんなこと言うのん？ 長居確定なのかな？

「……えと、ど、どうぞで」

「……ひゃい」

どうも。意識しすぎで超キモい自意識の化け物 比企谷八幡です。

若干の武者奮い(なにに対して猛ってるんですかね)を起こしつつ、相模が用意してくれた来客用のスリッパに足を通すと、なぜかクスリと隣から小さな笑いが聞こえた。

え、なに？ キモい噛みつぶりに鼻で笑っちゃった？ それとももしかしてスリッパにアロンアルファーとか仕込んであった？ それを見た相模がほくそ笑んだの？ なにそれもはや陰湿な虐め！

「……んだよ」

「あ、ごめん！ ……な、なんか、うわあ、家に比企谷が居るんだーって思ったら、すごい不思議な感じがして、思わず嘔き出しちゃった……！」

やだ！ なにその眩しいくらいのはにかみ笑顔！

文化祭時の相模と別人過ぎて、さがみん宇宙人成り代わり説を唱えちゃうレベル。思わず惚れて告白して以下略しちゃうだろうがこの

やろう。

「……ああ、そう。つうかお前が連れて来たくせに不思議もなにもねーだろが……」

とは言うものの、友達が初めて家に来た時って、なんか妙な違和感というか照れ臭さがあるよね。なんかコイツ俺ん家に居るんだけどー！ ってね。

もちろんお察しの通り、初めてもなにも友達を家に誘った事も来た事ありませんがなにか？ でも友達じゃないけど、知り合いが家に来て妙に照れ臭かった事ならあるんだからね！

……サブレ預けに来た由比ヶ浜だけど。

「だってしよーがないじゃん、比企谷がウチん家に居るって光景をいざ目の当たりにすると、やっぱ超可笑しいんだもん」

へへ〜と悪戯っぽく笑う相模だが、なんだか嬉しそうに見えるのは気のせいでしょうか。はい、気のせいです。

「……さいですか」

「こそ、超笑えるー！ ……って、いつまでも玄関で話してたってしよーがないじゃんねー。んじやホラ、リビングこっちだから早く行こっ」

「へいへい」

——こうして、ぱたぱたと愉しげに鳴るスリッパの音に連れられて、俺は人生初の同級生女子のお宅訪問経験という快挙を成し遂げたのであった。

あ、文化祭ん時の雪ノ下んちへの訪問は経験から除外の方向でおなじやす。だってあいつんち豪華すぎるわ綺麗すぎるわで、お宅訪問というよりモデルルーム見学にしか思えなかつたんですもの。

× × ×

「……」

なんとという所在の無さだろうか。やはりリビングでテレビでも観

ときや良かったな……

相模にリビングダイニングに通された俺は、なんとも幸せな家庭のひとつコマのような光景の中、とてもとても肩身の狭い思いで縮こまっています。

『比企谷ってもうお腹空いてる?』

『おう……まあ、な』

『じゃウチさっそく作るから、比企谷はリビングでテレビでも観てたら?』

『……あー、いや、作ってもらってる間ひとりであっちに座ってんのもなんか悪いし、人んちでひとりテレビ観てんのもなんか落ち着かねーから、なんか手伝える事あつかも知れんし俺もこっちに居るわ』
『そ? たぶん結構時間掛かつちゃうし手伝いとかしなくていいからね? 比企谷って性格悪いくせに変なトコ律儀だよねー。お客さんなんだから気にしなくてもいいのに。んー、でもま、それならテーブル着いて待つてれば?』

『了解。あと性格悪いのくだりらへん、一言余計じゃないですかね……』

『ひひっ』

そんな流れで俺はダイニングテーブルの席に着いているのだが、なんだかとても居心地が悪い。……いや、居心地が悪いというよりは、なんとも気恥ずかしくて落ち着かない、という方が正しいのだろうか。

なにせ目の前では制服にエプロン姿の同級生が、なんとも幸せそうに、鼻歌を口ずさみつつフライパンとおしりを振っているのだ。

ミニスカートな制服にエプロンってなんかいいよね! つい先日バレンタインイベントで雪ノ下達の制服エプロン姿を見たばかりだというのに、女子の家で二人きりでのミニスカエプロン姿という背徳感がなんかやばい。目のやり場と気持ちのやり場に困る事この上ない。

なんで俺もこっちに残っちゃったんだよう……今からやつぱりビングで待つてるとか言えないよう……

ダイニングに残った俺をそわそわと気にしつつ、エプロンを照れくさそうに装着した相模はレッツラクツキング！ と、てきぱきと作業を進めている真つ最中である。

まずはすぐさま炊飯器のスイッチを入れ、挽肉と刻んだ野菜を炒めてトマトを投入し、普通ならドリアには不要のミートソースを作る。

通常ドリアとは米の上にホワイトソースとチーズを乗せてオーブンで焼くだけの料理ではあるが、そこはさすががみん。サイズのミラドリ風に、ちゃんとミートソースも掛けてくれるようだ。

そして現在、ヘラでフライパンの中心……弱火で薄力粉とバターを混ぜ合わせたものに、少しずつ牛乳を流し入れて激しく掻き混ぜている。その激しさは、あの頑丈なフライパンナちゃんが思わず悲鳴を上げるほどだ。「ふええっ……そ、そんなに激しく擦らないでよおう……！ そんなに激しくされたら、自慢のお洋服（テフロン）がボロボロになってすっぱんぽんになっちゃよう……！（CV寿美菜子）」

こいつなかなかやるな。まさかミートソースだけでなくホワイトソースまで一から作ると思わなかったわ。どっちか、もしくはどちらも缶詰とかで済ますもんかと思ってた。

ほんのひと月前にはあんなにいびつな弁当作ってたくせに、いつの間にかこんなに料理の腕を上げてたんだか。

いやまあこいつの料理の腕が日増しに上がっていったのは、みるみる旨くなっていく相模手作り弁当を、こいつの隣で食っていた他ならぬ俺が一番よく知ってるんですけどね。

ったく。なにが手伝う事あつかも知れんだよ。小六家事レベルの俺には手伝える余地なんか全然ねーよ。

これは専業主夫を目指す者として一大事。このままでは家事は奥さん任せになっちゃって働きに出されちゃう危機が現実味を帯びて

きたぜ。

……いやいや、べ、別に相模が奥さんになるとか、そういうんじや全然ないんだからね!?

そんな益体もない事を考えてひとり悶えていると、不意にピーピーと電子音が鳴り響き、気付けばダイニングは炊きたての米の甘い香りに包まれていた。

その電子音と共に相模の作業もタイミング良く終了したようで、彼女はパカッと炊飯器の蓋を開けるとグラタン皿に米を敷き、出来たてのホワイトソースを回し入れる。

そしてその上になんとも旨そうなミートソースを掛けると、たっぷりとチーズを乗せてオーブンレンジへIN。

「比企谷お待たせ。あと十分もしたら出来るからね」

「おう……なんか悪いな、手伝えること無くて」

「だから最初っからいいつつたでしょ？ もうちよいだから大人しく待っててねー」

「……へーい」

お母さんと子供かよ。もちろんフォークとナイフを持った手でテーブルをばんばん叩くような真似はしません。ちゃんと大人しく待ってますとも。

包丁の音も炒める音も消失したキッチンでは、オーブンレンジが頑張ってドリアに焦げ目を付けてくれているうおーんという音と、手際よく洗われていく調理器具たちの音だけがカチャカチャ響く。

……あ、じゃあその洗い物だけでも俺がやれば良かったじゃねーか。まあだつたらせめて食い終わった後の食器くらいは洗うかなー、なんて考えつつ、次第に辺りに充満し始めるドリアの旨そうな香りに鼻腔をくすぐられながら、ルンルンと食器を洗っている相模の後ろ姿を頬杖ついてぼーっと眺めていると、やべえなんかこういうのが幸せとかいうやつなのかも………なんて事は一切頭によぎったりなんかしてません!

あつぶね! 俺ってばなに油断してアホなこと考えちゃってんでしょ! やっぱ頭よぎっちゃってたんじゃねーか。

「どしたの？　なんか顔真つ赤だけど」

「ふえ!？」

びびびびつくりしたわ！　悶々と下らないこと考えてたら、いつの間にか洗った物を終えた相模が顔を覗きこんでいたらしい。

なんだよふえって。キモいな俺。

「もしかして調理熱でキッチンちよつと暑かったりした？　換気しよつか？」

「……いや、大丈夫だ。問題ない」

「そ？　じゃあやつは暑かったら言っつてね」

そう言っつてはたたとオーブンレンジを覗きに行く相模さん。

いやマジでぼーつとしてる時に急に人の顔を覗きこむのは心臓に悪すぎるんでやめてね、いやマジで。

「あ、そろそろいい感じかもー」

するとレンジの中を覗きこんだ相模からそんな声が上がった。どうやらついに完成のようだ。

がちやこんとレンジの扉が開け放たれると、キッチンはミートソースとチーズがとろけて混ざり合う、かぐわしいドリアの香りに包まれた。

× × ×

「いただきます」

「い、いただきます……?？」

完成したドリアと、ついでに作ってくれていたポトフが並べられたテーブルで、お手々の皺と皺を合わせて幸せ☆ないいただきますのご挨拶。

そこはいい。そこまではいいのだ。

……しかし、これは……

「な、なあ相模」

「ん？　どうかした？　早く食べよ？　せつかくの熱々とろとろが冷めちゃうんだけど」

隣できよとんと可愛らしく小首を傾げる相模に、俺はどうしても言わなければならぬ事がある。

「……なんでお前、隣に座ってんの？ 普通こういう場合って向かいとかに座るもんじゃねーの……？」

そう。料理を並べ始めた時点でそこはかかない違和感を感じてただけど、なんかこいつ、とても自然な流れでぬるつと隣の席に着いてるんだよね。カウンター席かよ。もしくはバカップル。

「え、……………あ」

そう言われてハツとすりさがみん。あ、これ素のヤツや。

「ご、ごめん……………！ ウチ超自然にこつちに自分のぶん並べちゃった……………」

あわあわとパニくる相模は、もはや真つ赤な茹でみんと化し動揺しまくる。

「……………あ、や、別にそこまで気にしてるわけでは無いんだが……………あ、あーアレか？ お前んちって、こうして食卓囲うのが普通とかなのか？ もしくはそこが普段のお前の定位置だから、そこに座るのが普通だったってだけなんだよな」

まあ食事の席が二人の場合、向かい同士にポジションニングするのが一般的かもしれないが、もしかしたらそれは単なる思い込みなのかもしれない。二人きりの食事なのに、このポジションニングでは不自然だと部外者の俺が果たして言い切れるのだろうか？

否。いま俺が座ってる席が相模の母ちゃんの定位置で向かいが父ちゃんの定位置。そして母ちゃんの隣が相模の定位置だとしたら、相模的にはこの位置取りはなんらおかしくもない自然なポジションングなのだろう。ならば母ちゃんと二人で食事をする際は、こうして横並びになったとしてもおかしくないではないか。

むしろこの場で異物なのは俺なのだ。郷に入っては郷に従え。先人たちの教えに従うならば、いま俺はとても余計な事を言っているのではないだろうか？ たかだか異物でしかない俺が、勝手な思い込みでなんにも知らない相模家の作法を否定しようとしたのだから。

なんとという傲慢だろうか。その身勝手な傲慢さで、この家の住人た

る相模南をここまであたふたさせてしまった己の矮小さに情けなくなる。と同時に、なんとも申し訳ない気持ちになつてしまった。

すると相模はなんとも気まずそうな顔でおずおずと俺を見る。

やめてくれ、そんな顔すんな。お前がそんな辛そうな顔する必要なんてねえだろ。申し訳ないのはこつちの方なんだ。

そう言おうと思つたら、相模は俺の向かいの席をぴつと指差した。

「……………やー、別にそんな事ない……………けど。……………そもそもウチの普段の席つてそつちだし……………」

違うんかい！ 俺、ひとりでどんだけ無駄なこと考えてんだよ。なにが先人たちの教えだなにが傲慢だ恥ずかしい。

「……………は？ じゃあなんでお前こつちに座つたの……………？」

「あー、やー……………」

相模は、林檎園に無数に成っている数あるリングゴの中でも、特に熟れきつたリングゴの如く真っ赤に染まった顔を俯かせる。

「その……………なんか最近、比企谷の隣が安心出来る……………つて、ぎやー！」

ち、違う違う！ 安心とかじゃないから！ そそそそういうんじやなくつて……………！ ひ、比企谷と居るトキはなんか隣に居るのが当たり前

みたいになつちやつてるから……………だからつい自然に隣に座つちやつたというか……………？ ま、まあ……………そんな感じ……………です」

「そそそ、そうか」

「うん……………」

ちよつと待つて！ 思つてたより八割増しの恥ずかしい答えが返つてきちやつた！

なんだよ俺の隣が自然つて。しかも言い間違いとはいえ安心とか言い掛けちやつてたからね？ ドキドキしてハートがキャッチされちやうわ。

「て、てかマジでごめんね、二人きりのテーブルでウチと隣同士とか嫌だよ……………！ さ、移動移動……………つ……………」

そう言つて相模はカチャカチャと自分の取り分け皿やらスプーンやらを移動させようと立ち上がる。

その表情はなんとも気まずそうでもあり……なんとも淋しそうでもある。……うん、アレだね。シユンて感じ。

「……はああく」

ホントこいつズルいよなあ。セリフから表情まで全部卑怯。こんな追い返せるわけねえだろ……

いつもの事だからいつかーと、半ば諦めにも似た悟りを開いた八幡大菩薩たる俺は、深く溜め息を吐くとぶっきらぼうにボソリと呟く。

「あー、なんだ……めんどくさいし、別にわざわざ移動する必要も無いんじゃないね」

「え」

「……グラタン皿とか超熱いし、移動すつために、またあつちからミトン持ってくるのもめんどくせえだろ……。それに——」

そしてここで、今やお馴染みとなりつつある照れ隠し界の天地魔闘の構えが炸裂する。俺は頭をがしがしと掻いて、ぷいっとそっぽを向くのだ。

こんなん恥ずかしすぎて頭でも掻いてないと言えるわけねえだろ。

「……お前の言いたい事も、まあ分からんでもないしな。……なんつーか、俺的にも……相模は向かいに居るよりも隣に居る方が……その、なんだ、お、落ち着くわ……」

きゃー！ やだなにこれもう死んでもいいかな？

……許すまじ相模……！ この孤高のキングオブぼっちに、こんなハラキリモノの恥辱を味合わせるだなんてえ！

「落ち……着く、の……？ ウチが隣に居る方が……？」

「ば、ばっかお前、そういうんじゃないや無くてだな。学校では四六時中隣の席に居るお前が向かいに居ると落ち着かないっつーだけの話だからや」

惜しい！ 頑張ってたのに最後の最後でちよっぴり噛んじゃった！

「そー！ そっか！ 比企谷も……隣のの方がしっくりくるんだ……！」

でもこのお隣さんには、そんな残念で悲しい噛みっぷりなど、どうでもいいほんの些末な出来事のように。

「……そっかそっか」

俺の恥ずかしいセリフにぱあっと破顔したかと思えば、次の瞬間にはそのセリフを噛み締めるかのように、何度もそう呟き、うんうん頷いていた。

なんなのこの子、ちよつと情緒不安定すぎないかしらん？ と、恥辱で涙目な横目でチラチラ様子を窺っていると、

「……しゃ、しゃーないなあ〜！」

相模は形の良い胸をむんつと張り、まるで勝利宣言でもするかのよう、にへつと微笑んで偉そうにこう宣いやがるのだ。

「じゃあしゃーないから、ウチもこつち座つててあげよつかなく」

「……そりやどうも」

——その後無言で食った熱々とりとりドリアはととてもとても美味しかった……んだと思う。

でもさ？ このこつ恥ずかしい空気の中で、食ってる様子を超不安そうな顔でじい〜つとガン見されたら、味なんて分かるわけないでしょうが……

続く

【特別編】バレンタインと相模さん 下

食事が終わると、そこは途端にまどろみの空間へと様変わりする。なんか眠いにやー、朦朧として意識が飛んじやいそうだにやー。てかぶっちゃけ、この後どうすればいいのか分からず、困惑で頭がくらくらしてるだけだったりする。

本日俺は、以前図らずも約束してしまったことを果たすべく、こうして相模家へと馳せ参じた。

だからどんなに落ち着かなかろうが照れ臭かろうが、目的を果たすという目標が目の前にあつたからこそなんとか耐えられた。

だが今の状況はどうだ。

本日の目的——相模の手作りドリアを美味しく頂く——を達成した今、俺にはこの場所に留まる理由がない。

にも関わらず、なぜ俺は未だに帰れないの？ 俺の目的は相模の手作りドリアを美味しく頂くのであって、決して相模を美味しく頂くではないのよ？

なのになんで相模家のリビングでソファーに座ってテレ東アニメ観てるんだってばよ。相模をソファーの隣にはべらせて……

「へー、ウチ普段アニメとか全っ然観ないんだけど、けっこー面白いんだー」

「……」

やめてえ！ あんまり興奮して動かないでえ！

キミがちよつと動いたたびに、キミの髪から制服から体から、ほわんと甘くイイ匂いが漂ってくるんだよう……

てか近い。確かに隣の方が落ち着くとかおかしなこと口走っちゃいましたけども、このちよつちやめのラブソファーで隣に座るのはさすがに近いですってば。

食後のティータイムを、俺の好きそうなアニメでも観て過ごそうよと、こいつは食事が終わった途端に俺をリビングへと誘い込んだ。

べ、別にアニメなんて好きじゃないんだからね！ 普通の高校生よりはちよつと多めに観てるくらいなんだから！

食いつ終わったら片付けだけしてすぐ帰ろうと思つてたところに間髪入れずのソレだったから、呆気に取られた俺は拒む事も抵抗する事も帰る事も出来ず、あつさりとりビングへと連行された。

相模はテレビを点けて俺を強引に座らせると、コレ観て待っているようにと強く言い聞かせ、キッチンから紅茶を持ってきて今に至る。温かい紅茶が注がれたカップを両手で持ち、テレビ画面に集中している相模を横目に見て思う。

——こいつ、最近の相模にしては珍しく強引じゃね？——
と。

正直な話、俺はこんな状況に陥るかもしれないという覚悟がどこかにあつた。

食事が終わる↓じゃあ帰るわ↓え……？ もう帰んの……？

という、いつもの抗い難い卑怯なルーティーンに阻まれ、なかなか帰してもらえないかも……という覚悟は確かにあつたのだが、こんな形で足止めされるのはちよつと予想外だ。

どうしたのだろうか……ともう一度横目を向けると、相模は相も変わらずテレビに釘付け。そんなにアニメが面白いの？

「……」

いや違つた……ここに来てまさかの面倒くさいやつだった……アニメに集中してんのかと思つたら、実は全然集中してなかつた。

これはアレだよ……なんか俺に用事があるんだけど、言いづらくてこちらの様子をもじもじ窺いながらそわそわしてる例のアレだよ……

こいつ、テレビを観るフリして実は超そわそわしてやがった。

こうなつてしまうと、俺には手の打ちようがない。

無視して帰っちゃうか、黙つて相模が口を開くのを待つかの二択しかないのだが、前者を選ぶと心が傷んでしまうのももちろん出来ませ

ん。なんならどんな顔をするのか想像しただけの今でさえ心が張り裂けちゃいそうまである。飼い馴らされすぎだろ。

——ああ、めんどくせえなあ……

そう思いながら、小説の文字列だけを追うかの如く、心ここに在らずでただ画面を見つめる事およそ一時間。長いな！

ついについに、ようやく相模が動きを見せたのだ。

「……ん！ん！ん！あ、あー、……けふんけふんっ」

なんだそれ可愛いな。

わざと咳払いをして自身に注目を集めようとするこの行為。

なんだかとても見慣れた光景ではあるのだが、どこぞの熊男のげふんげぷこんおこぽーんとはエライ違いだ。

「……どうした。のど飴でも欲しいのか？」

そんなわきや無いんだけど、ここは一応咳払いに触れといてあげる優しい八幡です。

「飴!? ほ、欲しい! ……って、ち、違うから! い、今はそういうんじゃないかってえ……」

……び、びつくりした。なにこの子、ほんの冗談で言っただけなのに、なぜにそこまで過剰に飴に反応したのん? どんだけ飴に飢えてるのかしらん? まあ確かにこいつ飴が好きだったけど。

「そ、そのー……」

訝しい視線を不躰に送っていると、相模はまたもじもじしはじめ

る。……おい、ようやく動き出したんだから、またスタート地点に戻らないでくれよ? こっからまた一時間テレビの前で待機はさすがにキツイっす。

そんな願いを知ってか知らずか、相模は決してこちらを向かないように真正面を見据えながらも、唇を尖らせこつちをチラリあつちをチラリと目を泳がせつつ、なにやらソファアの肘掛けと自分の身体の間隙間をガサゴソと弄り始めた。

ふむ。どうやらスタート地点に戻ることは無さそうで一安心なんだけど、こいつなにしてんの? 自分とソファアの間になんか詰まっ

てんの？

すると相模はくるりとこちらを向いてきゅつと目を瞑ると、すーはーすーはー呼吸を整える。別に目を瞑ったからといって、これはまさかキス待ち!? とか期待なんか一切していない。してないっただけだ。

そして……

「……は、はいコレ！ あ、あんたにあげる……っ」

なんと自分とソファの間から、ピンクのリボンでとても可愛くラッピングされたひとつの包みを取り出したのだ。

そしてこいつはその包みを俺の胸元にとんと押し付けてきた。

「……は？ え？ な、なにこれ」

てかいつの間にそんなところにこんな仕込んであったの？ 紅茶と一緒に持ってきて、ソファに座る時にこっそり背中中に隠してたのだろうか？

「そっ……そのっ……あ、明日……学校休み……だから……っ」

これはなにかと訊ねたのに、返ってきた答えがこれである。Qに対してのAが成立してなくね？

「……………あ」

え、えつと……マジで？ いやいやいや……そんなわけねえだろ。だって相模だぞ？ あの相模が俺と一緒に聖ヴァレンティヌスの処刑された日を祝うとか、そんなの有り得ないだろうが……

——有り得ない……か。

確かに有り得ないよな、ちよつと前までの俺とこいつの関係だったら。学校一の嫌われ者な俺と、そんな俺を蔑み忌み嫌う相模。

でも今はどうだろうか。本当に有り得ないと断言出来るのか？

……答えは否だ。有り得ないなんて事は有り得ない。

少なくとも今の俺と相模の間には、なんて言ったらいいのかは分からんけども、なんつーか……よく分からん変な絆くらいはあるように

感じている。

毎日の生活のなか、決して必要以上の会話なんかはしなくとも、嫌々ながらも毎日隣で教科書見せて毎日のように飴を貰う。たまに隣で弁当食って、そしてこうして家に呼ばれて手料理だって振る舞われるのだ。

これでなんの関係性も無い、なんの絆も無いだなんて言ったら、こいつに……いや、こいつにも俺自身にも、とても失礼な事のように思う。

そしてこいつからのこの思いがけない贈り物を『貰う義理が無い』『貰えるはずが無い』だなんて勝手に否定するのも、また失礼だ。

「その……なんだ」

だから俺は、「なんで俺に？」などと余計な言葉を口にするのはやめておこう。

こんな捻くれ者の俺にだって、人様に迷惑をかけないという矜持がある。ならば渡す事を一時間も躊躇い、それでもこんなにも弱々しく情けない顔を向けて、震える手で頑張って渡してくれた相模の気持ちくらいは、素直に受け取ろう。

「さ、サンキューな……」

「っ……！ うん！」

素直に受け取った俺に一瞬驚いた表情を浮かべながらも、次の瞬間にはぽあつと花を咲かせた相模南の素の笑顔に、俺は柄にもなく胸がぽかぽかと温かくなるのを感じるのだった。

× × ×

リビングは今や嬉し恥ずかし桃色空間へと変貌していた。

相模からバレンタインの贈り物を手渡されてからというものの、お互い相手に視線を向ける事もなく、ただただ時間ばかりが過ぎていく。

この空間に響くのは、先程まではまったく聞こえていなかったはずのカチコチカチコチ喧しい時計の音と、もはや誰の注目も浴びていな

い、テレビの騒がしい音だけ。

ふええ……この空気どうしたらいいのん？ 俺からなにか話し掛けなきゃならないのん？ マジかよ難易度高すぎんだろ。でもこのままじゃ埒が開かないのもまた事実。

ではこちらから一体どんな話題を提供するべきか考えた時、ふとひとつの考えが舞い降りてきた。

——「そーいやコレって、なにチョコと考えればいいんだ？」と。

噂によるとバレンタインチョコには様々な種類があると聞く。本命チョコは語らざるもがな、友チョコ義理チョコ自分チョコ。

ではいま俺の手に大事そうに抱えられているこの包みは、一体どれに区分されているのだろうか。

本命チョコ……うん、無いな。自分チョコ……いやいや俺さがみんなじゃねーし。

ではやはり友チョコか義理チョコが相応しい区分なのだろうか、……うん、そーいや俺と相模って友達なのだろうか？ 友達って、お互いにこう……「俺とお前友達なー！」みたいな宣言とかって必要なのかな？ 悲しい事に友達が出来た事がないから、ぼっちの人にはそれが分からないのですよ！

するとこれはやはり義理チョコってのが妥当な線だろう。てか考えるまでもなく義理だろ。だって相模はあの日、サイズで俺にこう言ったのだから。

ウチの大切なおとなりさん……と。

「……」

いやいや今更だけど大切なおとなりさんってなんだよ。どんなカテゴリーに入んだよそれ。

……でもアレだ。確かに意味は分からないが、これは相模に話題を提示するという目的においては、なかなかのナイスチョイスでは無かろうか？

これならばこの照れ臭い空気を一気に打破し、いつも通り軽く憎まれ口を叩きつつも苦笑し合えること請け合いである。

「そ、そういや……だな」

「ふえ……!?!」

なんだよふえって。可愛いなおい。

「こ、コレってアレか？ 義理チョコならぬ、隣人チョコとでもいうヤツか？」

……隣人チョコ。この日、また新しいバレンタインの形が生まれてしまった。これは流行る！ 流行んねーよ。

しかしどうよ相模。この話題の振り方はなかなかのものだろう。いくら義理チョコとはいえ、あの相模が俺にチョコを渡したという照れ臭さからこんなにもむず痒い空気が漂ってしまっていたが、これならばこの義理チョコ騒動も笑い話で済ませられるだろうよ。

ほれ、早くしろ。「ぷっ、なによ隣人チョコって。あんたマジでバツカじゃないのw」って俺を蔑む返しからおしやべりを開始してくれりやいいんだよ相模！ そしたらこの嬉し恥ずかし桃色空間は一発で打破されるんだ！

さあ、ばつちこーい！

——だがしかし、残念ながらそこには俺の望む答えは返って来なかった……

「……えと、そのお」

俺からの問いに、一瞬だけほんの少しの哀しみを滲ませた困惑の表情を浮かべた相模。

しかし、その目にはすぐさま力が宿る。「……んっ！」小さくガッツポーズを取って自身を鼓舞し、じつと俺を見つめてくる。近い近い。だからこのソファアーじゃ見つめ合うには近すぎィ！

「そ、それっ、ぎ、義理チョコでも隣人チョコでもないから！」

……な、なんと相模は………隣人チョコには一切のツツコミが無かった………!

いや驚くのはそこじゃなくて。

「こっ、これはそのっ………！ ほ、ほん」

お、おい、ちよつと待て……！　なんだよこの、さつきまでのむず
痒い桃色空間なんて目じやないくらいの変な空気……！

え、嘘だろ？　さ、相模が俺に……ほ、本め……

「本……っ……くうっ！　ほ、ホントは友チヨコだから！」
デスヨネー。

やだ！　僕もう穴掘ってくりゆう！　これだから嫌なんですよ！
なんで期待しちやっつてんだよ、バカ！　ボケナス！　八幡！

とまあ冗談はここまでだ！（白目）

もちろん当然の如く本命だなんてちつともこれっぽっちも万が一
にも思っつてなかつた俺は冷静に頭の回転をスタートさせる。

……友達、か。

本当は少しだけ期待していた。俺と相模って、最近友達みたいじゃ
ね？　って。だからもしかしたら相模は俺の事を友達と思っつてくれ
ているのではなからうか……っつて。

でもこいつ言っつてたから。比企谷はおとなりさんだからって。だ
から俺も淡い期待はしないようにしていた。相模が俺を友達と思っ
てくれるわけないだろう、と。

そんな相模がこうして直接友チヨコをくれたのだ。正直、嬉しくな
いはずはない。嬉しくないはずは無いのに、俺はまた余計な事を考え
てしまう。

本当に俺を友達と思っつてくれているのか？　こんなに簡単に信用
してしまつてもいいのか？

「……あ、つと、その……ごめん！　勝手に友達扱いしちゃって！　ウ
チと友達なんて、嫌……だよね」

そんな、あれこれと色んな事を考えていたら、相模はまたもや不安
そうに顔を強ばらせ、シユンと俯いてしまった。

どうやら俺は、難しい顔をしてしまつていたらしい。こんな時でさ
え無駄に相手の言葉の裏を探ってしまう、俺の自己保身から来る
しよーもない悪い癖だ。

「……すまん、別に嫌とか、そういうんじゃないやなくてだな……なにせあの相模が俺に友チョココつてのが意外すぎて、ん、まあ驚いてる、な。だつてお前、あくまでもお隣さんって言うてたし」

相模は、別に嫌なわけではないという俺の言葉に少しだけ安心したのか、強ばらせていた顔を上げ、

「それは、ね……？ その……」

あははくと頬をかりこりしながら、相模はなんとも言いづらそうに苦笑する。

「ほら、あとひと月ちよつとしたら、ウチらつて三年になんじやん？」

「おう、そうだな」

「そしたらさ、ウチと比企谷、違うクラスになつちやうかも知らないし——」

「……おう」

「仮に同じクラスになれたとしたつて……もうお隣さんになる確率なんて、天文学的なレベルで無いじゃない……？」

……さすがにそれが天文学的な数字かどうかまでは分からんけど、でも確かにたまたまた同じクラスになって、そしてたまたまた隣の席になる確率なんて、ほぼ無いに等しいだろう。

なんか今の生活——こいつが隣の席に居るといふ事が当たり前になりすぎて、そんなこと考えてもいかなかったな。

「……そこでウチは思ったわけ。あ、このままじゃあとひと月ちよつとで、ウチと比企谷つて完全な無関係になつちやうじやん……つて。……それはちよつと、嫌……だなんて」

「そ、そうか」

なんだこれ。また妙にムズムズしてきちゃったんだけど。

無関係になるのが嫌とか、どうしようなんか超恥ずかしい！

「だからつ……ちよつと、関係を一步だけでも進ませたいなつて……お、思いましたよ」

「……そうですか」

あまりの照れ臭さに、向かい合いながらもお互い顔を合わせられない。これだったらさつき勢いでチョコ貰った時の方がよっぽどマシ

だったわ。

すると……相模は俺の手に抱えられていた包みをガサリと強引に奪いとつた。

ええ……？ まさかの没収？ 人生初の肉親以外からのチョコがああ！

「あいつ、比企谷……」

「ひゃい」

相模は両手で持った包みを、再度俺に向けてびしいと突き出す。

「もっかいやり直し！ 順番逆になっちゃったけど……と、とりあえずウチとまずは友達になって下さい！ う、受け取って貰えますか……っ？」

「とりあえず」とか「まずは」とか気になる要素はたつぷりなのだが、相模はそう叫んで深く頭を下げた。その顔は、またも茹でダコのように赤く紅く染まっている。

そんなに何度も何度も真っ赤になれるなんて、キミはタコのフレンズなんだね！ すごーい！ あ、これ友達申告されてるから、同じように赤くなっているであろう俺もタコのフレンズになっちゃうんだね！ たのしいー！

「……ま、まあ、その……なんだ」

そんな新しく仲間入りしたタコのフレンズたる俺は、相も変わらず頭をがしがしそっぽを向いて、バレンタインの贈り物をぶつきらぼうに取り返すのだった。

アレだ……俺は一度貰った物は、なにがあろうと手放さない主義なんだよ……

「よ、よろしくおにがしまっしゅ……」

比企谷八幡十七歳。

友達居ない歴が年齢と一緒にだった俺が、十七回目のバレンタイン前に初めての友達が出来ました。

終わり

☆オマケ☆

「あのっ、ホワイトデーのお返しの件なんだけど……」

「……え、もうお返しの話……?」

やだこの子つたらちよつと現金すぎやしませんかね。もしかしてお返しの為に友達になったのかな? 何倍返しをご注文でしょうか。

「……飴が……いい、なー。て、てか、飴以外ならお返しなんて要らないままである!」

飴……?

び、びつくりした。どんな金銭的要求が来るのかと思ってたら飴なんかでいいのん?

「は? なんで飴なんだよ……ま、まさか飴じゃなくてアメジストじゃねーだろな……何十倍返しすりゃ許してくれんだよ」

「別に宝石なんか要求してないから! あ、飴でいい。飴がいい。……言つとくけど、定番だからってクッキーとかマシユマロは論外だから! ……普通のもんでもいいから……!」

なんでクッキーとマシユマロは駄目なんだよ美味いだろ。

でもそういやこいつ、さつきもやけに飴に食い付いてたっけ。どんだけ飴ラブなんだお前。

「だからなんで飴なんだよ」

「べ、別にいいでしょ! てかホラ、飴はウチのエネルギー源だって言っただじゃん! 授業中とか勉強中とか、脳の活性化……? とかの為に、よく舐めてんだっての……」

「……ほーん」

教科書はあんだけ忘れるくせに、脳の活性化の為に糖分補給は忘れないとか、目的の方向性が間違つてませんかね。

「だから飴ね、飴。飴ちょうだい」

はあく……ま、何倍返しを要求されんのかと思つてたから、ただの飴玉で済むならこちらとしても万々歳だし、そんなんで喜んでくれるんならそれでいいか。このままだと飴がゲシユタルトしちやいそうだし。

「……わあつたよ。じゃあ飴やつから」

「マジで!? やっつ………たああ!」

「……」

おいおい、こいつ本日一番の大喜びなんだけどなにこれ？ 飴くらい自分でいくらでも買えんだろうに。

「約束だからね！ 楽しみにしてるからね!」

「……お、おう」

飴ごときでのあまりの剣幕に軽くドン引きしつつも、初めて出来た友達の心底嬉しそうな真つ赤な笑顔に、俺もついつい赤くなって微笑んでしまうのでした。

☆おしまい☆

からかい上手の相模さん【攻撃編】

ぽよん、と。それは不意に肘に当たった。

とてもとても柔らかな感触のそれは、言うなれば、アンパンマンの唯一の友達でもある愛と勇気を、男の子に魂に深く刻み込んでくれる素晴らしき宝物。

不意にとは言ったが、正確には不意とは呼べないのかもしれない。なぜなら先ほどからそれがずっと当たりそう当たっちゃいそう当たっちゃったらマズいよね？ と気を遣っていたからだ。気を遣っていたにも関わらず当たってしまった以上、それは不意にあらず。

一応先ほどから当たらないように気をつけていたのだが、こちらが一方的に気をつけていようとも、お隣さんが俺の気遣いに気付かず距離を詰めてくれば、当たってしまうのは致し方のない事なのだ。むしろ必然である。

いやまあ、当たらないように無理な体勢のまま固まってたから腕がつりそうになっちゃって、力を抜いた途端にぽよんとむにょんと当たっちゃったんですけどね。

「……ちよつ？ い、いま比企谷、ウチの胸肘でつついたでしょ!? し、信じらんない！ ウチらって友達なんだけど！ こ、こういう異性的なスキンシップとか、まだ許してたくない……!?」

「おいふざげんな、お前が近いんだよお前が。つついたとか人聞きの悪いこと言うな」

あとまだってなんだよまだって。いつかスキンシップ許してくれる予定なのん？

「だ、だってしょうがないじゃん！ 近寄らないと教科書見えないんだから」

「……つかお前、いま授業中なんだからもうちよいポリューム下げろよ。マジで勘弁してくんない……?」

「……あ。……あ、あんたが悪いじゃん！ 人の胸触るから」

「おいさらに人聞き悪い言い方になってるぞ、ホント勘弁してください」

すみませんクラスの皆さん、お隣さんが騒がしくて。平身低頭土下座しますんで、お願いだからこっちは見ないでください！

特に平塚先生と由比ヶ浜さん、目に、目に光をオ！ そんな目で見られたら、俺なんて簡単に死ぬるからね？

——あの体感時間約一年前のバレンタインから約二週間が経ち、俺は今日も変わらぬぼっちライフを満喫している。だがしかし、そんな悠々自適なぼっちライフを送れているはずの俺の毎日は、隣の席に鎮座する鬱陶しい隣人によって、今日も簡単にブチ壊されているのである。

なんとというか、あれから相模との距離がやたらと近くなったのだ。いや、近くなったというよりは、相模が一方的に距離を詰めまくってきていると言った方が正解なのかもしれない。

あのバレンタインで俺と相模は友達になった。てかこの時点でぼっちライフを満喫とか言ったら、全国のぼっち達を敵に回し兼ねないので、もうぼっちを気取る事はやめておこうね！

……そう。俺と相模は友達になったのだ。だからその翌日から相模との距離が妙に近くなったのは、それが友達の距離、という事なのだろう。

教科書見せれば腕と腕がくっつくとか日常茶飯事だし、それが見辛いページとかだと今みたいに相模がぐいぐいと身を寄せてきて、ふによふによバストを肘でつんつんしちやつたりする事もある。

いや、胸触っちゃったのは今日が初めてだよ？ 嘘です、実は二回目でしたありがとうございます。

成る程これが友達の距離感なのか。なに？ こんなに近いものなのん？ 友達の距離感って。

いや待て、俺ってば戸塚とこんなに近かったことないんだけど。やはり俺と戸塚は友達では無かったのかッ……！

驚愕の真相に胸がグイグイ締め付けられていると、不意にくい

引つ張られる制服の腕。見ると、真っ赤な顔した相模が厭らしく口元を綻ばせ、俺だけに聞こえるようぽしよぽしよとこら囁いた。

「……ほんつと比企谷つて油断なんないよねー。もう肘でつつかれたの三回目なんだけど。つかまだなんかニヤついてるし。キモっ。まーたなんかやらしい事でも考えてたんじゃないのー?」

「……アホか、そりやお前が無駄に教科書忘れる回数と無駄に近すぎる回数だろ。お前が教科書忘れなければ起き得ない事故だ。むしろお前から当たってきてるだろこれ」

つかお前、いい加減教科書持つてこいよ。なんなら教科書一式もうひとセット揃えて、片方を学校に常備しといてもいいレベル。それと、どうやらパイタッチは三回目だったみたいですからありがとうございます。

「はあ? 女子の胸触つといて普通そういうこと言う? マジ信つじらないこいつ」

「だから触った触った言うんじゃねえよ……」

もうなんなんだよこいつ……、死ぬほどうぜえ……

隣の席になってからのしおらしい態度にすっかり忘れてしまっていたが、この相模南という女、元来とても調子に乗りやすい女だ。

勘違いして調子に乗ってやらかして痛い目に合う。こいつはそうやって文化祭や体育祭ですこぶる痛い目に合ってきたという、輝くような実績の持ち主である。

あのサイズやバレンタインで話を聞いてみたところ、やはりこいつは今まで俺に対して何かしら思うところがあつたらしい。罪悪感やら後ろめたさ、あとは友達でもなんでもない、隣の席同士つてだけの妙な関係性。

そういつた負の感情やらなんやらが遠慮という形を成し、今まで俺に対しては相模南らしからぬ態度となっていたのだろう。

だが、そこへ来ての友達宣言である。それも今までの溜まった感情を全て吐ききつてからの。要はもう相模の中からは『比企谷に遠慮しなきゃ』という文字が取り払われた、という事なのではないだろうか。

つまり今この女、かなり調子に乗っていてもウザイ。

まあ、こうやってニヤニヤとムカつく笑顔を向けてきているウザイ姿こそが、相模南が相模南である証とも言える本来の姿なのだろうし、ようやく俺にも本来の姿を晒すようになったのだと喜ぶべき事なのかもしれない。

……それは理解しているのだが、ホント鬱陶しくてたまらないんだよ……

それもただのムカつくニヤニヤではない。なんとも照れ臭そうに瞳を潤ませ頬をポツと染めながら、こちらの反応を窺うようにチラチラと視線を向けてくるのだ。なんだろうか、このからかわれている感。ホントドキドキしちゃうんでやめてもらえないでしょうかね。

「やっぱ比企谷って、ウチの事やらしい目とかで見てんじやないのー？」

「……うぜえ」

——ああ、そういや鬱陶しいからかいと言えば、ちよつと前にこんなこともあつたっけ……

× × ×

俺はあの日もいつもと同じように、四限目のチャイムと共に昼飯の準備を始めた。ちなみに準備と言っても、自分の席で飲み物を用意するだけである。

『はい、今日の』

『おう、さんきゅ』

なぜならこうしてお隣さんから仕出し弁当が配給されるから。

なんだよこの熟年夫婦みたいなやりとり。これをいつもの光景のように語っちゃってる時点でちよつとアレだよな。

でもこれがここ最近の俺と相模の普通のやり取りなのだから仕方ない。だから、クラスのあちらこちらから注がれてる生暖かい視線なんて、俺は知らない見えない気付かない。

その日のさがみん弁当はメインが肉じゃがだった。なんともあざといメニューチョイスではあるのだが、相模の肉じゃがは結構美味しいので、弁当が肉じゃがの日は秘かにテンションが上がっているのは内緒だ。

俺に合わせてくれているのであろうかなり甘め濃い目の味付けで、ごはんがごはんがとってもススム君である。

その日も当然のように美味かったのだが、そこは流石に芋である。芋な以上は食べ進めていけば喉が詰まるのは仕方のないこと。さらに冷めきった芋であれば尚更だ。

もちろんいつか出来たてホカホカをこいつん家で食わせてもらいたいなあとか思った事なんて、一度きりだつてないんだからね！

そしてその日、今までにないくらい思い切り詰まった。それはもう盛大に。芋ってマジ恐い。死という物を簡単にイメージ出来ちゃうくらい命を取りにきたもん。

『ガハッ！ ゲホゴホ……ッ！』

『ちよ!? だ、大丈夫!? ほら、お茶、お茶飲んで!』

ガハゲホ咳き込んでいる俺に、お隣さんは優しくペットボトルのお茶を差し出してくれたっけ。あまりの優しさに、危うく求婚して振られちゃうとこだった。

『あ、あぶねえ……、死ぬかと思った』

『ちよつとやめてよね、マジでこっちがビビるから。いくらウチの肉じゃがが美味しいからって、慌てて食べ過ぎだつての』

と、こういうところも自己アピールがウザかったりする。

いやまあ確かに美味いんだけど、目の前で喉詰まらせて死にそうになつてる俺を見て、なんでちよつと自慢気で嬉しそうなんだよ。

『……別に慌てて食つてたわけじゃないんだが……。まあとにかくお茶さんきゆな。助かった……。わ?』

そして俺は、そこまで言つてようやく現状がおかしいことに気が付いた。なぜ今俺の命を救つてくれた飲み物がお茶なのだろうかと、なぜなら俺が用意しておいた飲み物は、当然マツ缶なのだ。

余談ではあるが、弁当をマツ缶で流し込むとか、素人さんから見たら正気の沙汰ではないように見えるかもしれない。が、よく考えてみてほしい。

ほんの数年前までは、どんな物を食べるにしろ常に牛乳で流し込んでいたのだから、牛乳がマツ缶に変わっただけのお話である。そうおかしな事ではないではないか。むしろおかしなのは、給食に付いてくる飲み物が牛乳、という部分だろう。

今からでも遅くはない。全国の教育委員会の皆さん、給食に牛乳つてどう考えてもおかしいでしょ？ 今すぐマツ缶に変更するべきです。

おっと、マツ缶愛の強さ故つい話が逸れてしまったが、今はマツ缶か牛乳かについて議論している場合ではなかった。

そう、俺を死の淵から救い出したのはマツ缶ではなくお茶。缶ではなくペットボトル。

不思議な事もあるもんだと思ったね。なにせ俺の身の回りにお茶のペットボトルなど無いはずだったのに、なぜか俺を救ってくれたのが、どこからともなく現れたペットボトルのお茶だったのだから。

……俺は恐る恐るお隣さんに目をやった。すると呆れたような、それでいて心配するような眼差しで俺を覗きこんでいたお隣さんの両手には、今まさに世間で話題沸騰中のペットボトルのお茶が握られていたのだった。

『……………あ。……………えと、そのお茶って、相模のか』

『え？ そうだけど。あれ？ なんか問題あった？』

『……………特には』

ま、まあ不測の事態ではありましたがし不測の致すところでごさいますので、この件に関しては特に問題は生じなかったという事で有耶無耶のまま流してしまおうしよう……、そもそも高二にもなつてこの程度の事でドキドキしちゃうとかキモいしねっ！ と、当時の俺はそう思っていました。

それなのにこの女、気まずそうに頬を熱くして、相模から目を逸らしたりペットボトルの飲み口をチラ見したりという俺の挙動不審な

態度に気が付いてしまったらしく、頬をカアツと染め上げながらも、途端にニヤアと笑みを浮かべたのだ。とても厭らしく、とても陰湿に。

『……あ、そういえば、このお茶さつきウチが飲んだばっかだったっけ』

『……』

『あれ？　どうかした？　比企谷。なんか顔赤いけどお』

『……』

『え？　まさか高二にもなって、間接キスとか意識しちやつてないよねえ？』

『は？　ば、ばっかじゃにえくによ……？』

『うっわ、マジで?!　間接キスだよ？　間接キス!』
なんでそんなに間接キスを強調するのん……？

『ちよ、マジ!?　もー、比企谷ってさー、ウチのこと異性として意識しすぎなんじゃないのー？　ウチら友達なんだし、あんま異性として意識されちやつてもねー。……と、友達って肩書きが邪魔なら、別に取ってあげても、いいけどお?』

『……う、うぜえ』

× × ×

思い出しただけでもウザイ。とにかくウザイ。このクソ女、あの時も今とおんなじように、厭らしく口元を歪ませてやがったんですよ、ええ。

三学期始まった直後のしおらしいさがみんなを返して！　いやまあしおらしい頃はしおらしい頃でちよくちよくウザかったけどね。

結論、相模はどう転んでもウザイ。

そしてこういう調子に乗ったからかい癖みたいのが始まると、大抵こいつは決まって発する台詞がある。例えば、そう。ニヤニヤした口から今まさに出てくる、こんな鬱陶しい台詞。

「ホント比企谷、ウチの友達になる気あんのー？ あんま異性として意識し過ぎてると友達にはなれないかんね？ ……か、肩書き邪魔なら、別に友達じゃなくなつたっていいんだけどお……？」

ほらコレですよコレ。こいつは何かって言うと、すぐ友達だの肩書きだのと持ち出して、友達やめてもいいけどお？ なんて脅してくるのだ。異性として意識、という謎のワードをことさらに強調して。そりや俺に異性として意識されるのはかなりキモいだろうし、そうならないようキツく釘を刺しているんだろうというのわかる。

でもさ、お前から言い出した友達申請だよな？ なんで俺が脅されてるみたいになっちゃってるのん？ これじゃまるで俺から友達申請した上、俺が友達じゃなくなってしまう事を恐れてるみたいじゃないですかやだー。

別にいいんだぞ、こつちとしてはお前と無関係になつたって。隣同士で会話がゼロになったり教科書見せんのやめたり、飴がもらえなくなったりさがみん弁当が食べられなくなつたって、俺は少しも寂しくなんてないんだからね！

……ま、まあ？ この照れ臭そうなニヤケ面で言ってる時点で冗談だということくらい分かるし、別にそこまでイラつきはしないから、まだ友達は続けさせてやつたっていいけども？

ただね、とにかくウザイ。ホントムカつく。なにそのこちらの一挙手一投足を見逃すまいと窺うような顔。あれでしょ？ ちよつとでも恥ずかしがる素振りでも見せようものなら、途端にぷぷつて笑うんですよ？

だから俺は相模ごときのからかいになど一切動じた様子を見せず、今日もいつものように適当にこう答えるのだった。

「……へいへい。そりやすいませんでしたね。今後は気を付けます」

すると相模がこう返してくるのもまた、いつも通りの光景なのである。

「……はあく」

——なんでそこでやれやれ顔の深い溜め息を吐かれなくちやならないのか、ホント意味わからないです。

どうすりや正解なのん？

× × ×

しかしである。このからかったあとのもしてやったりなニヤケ面といい、先日の間接キスネタといい、なんかとっても既視感あんだよね。ホントここ最近こんな光景よく見んなあ、つてくらいにはデジャヴ。なんなの？ この『今日も上手くからかってやったぜ』感いっぱいなドヤ顔。勝ち誇った顔してからかい上手を自称してる感じ。腹立つ。

だが、俺の記憶の向こう側にある光景は、確かに今の現状に酷似してはいるのだが、俺が知っているのはこんなムカつく光景ではなく、むしろ……こう、胸にムズムズきゅんきゅんくるような感じなんだよなあ。

ああ、でもその既視感の中の光景にもムカついてたかもしれない。ただしそれは、からかってくる方ではなく、からかわれている方に対して。確か、からかわれている奴に対して『青春を謳歌せし者よ爆発しろ』とか思ってたような……

……からかうのが上手な可愛い女子と、からかわれるのがもはや職人芸な、うらやまけしからん男子。そしてその男に軽く殺意を憶えてしまう程の青春模様……

「……あ」

そうかアレか……

思い出してみればなんの事はない。からかうのが上手なJCとからかわれ上手なうらやまけしからん中坊が、ゲッサンと深夜で絶賛イチャコラしてるじゃねえか。サンデーGXは読んでてもゲッサンは読んでないから、実はアニメでしか知らんけど。

そしていま俺の視界に映るこのロケーションはどうだ。現在の俺

と相模の教室での位置関係って、正にアレと一緒にじゃん。

——こいつ、さてはアレ観てやがるな……？

続く

からかい上手の相模さん【反撃編】

イマドキの高校生でリア充サイドの女。さらにその中でもカースト上位に位置する相模とは、通常であれば接点など存在しない深夜アニメネタ。男女が入れ替わって隕石回避しちゃったりパヤオアニメだったり、一般人のあいだでも話題になったようなアニメ映画であればいざ知らず、地上波、それも深夜にやってるアニメなんて、相模のような正にイマドキ女子高生とは真逆の位置にあるもの。

それ故こいつがアレを観ているなんて発想自体、普通ならありえない。常ならばそう思うところだろう。

だがしかし今は違う。なぜなら先日ドリアをご馳走になりになったあの日、二人でリビングのソファアに腰掛けている時に、確かに相模はこう言ったのだ。

『へー、ウチ普段アニメとか全っ然観ないんだけど、けっこー面白いんだー』
と。

これはあくまでも推測の域に過ぎないが、多分相模はあの時アニメの魅力に気付いてしまったのだ。そして目についたアニメを視聴するうちに、たまたまアレに辿り着いてしまったのだ、と。

そしたらどうだ。位置関係だけで言えば、画面の向こう側で楽しそうに男子をからかうヒロインの位置に座るのは自分。そしてそのヒロインにからかわれ、常に敗北感に頭を抱えている主人公の位置に座っているのは俺。明らかに相模はからかう側の立ち位置。そして俺はからかわれて悶える側の立ち位置である。

そしてその相模さんと言えば、現在友達になったばかりの俺に対して絶賛調子乗り乗り中なのだ。

この公式から導き出される答えはひとつ。「ぶっぷー、比企谷の奴をからかって、照れさせて楽しんでやろう！ ギっまあー！……しか考えられない。

ではあの間接キス事件も胸触らせ事件も、全部相模の計画だったというわけだ。

くっそお相模さんめー！　してやられたぜ！　まんまとドキドキしちゃったじゃねえか。あぶねえ、もしこれが中学時代に折本にやられていたとしたら、ドキドキどころか簡単に落ちちやつてるところだったわ。

別にこんなこと一切されてなかったのに、簡単に落とされていたどうも俺です（白目）

つーかやるならやるで徹底してやれよ。照れたら負けのからかいバトルだというのに、からかう側のお前がいつもいっつもそんなに照れててどうすんだ。どんだけからかい下手だよ。本家見習ってもっと飄々としてろよ。

……しかし、あつぶね！　幸いにしてまだバレンタイン以降雨は降ってないが、もし雨が降っていたとしたらこの女、傘を忘れたフリして俺と一緒に帰って相合傘させる気だったろ。そしてその帰り道、俺に愛してるとかアイラブユーとか言わせようと画策して嘲笑う気だったんだろう。な、なんと恐ろしい……

でも甘いよ、甘すぎるよ相模さん！　その程度の企みで、俺を陥れられると本気で思っていたのかい!?　（完全に陥れられました）

危ないところだったが、気付いてしまえばどうという事はない。企みが露呈した以上、もう相模ごときのからかいなんかは気にしなればいいだけなのだから。

例えスカートで逆上がりしようと、例え消しゴムに『ろうかみろ』などという意味不明な文言が書かれていようとも、そんなものはもう見戯に等しいのである。

言っておくが、俺はあの中坊と違ってお子様じゃないんでね。別にお前のからかいに付き合ってたりはしないぜ。

相模ごときにニヤニヤと勝ち誇られた面をされるのはちよつとだけ悔しいけれど、仕返しとかして相手にしちゃったらなんか負けな気

がするから絶対やらん。

フツ、馬鹿め。勝手にやって勝手に照れてやがれ。

——ん？ 消しゴム……？

そうか、その手があつたか！

確かにあの中学生男子と違って、大人な俺は別にからかい返して照れさせてやろうだなんて、ガキ臭い反撃をしようとはまでは思わない。そもそも反撃なんかしなくても、こいつ勝手にやって勝手に照れてるし。

やだ！ 気付かなかつただけで、労せずして常に勝利していたのか！ 負けを知りたい。

しかし反撃とまではいかなくとも、未然に攻撃を防いで相模にぐぬ顔をさせてやる事は十分可能なのである。

……そう、あの消しゴムネタを使って。

フハハハハ！ ざまあみろ相模！ 今この俺が、お前の姑息な作戦など事前に叩き潰してくれるわ！ せいぜい悔しがればいい！

× × ×

消しゴムドツキリ。それは、学生間におけるイタズラとしては、とてもポピュラーかつ効果的なイタズラであり狩猟方である。

何気ない会話の中に甘い罠を巧みに忍ばせ、攻撃対象を誘導し罠を発動させる、言わばハニートラップ。

「あ、そういえばさー、消しゴムに好きな人の名前書いて最後まで使いきれたら両想いになれるとか言うよねー」などという餌で獲物に自身の消しゴムケースの中身を意識させ、いざこつそり見てみるとトラップ（『バカが見るー！』等）が発動。そして罠に掛かり絶望の表情を浮かべる瀕死の獲物を陰から覗いて嘲笑うという、古来から伝わる恐ろしいハンティング方法である。

その例に漏れず、アレでも当然のようにその罾は仕掛けられ、そして当然のようにはからかわれ上手が引つ掛かっていた。まあそこは流石のからかい上手系JC。そのポピュラーな罾の中にも独自のアレンジを加えていたが。

まさか授業中にトイレ行ったフリをして廊下から様子を覗き、消しゴムに『ろうかみろ』と指示を書き込みほくそ笑んでいるとは、なんという恐ろしい女子中学生か。

仕掛けるのがとても容易で、かつ破壊力も抜群と言えるこの罾。アレを観た上で俺をからかって愉しんでいる相模の事だ。もちろん俺にも仕掛ける気満々のはず。これから罾を仕込む気か、もしくはすでに仕込み済みで、トラップ発動の隙を窺っているのか。

いずれにせよ、この罾にはひとつ重大な欠点がある事をご存知だろうか？ それは、捕食者が餌を撒く前に消しゴムの中身を見てしまえば、その罾は無意味になるという事。

この罾は、あくまでも『もしかしたら消しゴムに俺の名前が書いてあるかもしれない！』と獲物に期待させておかなければならない。だからこそ捕食者は事前に前フリをしなければならぬのだ。あ、そういえばさー……、と。

考えてもみて欲しい。そういった前フリが一切無い時点で先に獲物に『バカが見るー！』や『ろうかみろ』との文字を見られてしまったとして、果たして獲物は「やられたー！」と悔しがるだろうか？

否、なにも感じないのだ。それどころか食物連鎖上位者である自分が、ただ消費されるだけの被食者に「こいつ一人でなに書いてんだ？

頭大丈夫か？」と小馬鹿にされてしまう始末。つまり、策士、策に溺れる、だ。

そしてもし事前チェックでなにも書かれていなかった場合も、当然その罾は失敗に終わる。

なぜならこういったおまじないの類いは、消しゴムを卸したての時点で名を記しておかなければ効果は無いと云われているからだ。

つまりこの時点ではまだ何も書かれていないのに、たったの数日内に「あ、そういえばさー」との前フリがあつたとしても、それはただ

の罠である——と、容易に判断する事が可能になるのだから。

だからこそ、餌を撒く前に先に消しゴムの中身を見られた事を捕食者側に知らしめる事が出来さえすれば、二度とその罠を発動する事が出来なくなるといふ寸法である。

自分の目の前で消しゴムを見られれば、調子に乗っているさすがの相模でも、この作戦は二度と使えないと悟ってぐぬぬと顔を顰めるだろうよ。

アハハハ！　ざまあないね相模さん！　せいぜい悔しがればいいさ！

そうと決まれば善は急げ。都合がいい事に、現在授業は板書きの間。今なら相模の消しゴムを奪うにはもってこいだ。

たまに黒板の方からチョークが折れる音……、いや、折れるというよりはパキョツと粉碎するような音が聞こえるのが気になるころではあるのだが、今はそれどころではない。とつとと相模の消しゴムの中身を拝んでやろうではないか。てか先生、なんでそんなにイライラしてるのかは知りませんが、あんまりイライラしていると小皺が増えちやいますよ？

……おっと、どうやらチョークがもう一本犠牲になったようだ。あれかな？　俺と平塚先生は通じあってるニュータイプかな？　やめて！　視線だけで精神攻撃してこないで！　精神崩壊しちゃう！

さて、カミーユとシロツコ遊びも程々に、そろそろヤツへと仕掛けるでしょうか。

そしてこの仕掛けにより、もし今までの予想が正しいのであれば

……

「……なあ、相模」

「ん、なに？」

「悪い、消しゴム貸してくんね？」

「……………え」

なにその間。ただ消しゴムを貸してくれとお願いしただけで、そこまで間が空くのはおかしいよね？

俺はほくそ笑む。相模には決して気取られぬように。

——フツ、やはりな。俺の予想は間違ってたなかつたようだ。

「……な、なんで消しゴム貸してあげなきゃなんないの……？」

「昨日家で勉強してる時、机に置いてきちゃったみたいなんだ」

嘘です。もちろんしつかりと筆箱に入ってます。

ぼっちはどこかの誰かさんみたいに忘れ物なんか出来ないんだよ。なぜなら忘れ物しても誰も手を差し伸べてはくれないからな！

「……え、やなんだけど」

「……おい、毎日毎日これだけ教科書見せてやってんだから、別に消しゴムくらいいいだろ」

「……ぐっ」

通常、隣の席のヤツにたかが消しゴムを貸すくらいの事で、ここま
で抵抗したりはしないものだ。

ごめん、貸してくんない？

はい、どうぞ。

この程度の簡素なやり取りで済んでしまうのが、隣人同士の消しゴ
ムの貸し借りなのである。

それは、俺の学生生活における隣の女子との今までの消しゴムの貸
し借りを思い出してみれば、容易に分かる事だろう。

CASE①！

『……ごめん、消しゴム忘れちゃったんだけど、ちよつと貸しても
られない？』

『……え。……ま、前か後ろの男子に借りればよくない……？』

CASE②！

『……ごめん、消しゴム忘れちゃったんだけど、ちよつと貸しても
られない？』

『……ブチッ。……はい。……あ、それ返さなくていいから』

っべー、俺超見栄張ってたわー。全然簡単に貸し借り出来た記憶なかったわー。

涙ながらに後ろの席の津久井君から借りられたのは、まだいい方の思い出だったなあ。

無表情で消しゴム（米粒サイズ）ちぎって机の上に投げて寄越してくれた座間さん、あの時は助かりました。本当にありがとうございました（白目）

ふええ……でもあんなサイズにちぎられたゴムの欠片じゃ、どつちにしろ返すことなんて出来なかったよう……

どうしよう。なんか辛くなってきたよう。八幡もうお家帰りりたい。

……いや待て、いかんいかん。もうあの頃とは違うのだ。

相模は座間さんとは違う。なぜなら相模は俺の教科書とか余裕で触れるし、なんなら俺が食ったあとの弁当箱だって平気で触れる特別な女の子なのだから。てかいつも弁当箱は洗って返すって言うてるのに、相模さんてば「別にいい」の一点張りなのよね。アレかな？ 帰ってからペロペロしてるのかな？ 飼い犬か飼い猫が。

だから少なくとも座間さんみたいに、俺に触られた消しゴムには触りたくないとか、そういうんじゃないはず。な、ないはずだよね！ であるならば、こうも消しゴムを貸す程度の行為を嫌がるというのは、とても違和感がある……いやさ違和感しかないのだ。

そしてその違和感が指し示す答えはひとつ。そう、俺が貸してくれとお願した瞬間から、お前が両手で強くHUGつと、HUぎゅー！ っと握り締めているソレには、すでになんらかの罟が仕掛けられていることに他ならない！ つまりなにかの拍子に俺に見られてしまつては都合の悪い「ナニカ」があるのだ、その消しゴムには！

激しい動揺が見て取れる相模を横目で一瞥し、俺はまたもほくそ笑んだ。

「なあ、早く貸してくれよ。板書き間に合わなくなりそうなんだが」

「……だ、だったらあとでウチのノート写せばいいじゃん……っ」

「いやそれ余計に手間でしょう……」

動揺もここまでくると最早滑稽でさえある。

消しゴム貸さないのにノート貸してやるとか、いくらなんでも無理
ありすぎんだろ。

「ホント一瞬で返すし、なんなら使った分のゴムは返すから」

「い、要らないわよそんなの!」

なんだよ要らないのかよ。そういや座間さんも返さなくていいつ
て言ってたっけ。女子ってみんな思慮深いのね!

……またも辛い記憶に苛まれて一人涙していると、相模がチラツ、
チラツとこちらの様子を窺うような上目遣いで、消しゴムが乗った躊
躇う左手をそつと伸ばしてきた。

「……………ほ、ほんと一瞬だからね。変なことしないでよ……………」

本当に、本当に渋々ではあるのだが、ようやく消しゴムを貸してく
れる事を決意したらしい相模。さすがに毎日毎日教科書見せて貰つ
たいて、たかだか消しゴムを貸さないというのは無理があると悟った
のだろう。

「……………別になんもしねーよ……………。なんだよ消しゴムに変なことつて」

鼻に突っ込むとか? もしくはゴムに染み付いたさがみんエキスを
ペロペロしちゃうとか? 誰がするかそんなこと。ちよつとケー
スを外しちゃうだけですよふへへ。

「……………じゃ、じゃあ、はい」

そう言つて相模は恐る恐る消しゴムを渡してきた。

あ、軽々しく消しゴム貸してくれとか言っちゃったけど、よくよく
考えたら手渡しされる瞬間って結構危険じゃね? 教科書とか弁当
ならサイズの問題ないけど、これだけ小さな物だと、渡される瞬間
にちよつと手が触れちゃうかもしんじゃないじゃん。っべー、手汗かいて
きちゃった。

「……………おう、助かる」

少しでも相模の指に触れると妙に意識しかねないので、まるで宝石
を扱うかのような慎重に慎重を重ねて、相模がぎゅつと握り締めていた
故ほんのりと温かい消しゴムを受けとった。

てかよくよく考えたら、いつも貰ってる飴玉の方が余程ちっちゃいのに、今まで手が触れたことなんてなかったわ。てへ。

ついに俺の手元へとやってきた相模の消しゴムに、口元はニヤけてしまおうし、なんだかとおつてもドキドキしちゃう。

女子の体温が残る消しゴムを手にして興奮しちゃうとか、俺って完全に変態そのものじゃないですか。そりゃ相模も変なことしないでとか言うよね。

おつと、いつまでも消しゴムに欲情している場合ではなかった。消しゴムには欲情してねえよ。

一瞬で返すと言ったからには、すぐ使ってすぐ返さなければならぬのである。

しかし、借りた消しゴムのケースを何の理由もなく突然外すという行為は、通常であれば奇行ともいえる行為だ。普通借りた消しゴムのケースとか外さないもんね。貸した消しゴムのケースをおもむろに外したら、え、なにしてんのこいつ、と危険人物認定されること請け合いである。

まあそもそも俺の目的が『俺が相模の消しゴムの中身を確認した事を相模に見せ付ける』である以上、奇行と思われようと危険人物と思われようと一向に構わないのだが、計画実行中——つまりケースを外そうとしている最中に相模に阻止され奪われてしまったては元も子もない。

なにせこの消しゴムのケースというのは案外厄介なヤツで、いざ外そうとすると中々に抵抗するヤツなのだ。脱ぐのを抵抗するあまり、あーれーお代官様くと言わせたくなっちゃうレベル。

さらにこの相模の視線である。

こいつは俺に消しゴムを渡してからというものの、絶対に変な真似はさせまいと、俺から……てか俺の手元から目を離さない。それはもう穴が開くほど、警戒と不安が入り交じる瞳でジィッと見つめている。もしも消しゴムに両手をかけようものなら、即座に奪う気概なのだろう。

しかしこの俺に抜かりなどあるはずがない。

相模の目を盗んでケースを外し、さらにはなぜ人様の消しゴムのケースを外すのかと追及された場合の理由付けも、とつくに算段などついているのだ。

……まったく。やはりお前は所詮相模だな。どう転んだって、お前は高木さんにはなれないんだよ。

そうやって慌てれば慌てるほど、警戒すれば警戒するほど、この消しゴムにはなにかがあるという事が明白になるばかりだと気付かないのか？ あのJCならこんな不用意な態度は決して取らない。仮に予定外の事態に見舞われたとしても、次なるチャンスに備えて飄々と受け流すことだろう。なんなら慌てたフリして、それさえが罠まである。

やはり中学生にも劣る相模さんなど恐るるに足らず。その程度のメンタルで俺をからかってきたこと、後悔させてあげよう！

俺はおもむろに相模の消しゴムを使い始める。ゴムの摩擦により、鉛筆の芯を紙から削り落とすのだ。

するとどうだ。強く激しく摩擦することにより、俺の机はガタガタと大きく揺すられる。それにより、中心に教科書を置くためにくっ付けられた俺と相模の机に、ほんの僅かな隙間が作られていくのは必然である。

机と机の中心に置かれた教科書。そしてその机と机の間で徐々に広がりつつある隙間。そこに浮かび上がる答えはひとつ！

『バサッ！』

そう、重力の前には教科書だろうと鉄球だろうと抵抗は無意味。落体の法則により、物体は等しくは床へと落ちてゆくのである。

「ちよ、なにしてんのよ、机揺らしすぎだったの」「おう、すまん、なかなか消えてくれなくてな」

なかなか消えてくれなくてな、じゃねーよ。どんだけ強く擦ったら机があんなに揺れるんだよ。もはや震源地（俺の机）は震度5強レベル

ル。どんだけ筆圧強いんだ俺。

あまりの筆圧の強さに、相模はやれやれと呆れた様子で俺を一瞥し

「つたくもー……」

落下してしまった教科書に手を伸ばした。

しかし、床に落ちた物を拾うのにそのままの体勢では届くはずもないので、当然屈み腰に。必然的に視線は俺から床へと注がれることになる。

フツ、さすがはお間抜けさがみん。あれだけ俺と消しゴムの行方を警戒していたというのに、突如舞い降りたアクシデントに思考を全部持っついていかれてやがる。まさに隙だらけ。

だからお前はあのJCと違って温いというのだ。

——そして俺はついに口にする。借りた消しゴムのケースを突然外すという奇行に対する理由付けの言葉を、俺の行動にすぐには対処できない体勢に入った相模の耳に届くように……

「……あー、やっぱこう丸まってると上手く消せねえな。……カドで消すか」

そう！ なんの不自然さもなく消しゴムのケースを外す言い訳。それは、カド。

消しゴムつてき、ケースから出てる頭部分つて、丸まっちゃってて細かな場所は消し辛いよね。そしてこの相模の消しゴムときたら、それはもう上手い具合に丸まっているのだ。目算で二ヶ月程度は使用しているであろう消しゴムの頭は、黒ずんだ曲線を描いていた。そうしたら次に取る行動など、もう決まっているだろう。そう、ケースを外して反対側のカドで攻めるのが定石。

これこそが他人の消しゴムのケースを自然に外す際の、完璧なる理由付けである。

「え」

俺の口から発せられた思いもよらない言葉に、相模は教科書を拾うことも忘れて慌てて身を起こし、必死の形相で阻止を試みる。その様

はまるでスローモーションのよう。

だがもう遅いのだ。その頃にはもう俺の右手は、我が国初の色彩商標登録を認められた事でお馴染みの、青・白・黒で構成されたあのケースをすでに脱がしにかかっていたのだから。さあ、今こそその白く透き通った柔肌を、公衆の面前に晒すがよいわ！

イレイザたん「あーれえー！ ぶ無体なあー！」
すぽんっ！

脳内にイレイザたん（消しゴム）の羞恥の悲鳴が響き渡る中、ついに彼女（消しゴム）の生まれたままの肢体があらわになった。

うへへ、大丈夫大丈夫、優しくしてあげるからね！

そして俺の予想通り、その白き魅惑のボディーには、とある文字が書かれていた。さあ、なんて書いてある？ バカが見るー！ か？
それとも廊下を見る、か？

だがなんて書いてあろうとも、捕食者が餌を撒く前に見てしまった以上、その文字はなんら意味を成さない。だから今からすっかり目に焼き付けてやるよ。しっかりと目に焼き付けて、こんな下らないからかいを仕掛けようとしていた相模をぶぶつと笑ってやろうではないか。
「お前消しゴムになに書いてんだ、ウケる〜！」と。

そして俺は見た。相模が言い逃れ出来ないように、その文字をしつかりと網膜にも脳裏にも焼き付けた。

え。

「ぎゃーー！！ ちょ、ちよつと比企谷なにしてんの!! なに人の消しゴムのケース勝手に取ってんのツ!!」

「え、あ、や、……だ、だからちよつとカドを使いたいなあ、と……」
「そ、それは聞いたけど！ で、でもウチに断りもなく勝手に取っちゃ

うとかあり得くない!? マジなにこいつ超サイアクなんだけど!
キモ! マジキモ! ちよつと死んでくんない!」

「……お、おう」

想定してたよりもずつと激しく罵ってくるさがみん。

そりやね、楽しみにしてたからかいを暴かれてしまったのだから、いくらかは怒ったフリして誤魔化すだろうくらいには思ってたけども、このまくし立てっぷりはそれはもう物凄い。

「そ、その……、なんだ、すまん」

「謝って済むなら警察いらないから! てか謝んなくていいから警察に捕まれば!」 もうマジ最ツ悪! 一生堀の中に居ろ! ばあああか!

おうふつ……。こうして、今までの人生の中でも一、二を争うんじゃない? ってくらいの激しい罵倒が続くのだが、しかし俺の心には、なんの怒りも悲しみも悔しさも浮かんではこない。

なぜなら、俺から強引にむしり取った消しゴムとケースを、先ほどよりも強く両手でHUぎゅ〜! っと胸に抱え込んでいる相模が、尋常じゃなく頬を上気させ、不安そうな涙目で弱々しく睨みつけているから。

そして消しゴムに記されたとある文字を見てしまった俺も、理解が追い付かずに頭がくらくらとしていているから。

「……………み、見た……?」

相模は消しゴムを胸に抱えてぷるぷると俯いていたのだが、しばらくしてゆっくり小さく顔を上げた彼女は、怒りの形相……とはちよつと違う、不安と不満が入り交じるような潤んだ上目遣いで、ようやくそう尋ねた。

「えと……」

見た? と聞かれたら見たと答えてあげるが世の情け。

だから答えてやればいい。見たぞ、と。お前消しゴムになに書いてんだよ、と、小馬鹿にしてざまあと笑い飛ばしてやればいい。

それでこのからかいに終止符を打ってやるのだ。

「……い、いや、見たもなにも、別になにも書かれてない普通の消しゴムだったか……？」

なのに俺ってばこう答えちゃう！ だって、見ただなんて口が裂けても言えませんもん。どんな顔して見たって言えばいいのん？

だから俺は二分の一の確率に賭けるのだ。ああいうのって、両面に書いたりほしくないもんだよね？

「ほ、ほんと!？」

「お、おう」

「ほんとに、マジ……!？」

「お、おう」

「……そ、そう」

……と、どうやら賭けには勝ったご様子。やはり文字が記されていた面は片面だけで、俺が見ちゃった側はなにも書かれていない面だったという与太話を信じてくれたようだ。

「……よ、よかったあ……、そつちかあ……」

そして未だ胸元で消しゴムをぎゅうつと握り締め、真っ赤な顔で安堵の微笑みを浮かべる相模南は、どこの誰よりも耳聡い俺でなければ聞き取れなかったであろう小さな声で、ぽしよりとそう呟いた。

そんな相模のホツとした横顔にパニック寸前の俺ではあるけれど、ここで勘違いしてしまうようなヤワな鍛えられかたははしていない。エリートぼつちを舐めるなよ？

バレンタインから今日までのからかいっぷり、調子に乗りまくってるウザっぷり、そしてこの消しゴム騒動という一連の出来事を頭の中でゆっくり租借し吟味して、この事態を勘違いしないで済む道筋を脳内データベースの中から必死で検索する。

すると、いとも容易く答えが見つかりました。さす俺。

——ああ、そうか、これはまた騙されるところだった。

書いてあった文字が予想の遙か斜め上をいくモノだったから思

いつきり面食らってしまったが、よくよく考えたら、からかう手段としてはそつちの方向性もあったんだよね。

………そう、書いてあった文字は『バカが見るー!』でもなければ『ろうかみろ』でもない。そこには、とても可愛らしい文字で『ひきがや』

とだけ書かれていたのだ。

うん、これはあれだ、あれに違いない。いざ罨を発動させた際は、自分の名前が書かれてて戸惑い悶える俺の様をにんまりと眺め、「なに？ 本気にしちゃったのお？ ぷっぷー！」と嘲笑う作戦だったのだ。

であるならば、餌を撒く前に先に見られてしまったら、そりゃ焦るに決まっているではないか。だって作戦前にそれを見られてしまったら、俺の事が好きだと勘違いされてしまうのだから。

この勘違いは、軽く想像しただけでも恐ろしく屈辱的だ。だってなんの罨も仕掛けてない時点で先に見られちゃったら、もう言い訳のしようがないもん。

「いやいや、それただのイタズラだから！ あんたが見ちやうように誘導しようとしたのに、あんたが先に見ちやうただけだからあ！」とか言い訳を始めたって、ただただ必死に誤魔化してるようにはか見えないもんね。

例えば俺がこの類いのイタズラを材木座に仕掛けたとしよう。しかし先にネタを見られてしまい、材木座に「ほほう！ なーんだ、やはり八幡は我のこと親友と思っていたのだな！ モハハハハ！ よいよい、そう照れて誤魔化さずとも、我も八幡を親友ポジに置いておいてやってもよいのだぞおっ!」とか勝ち誇ったブタ面で言われると思ってみろ。

………すげえな、想像しただけで殺意の波動に飲まれちゃったよ。よし、次の休み時間に殴りにいこう。

そう、つまりはそれだけのこと。

別に相模が俺を好きとか、そんな事があるわけがない。あのJCに影響されただけの、ただのからかいの一例でしかないのだ。

そもそもいい歳した高校生が、中学生でさえ「子供騙し」と一笑するような安いおまじないをするわけがないだろ。

だからあの消しゴムに書かれていたのは、あくまでもおバカで調子に乗った相模が、あのJCに悪影響を受けただけ。相模が偶然あのJCと液晶モニター越しに出会うことがなければ、決して消しゴムに文字など書く事は無かったのである。

「ほんつと比企谷とかマジ最悪ー。女子の嫌がることとして喜ぶとか小学生かよって感じ！ 比企谷ウチのこと好きすぎじゃない？ 実はこちらやってウチの気を引きたいんじゃないの〜？」

「……」

……ほら見ろ。今泣いた鳥がもう笑う、ではないけども、さっきまであれだけ涙目になって慌てふためいていた相模が、もういつもの調子を取り戻して、厭らしくニヤニヤと挑発してきやがってる。

つまり今の状況など、仕掛けた罠を先に見られていないのであれば、どうという事もない些末な出来事ではないわけだ。さすがに潤んだ瞳とほんのり染まる桃色の頬は、未だ治まってはいないけれど。

普段は攻勢の自分が劣勢に立たされたからなのか、今の相模のニヤニヤ笑顔はいつもの三倍増しでウザイ。いつもよりも水分量が多めな潤んだ瞳と、耳まで赤くなつた顔で精一杯からかつてくるもんだから、その破壊力たるや、普段の三倍では済んでいないのかもしれない。そしてこのウザさMAXで下手つくそなからかいは、未だとどまることを知らないのであった……！

「もー、マジで比企谷には困っちゃうよねー。ウチらは友達だって言ってるのに〜。そんなに友達のままでいるのがイヤなんだあ？」

「……う、うぜえ」

くそ、あのからかい上手のJCめ、相模なんぞに余計な知恵を与えやがって。おかげでドキドキさせられっぱなしじゃねーかよ。

だから俺は、この面倒くさい事この上ない事態を作ってくれたあのJCに、せめてものこんな恨み言をばしよりと呟くのだった。

「……………くっそう高木さんめえ……………」

おしまい？

「へ？ だれよ高木って。うちのクラスに高木なんて居ないけど。てか、ウチ高木なんて人聞いたこともないんだけど、うちの学校にそんな人居たっけ？」

「え？…」

「え？…」

え？ さがみん高木さん知らないのん？ 今までのつて高木さんの模倣じゃなかったのん？ 高木さんの見事なからかいっぷりを観たからこそ、真似してからかって楽しんでたんじゃなかったのん？

え、じゃあ今までのつてなんだつたの？ 高木さん直伝のからかいじゃなかったの？ 消しゴムのひきがやってどういうこと!?

……………な、なるほど！ あつぶね！ 高木さんなんて知らないフリして、こうしてさらなるドツキリを仕掛けてくるまでが相模のからかいだったのか！ またしてもやられちゃったぜ。

危うく、今までのつて別にからかつてたワケじゃなくて、ただ好き好きアピールしてただけだったの？ 俺のこと大好きなの？ とか思いかけちやっただじゃないですかやだー！

……………くっ、からかい下手だと思ってたのに、思ってたよりもやるじゃねえか相模。

……くっそう、からかい上手の相模さんめ〜！

おしまい☆